然るに此偉觀は單に支那にのみ限られたものではない。日本に於ても當時支那に於けると同じく智識上の覺醒があつた。ひしろ前世記に於て覺醒があり、それがこの第十世紀にまで繼續して來て居たのである。言語の優美になつた事に於てその社交的竝に物質的生活の進歩に於て第十世紀の日本の宮廷は歐洲に於て見る最も完全なる最も燦爛たる宮廷に等しくあつた。無上の權力を有したる一天萬乘の皇帝は、泰平なる御世を治め、貴族や學者や藝術家の上に君臨せられた。風もならさぬ泰平の御世は即ち智的な樂しみを奬勵する事になつたのである。王公とその保護を受けて居る文人との間には、穩かな競爭が行はれ、それで文才のあるものが相當の位階を得るやうになつて居た。詩歌を作るといふ事は身分あるものゝ教育の第一義としてあつたもので、人々が會合して優麗な言葉を交ふれば忽ち其處に詩や歌が出來、巧みな比喩とか比較とかゞ必らず口をついて出て來る。その最も秀れたるものは貫之であつた(紀元八八四年に生れ九四六年に死す)。

また藝術家の內畫家や彫刻家等はその支那風の技藝を學び、互に技を競つて巧

みに東洋獨得の自然の姿を寫した。紀元第七世紀から第九世紀に亙つて漸く繪畫が盛んになつて來たが第十世紀に及んでは支那風の影響が盛んであつて、宮廷のものはみなその風をなし、繪畫もまたそれに洩れず、所謂掛けものとなつてそれが顯はれた。といふのは日本人は今でも左樣であるが、當時から自國の人種的特色を失はずして而も周圍の文明を同化する能力を持つて居たから、斯くの如く支那の風を巧みに自國化したのである。當時日本人は支那人を招聘し陶器や象牙細工や彫刻物等を持つて來さした。その外なほペルシア人を招いて金銀の象嵌をした鐵の器物をつくる事を學んだ。併し日本人は師より勝つて其技藝を進歩させた。即ち其先生たる支那人若くはペルシア人から優美堅牢なる材料を得て後これに色彩の美とか、際立つた意匠を施す事をしたのである。またその文學は島國的でやゝ技工に失した處はあるが、純美なるものである。其言語はまた漢語の混和のために惡い影響を受ける事もなく、文人は多少の矯飾はあつたが一種の技工をなし、その技工に依つて極めて平凡な思想をも巧みなる詩文に化したのである。これが即ち日本文學の黃金時代で有名な紫式部が其時の有樣

を寫眞的に書いて居る。且つ此黄金時代は時を經るに從ひ、其東洋的色彩の美に依り益〻人の心を惹くやうになつたのである。

只不幸にして此時代はあまりに短かゝつた。それより忽ち亂暴狼藉な封建制度が國中に廣かり、以後七百年間藝術と文學を追放してしまつた。

さらに吾人は遙かに遠方なる印度の方面に當時文化の發達を見た。第十世紀に於けるカムボディヤは頗る隆盛な狀態にあつてかの全マレー半島の主權を執つて居る程であつた。カムボディアはそれより以前も永い間勢力を持つて居たので、紀元七世紀にセーロンから佛敎の書物が到來してからブラーマ敎は衰へてしまつたが、其以前からクメール人（Khmers）はメーコン河畔のプナン（Pnan）からサップ・ムイル（Thap-muil）に至るまでの間竝にクイヌホン（Qui-Nhon）からサム・リープ（Sam-Reap）に至るまでの間に無數の立派な藝術を所有して居る事を誇りとして居た。當時の盛んであつた事を證明するにはアングコル（Angkor）の聖殿なるものがある。これは今や人跡至らぬ森林の內に埋られて居るのであるが、なほその壯嚴なる門竝に殿堂其他穹窿門若くは立像などを高く空中に聳やかして居て、

探檢者をして斯く立派なるものに接するのを得るかと驚嘆せしむるほどである。凡てカムボディヤの紀念物等は精巧をつくしたもので、その內にも黄金のやうに細工された石塊の如きは、立派なもの〻例になる位であつた。

これと同時にペルシアがまた道德上進歩の高所に達した。ペルシアに於てはイラニア人とマッサルマン人竝にシェム人との混和から新らしい言語が出來た。それから古のバクトリア（Bactria）王國の傳說が詩人フィルドーシ（Firdousi）の手に依つて大敍事詩となつてあらはれた。フィルドウシの大作は即ちシャー・ナメー（Shah-Nameh）といふので、その意は列王の書といふのである。フィルドーシはマホメット敎の生れであるが、その詩心を皷舞されたのはイラニア人の理想に依つたので、前後六十年間イラニア人を賞讃する事を怠らなかつた。かれは其天才に依りまた其能力想像力に依り更に又自國の古代史に關する智識とその宗敎竝に國語に對する智識とに依り、東方のホーマーと言はれる程であつた。顧れば印度にはマハー・バラータ（Mahá Bhárata）があり、ギリシアにはイリアッドがあり、中世にはニー

ベルンゲンの歌(Nibelugen lied)とローランの歌(Chanson de Roland)がある。ペルシアには列王の書(Book of Kings)があり、何時も文學の世界に於ける最も著しき紀念となるべき作物である。

二

ペルシアの事を說いた序にまたペルシアの道德的思想がマサルヤン(アラビア)に勝つて居たと述べたが順序を以て吾人はこゝで其出立點即ちアラビアの文明にかへらなければならぬ。此文明は第八世紀に隆盛になつて來たのであるが、吾人は漸く其影を見失つて居たものである〔有名なフランスの文人エルネスト・ルナンはアッバシテス時代(The Abbassides)のアラビア思想は何等創作的のものを出さなかつた、たとへば其法律の如きもその長所はペルシアの移住民とイラニア人の學者から得たのだと云つて居る。併しイズラム即ちアラビヤ思想の事に精通して居る批評家の內にはこの說に反對するものが數多ある。それ等の人はアラビア思想の立派なものである例として、先づアザム(Azam)の哲學(メタフイヂックス)を擧げて居る——此哲學は如何にも立派なものでまたアリストートルのとは餘程異つ

たものである〕。

由來アラビアの地は天恩に浴して居る幸福な地である。物質上の供給は潤澤で人は快く樂しんで默想に耽ける事を得、從つて極めて微妙な感受性を有するに至る。かくて日常生活の用語よりはよく心意感情の如何を述べるに適する明確な平衡を得た言葉に對する趣味を養ひ得て、それが進んでアラビアに於ける美しき言語に對する愛好の情は即ち音樂と共にアリアン人竝にヘブリュー人の歌を作り出した原因ではないか。先づこんな事からアラビア人もアリアン人またはヘブリュー人の如くにマホメットの出る餘程以前に「名譽の競技」といふものを試みて居た。これは辯舌の競技でかのマホメットの宮殿のカーバ(Kaaba)に於ける作詩なるものも實にこれであつたのである。人祖アダムが住んで居たといふ場所に建立したこのカーバの寺の蔭で、時の最も辯舌に長じた人々が、熱心にその競技の賞與を爭つたのである。それは丁度古のギリシアに於けると同じ樣に智力の量に對して冠を授けるのであつた。併し其處で連續した詩の出來るやうになつたのは第五世紀の終りにモハ

ルヒル(Mohallil)といふものがカシダ(Kasida)といふ詩の第一卷を作つた時からの事である。かくて國語は第六世紀の始め以來充分に發達し、其結果はアラビア文學の曙光となり、その急速の發育となり、更に其黄金時代に到達する事になつたのである。ムアラカット(Muallakat)といふ詩はその時の作物であるが、それにはアラビアの自然が人に與へる影響、人の熱情國民間に於ける人種の競爭、その良馬に跨つての放浪生活等が大膽に盡かれて居る。戰士アンタール(Antar)の如きも戰後その陣營に集まつた自分と同じ武士の勇武を賞讃してこれを歌に謠ひ、又自己の勝利竝に自分の愛人の事さへ歌つた位である。當時はまた作詩上若くは思想上色々の習慣や各種の守るべき箇條が定まつて居なかつた。之は言ふまでもなく創作の上には多大な利益であつた。之を例ふれば抑情といふのは後になつてはアラビアの詩學で微かに分類され、其感興の原因の如きも十種に分たれるといふやうになつたのであるが、此時はまだそんな區別はなく只其想像力を一方に馳せて大きな詩を作る事が出來たのである。併し詩といふものは彼等アラビア人の唯一の學問であつた。かれ等は事物に熱心ではあつたが、全く無智無

學の人民であつた。詩を外にしてかれ等を敎訓するものはなかつた。然るにマホメットが此時出て宗敎的革新的思想を鼓吹し、ここに文學上一轉期を作り出した。このマホメットの出現の時期は戰勝の時代で、アラビア人はこれを呼んでモハドラン(Mohadran)と稱して居る。マホメットは紀元六三二年六月八日に死んだが、アラビアに於ける宗敎上の統一はこれを以て成就された。其處でコーランがアラビア語の模範的クラシックとなり後に出た諸の解釋若くは註釋の原本となつたのである。

ヘジラの時(マホメット遷都の日)からアッバシデスの時に至る間は、文法學者、聖經の註釋者、說敎竝に祈禱の筆者、立法者なるもの〻輩出した時代である。マッサルマンの法律は徐ろに補足されて漸く其基礎を固くし、將來に亙つて不易な一定せる觀念を示す浩瀚なる記錄とならんとして居た。立法に關する學問は嚴格な宗敎上の制度と共に、マホメット敎國では非常に重んぜられて居た。殊に四人の立法家はその創立者たる名を博して居る。即ち大師と呼ばれて居たヌーマン(Numan)マリック(Malik)チフィ(Chafi)殉敎者のハンベリ(Hanbeli)で、これ等の人々はみな一派

の學校の頭で、或はオットーマン帝國に或はアフリカの北部或はエヂプトにまたモロッコにそれ〴〵その勢力を有して居つた大敎師である。サワス・パシャ(Sawas-Pacha)の(Studies on Theory of Mussulman Law)參照」。

オミヤッド派の君主時代[この派の君主はヤジュド、アブダル・メリック、ヒシャム(Yazud, Aabd-al-Melik, Misham)の三人である]よつて詩が出來始めた。この時からが即ちアッバシテスの光彩ある時代で、此時代と比べるとサルサニデス(Sarsanides)の時代の如きも遙かに遜色がある。歐洲西方の諸國が封建制度の重荷の下に呻吟して居た間に東の方バクダッドに於ては斯くの如くアラビアの文化で優美な風俗と文學上の修養とが盛んに行はれて居つたのであつた。殊にバクダットの建立者なるアルマンサル(Almansar)の即位とモタワッケル(Motawakkel)(紀元七五四年—八六一年までの君主)の暗殺に至る時期は一種獨特なる光榮と盛大とを殘した。これはみな智識上の自由寬大竝に習俗の微妙なところから起つた事である。その間にあつては最も讀むに堪へた著作は黃金塚(Golden Fuld)で、作者は聰明な畜家で、大膽な史家であるムサ・ウーディー(Musa. Oodee)である(この書は〈ジラの三三二年即

ち紀元九四四年に出來たものである。これは大部な書物の一端で、その缺損竝に缺點あり。其他秩序分類等に於て不充分な、ところはありはするが、なほアラビア文學の最も有益な書物で、其調子の流麗な事やその趣味の微妙な點が特に著しい。著者は學者で文人で、此歷史がまるで小說のやうな興味をもつて居る。著者は斯くの如くして斷片的の事實をよく連關さして居るのである)。

吾人はこれ等に依つて當時の生活の樂を見る。人々は頗る對話を好み、これに依つて從來東洋に於て見る事の出來なかつたやうな趣味と智力とを示して居る。なほアラビアには藝術上の學理も極度に發達して居た。要するに宮廷の光榮であつた詩人の氣品ある奔放な文體や、矯飾に傾くとまで思はれる程精緻な感情、其觀念の正確な事その概念の微妙な事、これ等がアラビア社會の快樂の基となつて居たのである。アラビアのこれ等の大家の事を考へると吾人の心は自からその地をはなれて、アラビアの詩とギリシア、ローマの詩との間には非常な區別があるに拘はらず、再びペリークレスやオーガスタンの時代に入つたやうな心持がするのである。アラビアの詩人文人を保護した君主はハルン・エル・ラシット、ア

ル・マムン、アル・ハケム第二世(Harun el Rachid, al Mamun, al Hakem II)等であるが、これ等の人は丁度イタリア或はフランスに於てレオ第十世やその第十四世のやつたやうな事をしたのである。

アラビア本國に於けると同じやうにムーアの君主(マホメットの征服したアフリカの地もスペーンの主領も皆其征服した土地を美化する爲めには少しも勞力をおしまなかつた。かれ等はコルドヴァ(Coldova)を新らしい矯奢な都としてメッカと競爭した。また文學上に於てはバクダッドとダマスカスとの衰運と共に此コルドヴァが其中心となつた。其上コルドヴァは又マホメット敎の主領等の聖都となり、王や學者や僧侶の住地となつた。學生は諸方から此地の學者に就いて學ぶために集まつて來た。藝術家は集まつて各種の寶石岩礁を細工して宮殿を建てた。其最も立派なるものは即ち有名なアルハムブラ(Alhambra)である。この他トレドーにもグレナダにも立派な殿堂は建立されて居る。それと共に詩も亦各種の藝術と共に靜かにまた盛に至る處で修練されて居た。

マホメットの立つや、至る處むしろ破壞的の力を示して居たが、爾來二世紀にして

昔の矯激な弟子はその趣を一變し、またその昔アレキサンドリアの圖書館を燒きすてたといふやうなことは想像もされないやうになつた。紀元七四二年と八四六年とのあひだにアラビアの文明は非常な勢で發達し、バクダッドの君主領崩壞したにかゝはらず、その文明は一二五八年のトルコの侵略にいたるまで繼續した。その文明の有樣を一瞥するに醫學や天文學はアレキサンドリアやキュフてバクダッドなどの大學に榮えた。またシリアやペルシアや、コプトや、ヒンドーやまた就中ギリシアなどの哲學的著作がアラビア語に飜譯されたのもみな當時の事であつた。哲學者や數學者や天文學者や精密學者等は其神秘的抽象的研究から偉大な具體的發見をなした。また文法學者、歷史家其他の博學の士も顯はれた。一言にして蔽へば智識に對する熱愛の起つたので、かれ等は凡てのものを研究したのである。たとへばピサンチン(東ローマ)の神學は科學を排斥し、またラテンの學問は奇蹟とか迷信的の處方若くは聖者の舍利などを用ひて醫療の術として居たに拘はらず、アラビア人はギリシア及びアレキサンドリアから得た堅實なる基礎の上に醫學を建立し、且つ發達さして居た。其師なる人は即ちネ

スリトアス派の學者竝にユダア人であつた。亞細亞に於ける阿弗利加人は前者即ちネスリトアス派の學者に依り、また阿弗利加に於ては後者即ちユダアの學者に依つて多大な影響を受けた。そして兩者の間に於ける共同一致の點は神の唯一なる事であつた。

由來ユダア人は有名な醫者をもつて居た。そして國王や高官のみならず、キリスト教會に屬する王公さへもその助けを求めた事がある。さてネスリアスの門弟等は初めから人體の組織竝に其病氣等を研究して居たものである。かれ等はシリル(Cyril)と埃及の敎派との隱謀に遇ひ、外ヒオドシアスのためにコンスタンチノープルから逐はれたので、去つてカルデア學派なるものを建て、エデッサ(Edessa)の大學なるものを組織し、それを以て各種の學問の中心となした。かくて大きな圖書館が數多建てられ、アリストートルや長プリニーの著作其他ギリシア、ラテンの著作がシリヤ語に飜譯される事になつた。サラセン人はこれがために非常な利益を得、それから又つゞいて全人類がその恩澤に與かつた。

かくギリシアの哲學その他の學問をギリシア語竝にシリア語からアラビヤ語に飜譯した事に增して緊要な事件はない位である。これ等の事はカリフの保護の下に十世紀から十二世紀までの間に成就された事であつたが、歐洲の文學はその恩澤に依り各科の學藝に關する最も信賴するに足るべき著作に接する事を得たのである。併し其原書なるものに至つては、かの大文藝復興期に至るまでは接する事を得なかつた。アラビア人は斯くの如くにして百科字典を歐洲に傳へ、また醫學や博物學に關するギリシア本の飜譯を殘して行つた。若しアラビア人が居てこれを果して呉れなかつたならば、それ等ギリシアの學問は滅亡してしまつた筈なのである。併し幸にしてそれが保存されたのであるからそれは今後永久に忘れられないであらう。素よりアラビアのこの不完全なる小文明は一時その光を發したのみで程なく消えてしまつたが、併しその少しの光は散じて世界の文明の上に立派な仕事をした。

新時代は更に有力な更に强固な文明を以て開かれんとして居る。新時代はこの從來の文明を煩瑣學派の運動の中に投入してしまつた。この煩瑣學派が中世紀特色の一で、それは幾多の缺點のあるに拘はらず、學藝に專心した事は近代に入

る道を馴らしたものを言つても良いのである。

第十章

歐洲各國の國風竝に國語成る——信條の獨裁世界を左右す——信條の獨裁を免れんとする平民的國民的詩歌の當初の力爭——武勇を賞讃する歌謠の起り——武士道の歌(Chansons de Geste)——此種の歌謠自ら冒險及び武士道に關する哀傷的物語に變ず——圓卓の一團——その起原——圓卓の物語は今や隆起せんとせる歐洲文學の審美的觀念竝に一般の豫望に異常なる影響を與ふ。

一

吾人が今說いて來た迄の處では、歐洲に於ける諸國民團體の進步竝にその思想及び制度等の進步は、極めて遲々たるものであつた。吾人がローマと野蠻の混和から脫出するのは容易でなく、發展は殆ど解らぬ位であつたが、併しながら皆無ではなかつた。

舊世界は日々其占領した領土の減退して行く有樣で、シャーレマン帝がその偉大

なる天才を以て野蠻的要素をまとめて聖ローマ帝國なるものを建立したその人爲的結合は、今や四分五裂の狀態に陷つたことは前にも述べた通りである。而してその帝國の遺物としてはたゞ相爭ふ種族の徒らに集合し、若くは解散し、互に其基礎を据えんとする幾多の團體の集散するに過ぎなかつた。併し此集散から永い年月を經て別の結合が出來たそれは之までのものよりは少し自然な組合せで、即ち近代の歐洲諸民族なるものがその間から從來のとは異つた特質、性格竝に別種の運命を以て生れて來たのであつた。この無秩序混亂な時代は第九世紀から第十一世紀まで續いたのであるが、これが即ち將來の邦國をつくるに至つたのである。これは難局ではあるがまた確實なる道程であつた。其間に起つた事件、帝國竝にシャーレマン家の衰亡、封建制度の建立に先だつ無政府の狀態、敎會が第十一世紀に至り終に開放して自由になる前に受けた苦難、これ等は所謂近世の方に向ふ徐々たる發展を證明するものである。

歷史の上には色々な不思議な事が起るものであるが、此間にも同樣な事があつて、サクソンの皇帝等が何時の間にか基督敎の保護者となつた。願ればこのサク

ソン人種はその少し以前にシャレーマンから武力を以て基督敎を强ひて敎へ込まれたものであるに、今其人種に屬する皇帝が該敎を保護するといふ運命になつたのが不思議なのである。

この時歐洲の北部に於ては將來歐洲人種の活動に多大な關係を有する民族がやうやくその頭角を持ち上げ始めて居た。即ちハンガリア人、ボーランド人、ロシア人及びスカンディナヴィア人等がこの第九世紀竝に第十一世紀に於ける人文上の運動に關係のあつたといふ事は中世史上の最も興味ある問題の一である。

飜つてイギリスは其獨立の國家の體をなすまでには、幾度か自由と奴隸の境遇を過ぎて來た。デーンス人とサクソン人との爭ひ、ノルマン人の權勢等は即ちその浮沈で、殊に後者ノルマン人の如きはイギリス從來の勢力を挫いて凡てのものを其權力の下に壓抑するに至つた。將來に於て偉大な活躍をする人種もその當時は斯んなものであつたのである。

更にスペーンに於けるキリスト敎徒は、劍の力に依つて回々敎の輩からその獨

立と自分等從來の信仰のみならず、其鄕土を回復し、此半島裡に間斷なき戰の間にありながらその國家を建立した。

社會が斯かる變遷の狀態にあるに際しては、人の思想も亦靜止して居る筈はない。卽ちシャーレマン破壞の下に地中に埋まつた藝術は漸く芽を出し始め、人の精神的生命も覺醒し始めた。然るにそれが當時絕對な權力を持つて居た神學のために、往々抑壓されたのである。神學は實に凡ての智識凡ての道德的理論の中樞と考へられて居たのである。人間の想像力は殆ど宗敎的學說やその半知半解の敎に依つて圍繞されながら、なほ且つ時々活躍するのであるが、而も其原動力は何處から來るかと言へば、矢張信仰といふ源泉から起つて來たものである。併しながら事物の運動なるものは決して孤立的のものではない。必らず何等かの關係が前代に繫がつてあるもので、今や人の想像力はかの人心に多大な感興を與へたギリシア、ローマの文學のことを殆ど忘却してしまつては居たが、なほその影響は自ら當時の信仰の上に、更にまた僧侶や諸侯の行動の上に、或は來世の賞罰に關する觀念等の上に、自ら顯はれて居た。此催かばかりの古

代文藝の滋養が殘つて居たので、それが基となつて想像力に新しい力を與へ、終に神學を以ては與ふべからざる人間の必要に應じ、また神學とは異つた感興を與へる人間自然の、而も人間に普遍なる文學を呼び起すに至つたのである。この文學はまた有力な著作としては顯はれては居なかつたが、少くともすでに有力なまた世を文化に導く力として勢力を持つて居たのである。殊に文化の上に貢献したといふのは、此新傾向の文學が人心を支配する宗敎上の事にまで關係した事をいふのである。卽ち之に依りて基督敎は古の文化の名殘をもその大系統の內に收めてよくその大を致す事を得たのである。

かの不思議なローマネスク風の建築が古代の建築から轉化して顯はれて來たのも、上記の古代文學から新文學が起り、それが宗敎の上に影響したといふ事を說明するに足るであらう。大寺院の石造の建築部を見ると、必らずこの新建築風が宗敎と關係して居る證據を示して居て、恰も文學上にそれが顯はれて居る通りである。

斯んな風で兎に角敎權が最大な勢力を有し、これに對して競爭を試みるものは

なく、人の良心を支配するものも他になかつた。また慾望の滿足も宗教以前に出る事は出來なかつたのである。世は平穩になり、戰爭の道德若くは侵略掠奪の恐れもなくなつたので、キリスト教の流れは水の低きに就くやうに、何等の障害をも受けずに進んで行つた。併しその教は矢張中世紀の教で半ば殘忍に、一方には極めて謙讓であつたが一方には驕慢であつたのである。人民は恰も僧侶の爲めに抑壓されて居て、多くは僧堂にかくれ、默想と祈禱とに耽り、其色ガラスの窓下に神樣の事を考へ、且つ自ら色々の罪惡の事を考へてはその心を苦しめて居た。無論僧侶はさういふ事に專心して居た。難行苦行や斷食祈禱入禪といふやうなことがその唯一の務めで、恰も牢獄の中へ入つたやうに自分と世の中を狹くし、思想を制限し、所謂世を遁れてたゞ天の王國をのみ熱望して居た。かれ等は人生は幾多の陷穽即ち恐るべき罪や墮落の危險に依つて取りまかれ、惡魔の誘惑は常に彼等を魔道に引き入れんとして居ると信じて居た。斯くの如きは只僧侶のみならず、また俗人の身にもあるべき事であると考へて居たので、僧侶などはこれ等俗人を改宗させるに熱心して居たが、其熱心の度ど

いふものは前後其比を見ない位であつた。それ故心の持ち方、日常の行爲を如何にすべきかを敎ふる案內等に關する書物は澤山にあつて、各種の人々の趣味に應ずるやうに出來て居た。多くの敎義を書いた書物、法令の註釋、高僧傳、傳說集、古い哲學から集めた格言集、比喩の物語、其他聖經の說明に關する書物などもあつたが、それが凡てまた上記の心の持方、難行苦行等禁慾の目的の爲めになされたものであつた。こゝに於て僧侶等は互に鬪爭して天國に於ける報酬の多からん事に力を致した。有形のものはその生物たると否とを問はず、何でも人の心の狀態即ちその道德若くは惡德を代表する象徵となつた。自然界の現象も亦宗敎的思想若くは其說明の爲めに用ひられるやうになつた。併し斯くの如く諸方面から人の行爲を制限し、責め立てたに拘はらず、敎を傳へる僧侶の行爲そのものが、そのすゝめを受ける俗人の行爲に比べて立派でも高尙でもなかつたのは事實である。

二

が併し斯くの如く徹頭徹尾說敎ばかりして居る事が、當時の人々の公私の道德

的訓練の上には利益があつたとしても、只それだけでは結局人間の好奇心を滿足さす事は出來ぬ。それは人に敎訓を與へるかも知れぬ。併し喜樂と休養とを與へる事は出來ぬ。こゝに於てか終に國民的詩歌の發芽が見え始めた。諸方の人民は其未だ試みざる新鮮なる力を以て此思想發表の方法即ち詩歌を取り扱ひ出した。そしてその起原はツルーヴェールとツルバドール(Trouvères and Troubadours)とにある(ツルーヴェールとツルバドールとは一種の行吟詩人の總稱で前者はフランスの北部、後者はその南部に起つたものである)。

抑人の感ずる感興が一般的になり、それを發表する言語が一種の意義を有するやうになつたのは十字軍に依つて起されたる大刺激のためである。この十字軍は即ち武士的武勇の精神と宗敎的熱情とを鋒起せしめたもので、それが一轉して自ら普通の詩的感興を起す原因となつたのである。それには先づ各種の俗謠があつて、それから後極めて粗末な併しながら人心の自然に基いた敍事詩が顯はれた。この敍事詩はそれを吟誦する人に依つて各所に歌はれたものであつたが、格別その作者の名を重からしむる程のものではなかつた。此種の敍事詩の適

例はメロヴィンジャン時代の有名なる第七世紀の聖ファロンの歌(Song of S. Faron)といふに認められる。さてツルーヴェールとツルバドールなる二種の歌謠は大したものではないとしても、極めて武勇的のもので、また封建的貴族制度の思想とその生活狀態との忠實なる鏡であつた。それから此種のもので最も早くまた最も名高いものでは武士の歌(Chansons de Geste)といふのがあるが、その骨子となつたものが、之もメロヴィンジャン王家(Merovingians)の下にフランスに起り、それがシャーレマン帝並に先帝チャールスの下に著しき發達をなして終に現在見るが如きものとなつたのである。現代のフランス、ドイツの大家がこの問題に就て研究したものは皆有益なものであるが、特に武士道の歌(Chansons de Geste)の起原に就てのガストン・パリス(Gaston Paris)の作は緊要な作である。

シャーレマン帝以下の時代になつてのこの作には強大な愛國心強烈なまた勇ましい精神、軍隊や一騎打ちの記述、自然の敍述、並に超自然の事等を明らかに認められるが、滑稽的な事若くは諷刺的の趣は全くなくなつた。下つて十一世紀の終りの頃になつてはローランドの歌(Song of Roland)といふのが顯はれた。これ

は後來武士道の歌(Chansons de Geste)の長い歌の第一章となるもので、その古いのと同時に最も彫琢を經た最も立派な作物である。この歌の中心となつて居る人物は無論ローランドで、これはフランスのアキレスとも言はれる人物であるが、果して實際にそんな人が居たか否かは解らない。半ば歷史的の人物で通例シャーレマン帝の甥と言はれて居るのであるが、併し今後ローランドは歷史上の實際世界に於けるよりは物語傳說の世界で、大事な位置を獲るやうになつたのである。ローランドの名はキリスト敎の傳へられる處には必ず伴つて行き其文學に顯はれて來る。斯く其名の廣く傳はるのは不思議な事で、吾人がその實在のローランドに就て知る處は極めて僅少であるが故、殊更其文藝上に於ける高名が不思議に感せられるのである。

斯くて學者や僧侶等が古い文體若くは半ば野蠻なラテン語を以てその思想を表白せんとして居る間に、全く異つた種類の文學が所謂文化の中心以外の處に建立されかゝつて來た。第十二世紀の前半に於ては最も普通に行はれた。上記の武士道の歌(Chansons de Geste)が一般聽衆の注意を引き、また其心を動かしたもの

であつた。即ち城塞に於て諸侯が戰場から歸つた時とか、また多人數の集會があつた折とかには歌ひ人及び所謂「行吟詩人」なるものが、竪琴若くはヴィオルを携へて來り、その席でローランドやオリヴァやアイメリやナルボンヌや又はオレンヂ侯ウィリアム等その他の諸帝王竝に其武士の武勇を歌つたものである。その歌は藝術上の作物としては幾多の缺點を有し、また文體に個人的の特性を備へて居なかつたが、これ等の叙事詩は民衆の上に多大な影響を及ぼした。その詩は凡て武士道的精神を以て充たされ、その詩中の人物は往々野性を有し、必らずしも吾人の同情を惹くものではなかつたが、なほ生命あり實際的で架空的ではなかつた。そしてこれほど人民の感情を完全に表白したものは他になかつたのである。何となればこれ等の詩はまた一面に當時のやゝ殺伐な時代の精神と一致して居たものであるからである。

併しその叙事詩なるものは千遍一律で決してその趣を更めない。その動機は古のギリシアの叙事詩に於けるが如く制限されたものであつた。たとへば森林の、生活、不思議な冒險的行動、自然との親しき接觸若くは愛情の微妙なる趣き、さて

は勇士をして絶えず未知の事物を探究せしめんとする想像の働き、それ等の事は一向に知られて居なかつた。その結果は只奇想をのみ重んずる事になり、一地方の物語傳說に限られて居たのであるが併しそれがまた急速な勢を以て傳播し、歐洲の詩に變化を與へるやうになつた。即ちその變化は感情の表白と超自然に對する考とその使用とにあるのであつた。

それで武士道の歌(Chansons de Geste)がだん〳〵衰微してからはこれに代つて戀人の誘惑や宮廷の爭や其他不思議な冒險の話が行はれて來た。初めにはカロヴィンジャン家の勇大チャールス・マーテルやペピンやシャーレマン(Charles Martel, Pepin, Charlemagne)等の友即ちガリン、オレンヂのウィリアム、オジヤ・ローランド(Garin, William of Orange, Ogier Roland)等がその詩歌の(シャンソン・ド・ジェスト)題目であつたがそれがアーサー王の傳說になつては、不可思議な豫言者マーリン(Marline)となり、湖畔のランセロットと(Lancelot of the Lake)となり、又不運なるトリスタン(Tristan)及び奔放なるゴーヴェン(Gauvaine)となつた。初めの叙事詩中に顯はれる猛烈な熱情に富んだ女丈夫なるリディア、ブランシュフリール、ギブルク、オラーブル(Lydia, Blancherfleur, Guibourc and Orable)等はなくなつて、アーサー傳說中の柔和な美人となつた。則ちイソルデ、ギネヴィヤ、ニニッド、ヴィヴィヤン(Isolde, Guenevire, Enid, Vivien)等がそれである。

一言にして蔽へばシャンソン・ド・ゼスト時代の猛烈粗野な叙事詩も漸くアーサー傳說の稍優美なるものと代つて行つたと云ふのである。中にもトリスタンとイソルデ(Tristan and Isolde)の話はケルト思想を代表してローマンチックな愛情の適例となつた。併し此新しい詩即ちキリスト敎思想と東洋的奇異なる事蹟との結合であり、またセルマニックの冒險的精神とウェールス(即ちケルト)の傳說の結合なる此アーサー傳說が、その詩から國民的の遺蹟即ちシャーレマン帝等の事蹟を拂ひのけて、全く別種の叙事詩を構成するには多少の時日を要したのである。斯くてアーサー傳說が傳播するや人間思想の傾向は全く一變してこゝにシャンソン・ド・ジェストの要素なるメロヴィンジャン家の物語は盡くその跡を斷つやうになつた。古風の叙事詩の題目はなくなつて婦人と愛情とがそれに代る詩の題目となり、古から用ひ古るした劍とか馬とか裏切りとかサラセンの勇士とかいふ題目は全く棄てられてしまつた古いシャンソン・ド・ジェストを見るとよく解る。例へばそ

の內のガラン・ド・ロー(レーン(Garin de Loherain)の如きは適例である。これに依つて見ると兜が破れたとか頭を切られたとかいふ事計りで、武士は相會ひさへすれば必らず切り合ひをする。一寸した私人の爭ひでも忽ち軍士一隊を繰り出して爭ひ、非常な血腥き戰を呼び起すといふやうな有樣である――譯者曰く斯くの如きは啻にシャンソン・ド・ジェストのみならず、餘程優美になつたといふアーサー傳說の中にもなほ折々その名殘は見られる」。

古い叙事詩に於ては戰爭の記事のために多大な紙面を費し、また一騎打の如きは無限につゞいてあつたものであるが、それが後の傳說たとへばアーサー物語等に至つては空想的な變化を帶びた冒險的物語となつて居る。詩人の感興がすでに和いで來てその詩の內に出て來る人物も餘程人間らしくなつて來たのである。

要するに愛情を嘆美する事が、文學上にも社會にも非常に大事な事になりこれが人々の想像力に影響を及ぼした事は偉大であつた。

これと共にフランスの南部に於てはツルバドール(Troubadours)といふ詩人の一

團が抒情詩の方に專心してしまつて、その精神は狂人となるほどに熱して來た。婦人達は自分等を賞讃して歌つてくれる詩人をよろこびむかへた。それ故ツルバドールの詩人は自ら宣言して、自分等は王公に比して更に幸福なものであると言つた位であつた。更にフランスの北方に於てはツルーヴェール(Trouvères)といふ詩人の一團があつて、これが武士の試合、戀の喜び、人生の樂しみ、竝にその愛する貴婦人の美等を賞讃して居たのである。

今や道德的宗教的思想竝に社會の習俗は著しく優美になり、それが日々增進して一種の神秘主義とまでなつた。優美になる傾向が神秘主義となつたといふのは、稍〻辻褄のあはぬ感もあるが、其次第は次のやうな譯である。從來婦人といふものは何事にも只背景に置かれて居たものであつて、男子のみが絶對の君主として內外に主權を掌握して居た。然るに此時に至つて婦人が正面に顯はれて來て談話をする活動をする。その影響が自ら顯はれて來る、至る處に其力を示すやうになつた。惡を矯正せんと欲するものはその道德的の力に依る事になつた。男子は婦人の前に膝を屈して忠實ならん事を誓約し、封建制度に於ける君臣の關係

の如く手をとり合つて其誓を極めるやうになつた。

以前は婦人を以て虚榮心と不忠との塊として、これを男子よりは劣等のものとして居た。世界に罪惡の入つて來たのは婦人のあつた爲めである。人類が苦痛と懊惱の內に生命をつゞけて居なければならぬのも亦婦人故であると古のものは說いて居た。尤もかれ等と雖、婦人を保護しない事はなかつたであらう。併しそれは只弱者に對する憐みの情から起つたことである。然るに今や婦人は殆ど神聖なものと考へられるやうになつた。凡て婦人なるものは神の聖母(Mother of God)を禮拜するといふ一種の思想の內に包藏されて崇められてしまい、婦人の意志は即ち法律となり、婦人の言葉は即ち命令となつたのである。メロヴィンヂャン家の諸侯は、只人類の永續といふ考から、婦人に對しては只肉情といふ點からのみこれを見て居て、高い戀愛といふ側面は知らなかつた。然るにアーサー傳說中の人物になると、飽くまで戀愛を神聖なるものとなし、これを微妙なるものとして大に敬重した。そしてさういふ考は伊太利にも、プロヴァンス(フランスの南部)にも、イギリスにもまたフランスの北方にも行はれたのであつた。こゝに至つて優美

に趣く傾向は婦人學科といふ一種の神秘主義となつて顯はれたと云ひ得るのである。

斯く理想を追ひ象徵を崇ぶ(婦人を以て神聖とするは即ち象徵の尊崇である)結果は一般に藝術の遠大な目的を究め、また事物の微細なる解剖に對する趣味を起させるやうになり、これまでは一向に考へられなかつた新しい感情やまた智的な習風が物語を書く人の心を侵略して、こゝに從來萎縮して居た詩が再び蘇生する事になつたのである。

三

この新傾向に依つて最も動かされたものはフランスであつたが、フランスに依つて其他の諸國もまた利益を得たのである。實際フランスは歐洲の道德的標準となつた。質を言へばフランスはすでに武士道の歌(Chansons de Geste)その他武勇の物語に依りその創意的詩的の才を示し、哲學に於てはアラビア學派からかりたものでアイルランドのスコタス・エリジナ(Scotus Eregina)に依り適用せられた頃、瑣學派の助に依り、キリスト敎の組織の上に貢獻する處があり、また建築上には

ゴシック風の大建築を完成したことに依り、更に政治にはその都市の組織制度を定めた事に依り、また外國に向つては十字軍を熱心に助けた事に依り其特性を顯はして居た。如何にもフランスの歴史は西洋に於ける人道の歴史である。フランスは實に中世紀の終りに於てこの高い地位に坐つて居たのである。

第十一章

第十三世紀の概況——其初期に於ける各國文學の根本的一致——イギリス、フランス、ドイツ竝に南歐の民族間に於ける文學及び藝術の一樣なる發達——ツルーヴェール及びツルバドール——アングロ・サクソンの行吟樂人——ドイツのミンネジンゲル——民族間の詩歌、宗教萬能主義竝に封建的弊風の勢力を一掃す。

吾人は今十二世紀の初めに到達した。當時歐洲の大部は準備の狀態にあつたが、その準備といふのは即ち將に來らんとする新進文學を呼び起さんとするその感興を蓄へて居る事であつた。

當時代に於て實際に活用せられて居た國語は漸くその力と基礎とを得始めた(殆ど死語となつて居たラテン語が從來は勢力を持つて居たに對していふ)如何にもアングロ・サクソン語はまだノルマンの語の桎梏を脫して居なかつたのは事實である。イギリスがまたかの勝利者ウィリアムの屬從者に依つて分立されて

居た間は其發布する法令もノルマン的佛語で書かれて居た[ノルマン語とフランス語とが一致結合するまではイギリスの文書もフランス語で書かれて居た。グロースターのロバート(Robert of Gloucester)の書いたもの3内に注意すべき條下がある。それに依つて見ると當時即ち紀元一二七六年頃にはフランス語がまたイギリス上流の用語であつたといふ事である]。尤も斯くの如き狀態は一方からの反抗を招いた。即ちイギリス土着の家族等は或は森林中に或は濕地の間に隱れて居て、折々活躍をなし、ノルマン・フランスを逐ひ拂ひ、自國を自由にする事を力め、また時にはそれ等に對して勝利を博し之を屬從させた事もあつた。さういふ先例があつたので國粹の保存に潛心して居たもの等は、寂しき寺院とか或は田舍の隱れ家とかの內にあつて、これまで散亂して居た自國語の年代記とか斷片的な歌謠若くは俗諺などを大事に保存して居た。のみならず當てローマの文化に對して反抗したイギリスの人民は今も亦このノルマンの文化に對して反抗し、富有な人々權力ある人々の之を喇罵するに拘はらず、なほ敢然としてサクソン語を用語としてつづけて行つた。言ふまでもなくノルマンの勝利者と共

にその國語を以て歌ふ行吟樂人(ミンストレル)もつづいてイギリスに入つては來た。併しそれ等の歌人はかのツルーヴェール(Trouveres)(フランスの北方ノルマンの邊に起つた歌人の一團)の詩の極めて朧なる反影を傳へるに過ぎなかつたので、その勢力は著大ではなかつた。が兎に角そんな狀態でアングロ・サクソン語はその頭をもたげる事は出來なかつた。アングロ・サクソン語がその存立を明かに認められたのはチョーサー(Chaucer)の出現に依るのであつた。さてイギリスとは方向を異にしてドイツを見るに、その最も華かなるにアスピア時代に於て中央高地の獨逸語(Middle High German)が進んでドイツの趣味や思想やまた言語をまで改造せんとして居た。またイタリアに於てはダスカンの俗用語が全く文學用語とされるやうになつて來た。スペーンはまたその國語が混沌として居て、立派な思想や感情を自由に顯はす事は出來ない樣な狀態であつたが、なほその表明の爲には努力して居た。更に古はデーンス人(Danes)の記錄も此時代から起つたものらしい。またスウィーデンの文學は武士道の話を摸擬し始めて居た。スラヴ人も亦昔のスラヴの形式を以て[第九世紀にシリル及びメソダス(Cyril and Methodus)が用ひた]ビサン

チンの宗教的感興を文字に示したの等であつた。併し不幸にして此處には蒙古の襲撃があつて、その智的社交的發達を早く阻害してしまつたので、その文華を見る事が出來なかつた。

フランスに至つてはその國語は到る處に用ひられて居た。近傍の諸國は勿論の事遠くはシリア、アルメニア、サイプラス、コンスタンチノープル、アゼンス、ネープレス、ナヴァール、ハンガリー等にまでその勢力は及んで居た。フランスの信用すべき歷史家の言ふ處に從ふと、十三世紀に人がパリからエルサレムに旅行するに、フランスの領土以外に足を踏み出さずして行く事が出來たさうである。以てフランスの勢力の如何に大きかつたかは解るであらう。

斯くの如く歐洲各國の言語は同時にその固有の特色を發揮するやうになつた。バイブルの翻譯並に國字に緊要な文書等は此時初めて近世語で書かれる事になり、益〻其發達を促した。從來ラテン語を以てせられた歷史も特有の散文に依つて書かれる事になつた。即ち之まで學者のために作つたラテン語の年代記(歷史)は相應な長所文體を有し、また普通のラテン語とは異つた美所をも持つて居た。

のであるが、今やそれが人民の爲めに作られる年代記を以て代へられる事になつたのである。フランスの最も古い散文家は、デオッフロア・ド・ヴィラールドアン(Geoffroy de Villhardouin)といふので、その著作の調子は武士道の物語に酷似して居るが、この人の作の如きは最も注意すべき例となつて居るのである。

同時に百科字典の類竝に摘要の書類が公にされるやうになつた。これは即ち中世紀そのものが、自己の智識の範圍を顧み、その程度の如何を調べたものと考へられる。其一例を言へばッルバドールの詩人ピエル・ド・コルビアック(Pierre de Corbiac)が「寶(The Treasure)といふ本を編纂した。これは極めて簡單な書物であるが、あらゆる智識を緊縮して、それに一々説明を附したものである。またダンテの先生でもあり(神曲の內に顯はれる人物)辯舌家で、詩人で、政治家で、歷史家で、哲學者で、また神學者であつたフローレンスのブルーネット・ラチニ(Brunetto Latine)も同樣「寶」と題する書物の內に、ドニニカン派の僧で中世紀のブリニーとも言はれたボーヴェーのヴィンセント(Vincent of Beouvais)のラテン文の著作を北方フランスの方言であるオイルの語(Langne d'Oil)に飜譯しやうと試みた事もある。其他これ等と同樣に當時の

著名な人達は皆其多大な勞作の結果を世に捧げんとして居た。今その人々の一二を擧げればアルバート(Albert the Great)はアリストールの哲學並に博物學に關する著作を歐洲に紹介し、アレキサンダー・ヘールス(Alexander Hales)は不屈のドクトルと言はれ、トマス・アクィナス(Thomas Aquinas)は三段論法その他の論辯並に詭辯に關する議論を以てアリストートルの論法の中核を明かにした。此他スザのヘンリー、オーヴェルニュのウィリアム、ロージャー・ベーコン(Henry of Susa, William of Auvergne, Roger Bacon)等みな一代の名家であつた(此内にアルバードは色々の點において當代の人々に立ち勝つて居た人で殆ど魔術者と考へられて居た位であつた)。

當時法典も亦百科字典と同樣熱心に訂正された。その上僧正等にも賢明な人達があり政府の權利とか義務とかいふ考から思ひ附いて、時代の思想幷にその要求に從つて敎會の條例をも改正せんとした。法皇インノセント第三世、グレゴリー第九世、ボニフェス第七世等はみな此種の人である。これ等の法皇はまた法律を制定し、之を實際に用ひ、判事として其席に即き、法律の絶對權を示し、進んで浩瀚な法典を發行し、また法律の學校を建設した。之がまた國法の起原となり、それを基として各國の法律が出來、之に依つてこれ等の國々の個人が保護を受け、恩澤を被むる事になつた。有名なサービア並にサキソニーの鏡(Mirrors)之はフレデリック第二世の下に獨逸で出來た初めての法律であつたが、此法律書とエルサレムの巡回裁判(Assizes of Jerusalem)の佛譯であるセント・ルイの法制(Etablishments)——これはピエル・ド・フォンテーンとフィリップ・ド・ボーマノールとに依りて集められた頗る大事なものであるが、この二つの法典は皆この適例となるべきもので、その內には古のカソリック的並に封建的組織の最も精密な文書を包藏して居るのである。

純然たる智的若くは社交上の學藝と竝んで實際的事物も亦世間普通の誤想を免れ、迷信的實驗の境地を脫するやうになつた。イギリスの僧ロージャー・ベーコン(Roger Bacon)は直覺的な智識を澤山に持つて居て、當時は殆ど不思議な人と考へられて居たが、後に至つてはその學理を實際應用して居た事が了解された。またギリシアの學藝を繼承したモンペリエル及びサレルノ(Montpellier

and Salerno) の學校は醫學の實際的方面即ちその實驗に於て離れて居た。更に一方に於てはアラビア數學や代數學が紹介され、また羅針盤が一般に使用されるやうになつた。これ等は學理以外事物の實際的方面に於ける大進歩といふべきものである(ロージャー・ベーコンの全集なるものは中世紀に於ける科學的進歩の最も注意すべきものとなつて居る)。

抑〻煩瑣學派が特に神學の上に至大な努力をなしたのは高尚な智力を發達させんが爲めであつた。併しその結果神學は凡ての問題を解釋する自由を人心から奪ひ、自ら絶對的眞理の保護者を以て任じ、凡て智力上の事に關してはその君主として無上の權勢を握つて居た。その點に就ては詩や藝術と雖、その力を自由に陳べる事は出來なかつた。何者も其勢力を免るゝ事は出來ないので、神學はその系統の内に人間の活動に關する凡ての事物を收めてしまふ事になつた。法律も學問もみなその配下に屬してしまつた。斯くて神學辯證學 (Dialectic) は教師も學生も共に專心する處となり紀元一二〇〇年頃に至つては終にこれを教授するにパリの大學が建立されるに至つた。そしてこれが摸範になつて歐洲の各方面

に大學が出來るやうになつた。同時に大學では修辭學が教へられ始め、その法則や辯論が教授され、また詩學も教へられ、ラテン語の讃美歌や叙事詩や其他傳奇的な物語などを教授する事になつた。その傳奇的なる物語といふものゝ内には北方フランスのツルーヴェールや、南方フランスのツルバドール等の抒情的詩歌や、ドイツのミンネジンゲル、スペーン、ポルチュガルの物語作者の作物などを含んで居たのであつた。更に歴史に至つてはジョアンヴィユ (Joinville) がその代表であつたが、その光彩は到底哲學のそれには及ばなかつた。尤も哲學の範圍は極めて廣大で、史學も地理學も數學もまた物理學も凡てその内に包藏されて居たのであるから、その光彩の華々しくあつたのも自然な事である。

この煩瑣哲學の全盛に當つて「世界と時代とに超絶して名譽を博して居たのはトマス・アクィナス (Thomas Aquinas) の學問であつて(この世界と時代とに超絶して)といふのはアクィナスの同鄉人で、又その崇敬者であつた後代のピコ・デラ・ミランドラ (Pico della Mirandola) の言葉である)。その該博なる思想は苟くも神學を論ずるものであれば、何人をも動かさないといふ事はなかつた。かれの心には修道院の

精神が呼吸をして居たかれの一身には神秘の塊となるまでに事物の原因を求める熱心がその形をなして顯はれて居たかれは全然心を抽象の世界に傾倒し、活動と變化の世界には門外漢となつてその哲學系統を作成したかれは個人性の原理を確乎不拔の基礎の上に確立したと信じて居たかれにつゞいてはまたその弟子であり、同時に極めて親密な友人であるボナヴェンチュラス(Bonaventurus 天使の學者といふ意)と通例呼ばれて居るデオヴァンニ・ディ・フィデンツァ(Giovanni di Fidenza)が名を顯はして居る。この後繼者はアクィナスよりも敎訓的な度に於ては少ないが、その比喩とか敎義的な書物に於て神聖なる同情に依つてその心の動かされて居たことを示して居る。アクィナスは思想の光輝燦爛たるを以て勝り、後者ボナヴェンチュラスは性行の美にして且つ清きを以て秀れて居る。ボナヴェンチュラスの精神は優しき神秘主義を以て充されて居り、何事をも之を神意に歸し、全然神意に服從し、神といふ存在の內に自己の個性を沒し去つたのである。蓋し當時人は推理に依つて絕對の智識を得更に信仰に依つてその智識の如何を了解し得るといふ希望を抱いて居たのであるから、上記兩神學者の說が殊更勢力を有して居たのである。トマス・アクィナスの主なる著書は「神學の要旨」(Sum of Theology)といふ凡ての智識並に煩瑣哲學の百科字典のやうなものであるが(逍遙學派即ちアリストートルの哲學の原則と方法の上に成つたものである)これは二種の相違した要素を調和せんと欲した中世紀に於ける最大なる努力である。而してその二種の相違した要素といふのは人間に關する哲學と神に關する哲學とである」。

併しながらトマス・アクィナスの大敵が顯はれた。それはスコットランドの人でダンス・スコタス(Dums Scotus)といふ人で、アクィナスと比肩すべき元氣と自由なる思想とを有し、且つ何者を以て壓伏すべからざる慾くべき手腕を有して居つた。これがアクィナスの神學の弱點を衝いたのであつた。ダンス・スコタスの敎はトマス・アクィナスのに反し個人の自由といふことに關する學理を說き、意志に重きを置くといふ點に於て近世哲學の先驅をなして居るとも言ひ得るのである。

二

詩は社會の下層にその根蔕を据え、其活力を保つて居て、靜かなる泉の如く、湧ら

かなる流れの如く、また豊かなる瀬の如く、此處彼處に地から湧き出て來た。斯くの如き肥沃な狀態にあつたので各種の詩形も出來て來た。その詩形といふのは只古人のみが能く用ひ得たと考へられて居たもので、たとへば頌、叙事詩、諷刺詩、挽歌並に戯曲の如きものである。神とか、天とか、自然とか、光榮、愛國の念、勇氣、殊に戀愛といふやうな題目は當時の詩人の決して見逃がさなかつたもので、かれ等は又その思想を蔽ふに適する上記の形式を見付けぬ内から、漠然とそれ等の事を詩の上に顯はして居た。之がまた非常に力のあるもので、かれ等は、喜びや、悲しみや、また饗宴や、損害や、愛情や、厭惡等に亘る感情を少しも隱す處なくそのまゝに顯はした。即ち敢て修飾をする事のない自然のまゝの才能を發揮したので、それが藝術上の作品として失敗であるに拘はらず、却つてそれが爲めに一種人を引つける力を持つて居る。一言にして言へば却て自然の作つたものであるといふ特色を備へて居たのである。フランスに於ける北方の詩的進歩は南方の進歩の餘勢を受け、これを同化して花々しき發達をなした。一寸した歌に於てさへも此の北方詩人の一團なるツルーヴェールは競つて其元氣と辯才とを示した。シャムパ

ニュ州の伯爵にしてナヴァールの王なるチボー(Thibout)の如きはその適例である。チボーは諧調の宜しきを得た節奏を用ひたが、よしその節奏が自己獨特の發見にかゝらぬまでも、彼は極めて巧みに能くそれを扱つた人である。宮廷の爭ひ、やさしき向上の心並に婦人尊敬の風等は即ちその好んで用ひた詩題であつた。

斯んな工合で一方ではメロヴィンヂャンの王家並にケルト民族の武士に關する詩が色々の形をとり、種々に變化して歐洲に洪水のやうに溢れて居た間に、また別種の歌が各所に起らんとして居たのである。それは即ち極く古い時からその優美な覆唱(Refrain)と流暢な節奏とを以て特色として居たものである。この歌は即ちフランスのジョングルール(Jongleurs)といふツルバドール一流の詩人並にプロヴァンスのツロバドール、イギリスの行冲樂人(Minstrel)ドイツのミンネジングル(Minnesinger)もツルバドール若くはツルーヴェールと同種な行冲詩人の一派で、これはドイツにあつたもの等に依て諸方に廣まる樣になつた。序に言つて置くが、ミンネジングルはツルーヴェールを師とし摸範として起つたものであるが、終に

そのツルーヴェールと賞與を爭ふた事などもあつた位なものである。

第十三世紀の終りに當ては行吟樂人の詩がイギリスに顯はれ始めた(ウォーダー)。スコットの初めの最も有名な作 Lay of the Last Minstrel はこの行吟樂人の詩を摸擬して作つたものである)。今如何してこれが盛んになつたといふことを尋ねるに、イギリスを侵略したノルマンの諸徒は今や全くイギリス人となり了して、その領土に退隱し遊樂を欲しまた冒險の物語などを聞かん事を願つた。かれ等はみな武士道に精通して居たので、武勇の物語を聞かんと切望して居た。然るに丁度かの行吟詩人なるものが顯はれ、その語る處を立琴の糸に合せて歌ひ、その好奇心に滿足を與へてやつた。かれ等はその庫の內に、フランスの物語の飜譯やら摸倣を藏して居つたが、其話といふのはみな優美温雅の心、武士的精神といふやうなものをよく顯はして居る。斯くの如く詩的感情は盛んであつたが、また一般の民心は決してさういふ心持ちを持つては居なかつた。山賊の徒は群をなして地方を横行して荒らして居たのみならず、邊境の大名の內には部下を引きつれ諸方を脅かしてまはり、或は人を傷け或は殺し或は金錢を掠奪して行つた。併し

平和を好む行吟樂人は熱情ある調子を以て平衡を得た喜悅の心を以て聖母や或は己等の意中の人を歌ひ、斯くの如くして逆境の武士に、僧尼の樂しき生涯の事を語りかれ等が修道院に於て安心を得て居る事等を告げて、その荒き心をしづめ且つ慰めたのである。これ等の行吟詩人はまた戀愛と婦人とを讃美尊崇して居たのである。

ドイツに於ては野蠻な戰爭の話に次いで、かのミンネジンゲルの美しい歌があらはれた。スワビア(Swabia)は即ちこの一派の詩人を養つた搖籃であつた。その歌はゴシック(Gothic)の塔の影に依つて皷吹されたものである。即ちゴシック風の城の影が自からそれに相應はしき詩なり、歌なりを、彼等詩人の心の上に起さしたのである。所謂ある人の云つた鷹の巢に囀聲を洩す鳩なるものがそれで、此鷹の如き武人の城に鳩のごとき詩人が歌を詠じ出したのを言つたのである。荒くれ武者は猛いて耳をすまし、その歌に耳を傾けた。そしてかれ等自らもさういふ詩人のやうな心持を持ち、またそんな歌を作つて見やうと考へた。かれ等武人はアーサー傳說に於けるが如く初めて婦人の美とその人を魅する力とに心附いた。か

れ等は初めて心を動かされ、その心は清められた。茲に於てか戀といふものがこれ等鐵の如き心の武人に初めて宗教的丈夫的、最高な感情として顯はれた。がふる勢力のあつたドイツの詩家を擧げれば、ミンネジンゲンのまだ出ぬさきにすでにエッシェンバッハのウォルフラム(Wolfram of Eschenbach)ストラスブルグのゴッドフレー(Godfrey of Strasburg)アウエのハルトマン(Hartmann of Aue)等いふ人があつた。これ等の人は人の心を樂ましめ憐憫の心を起さしむるに足る極めて美しき婦人尊敬の話や德義の物語を其特意の才筆を以て歌ひ、同胞の心に多大な感化を與へたのである。それからほどなくミンネ(Minne)即ち戀の心といふのが凡ての詩人の心を支配し、凡そ武士たるものにして詩的感興を得たものは何等かの形に於てその美人に對する心を述べ、それに敬意を表すべきものと考へるやうになり、又出來得べくば新しい詩形を以て國語に新文字を加へる事をしなければならぬ樣になつた。こゝに於てか武士と情人とが互に分れるといふ折などに際しては幾多の優しき文や美しき對話やさらに哀傷深き痛痕の情が交はされたものである。

ミンネジンゲルは幸なる詩人である。戀のなげきは扉、その唇に上つた。彼は直にその煩ひと苦痛とを語つた。併しそれは口の上の事でその心はいつも輕快で喜んで居た。悲哀はかれの心に觸れても甚しく彼を傷ける事はなかつた。寧ろそれは彼を刺激してかれをして更に詩歌の上に力を致さしめるものであつた。ミンネジンゲルは日の輝くが如くにまた水の流れるが如くに歌つた。その喜びとする處は詩である。若し彼が婦人を賞讃する歌を詠ずるのが好きであつたとすればそれは婦人が絶えず其心に切なるものを皷吹するからである。即ち彼のその心に切なるものといふのは詩歌そのものである。

併しミンネジンゲル即ちスワビアのツルバドールの詩はあまり色彩の變化を持つて居ない。即ち個人の名はかくれて、其一派の詩人はたれも〳〵同じ題目を歌つて居る。のみならずその思想を納めて居る詩形に於ても變化が乏しい。只併しその詩には新鮮な處優美な趣があつて今日でもなほ面白く讀まれる。ポッセルト(Bossert)といふ人は次のやうに言つて居る。過去を樂まんと欲する人、近き眼界を越えて深く其探索を進めんと熱望する人には、その(即ちミンネジンゲルの)殘

した花は猶その餘香を保つて居りその泉はなほ清らかに音樂を奏し、その森林はなほ神秘を宿し、その女性はやさしきかがげらふの如き優美を保つて居る」と云つて居る。之を要するに其やさしき美は決してなほ衰へて居ないといふのである。

三

純文學を愛好するといふ事が至る處高貴な人の標となつた。王公貴人が熱心に詩の桂冠を得んと力むる事は今や極めて普通の事になつた。アイベリアの半島（スペーン半島）に於ては國王が詩の摸範を出した。アラゴンのピーター(Peter of Aragon)はスペーンの最も古いツロバドールである。學者と云はれたアルフォンス(Alphonse the Scholar)は歷史家でまた哲學者であつたが、聖母の功績を歌ひ若くはガリシア語を以て切實に其文の不思議が醫療の力を語るために特に音律を發明した。フランス及びドイツ北方の詩人が叙事詩を以て熱心に人々の想像力を皷舞して居た時に、この學者で君主なる詩人はセヴィル(Seville)の都でその短歌を作つて居た。ポルピーガルでは又デニス第一世(Denis I)がその人民に言語の音樂の

優美といふ事を敎へて居た。デニス第一世は此國に於ける文學の曙光である(ポルチュガルの文學史の初めはその君主の歷史の內に包容されて居ると言つて差支ない)。

更にイタリアはダンテ及びペトラークの來るべき立派な準備をして居た。詩はまた幼稚な時代であつたので、ドイツ、フランス、スペーンに於ける詩よりは薄弱な狀態であつたが併し詩の流れが動き初めたときにはそれが非常な勢で豊かに湧き出て來た。その搖籃はシシリーにある。そしてアッシスのフランシス(Francis of assisis)はその最も早き皷吹者の一人である。フランシスは實に崇高なる放浪的聖者で、神人同化の神歌を人々に謠ひながら往來を步き、自らは不思議な愛の力に依つて超人の生活をなし得たと信じて居た人である。ピサやまたシエナ(Pisa & Siena)に於ては藝術家が石に不滅の彫刻をなし、イタリアの美術は初めて自然に忠實なる花を開いた。即ち微妙にしてやさしき、又敬神の心を表したものである。イタリア皇帝フレデリッキ第二世の周圍にはその子息等並にエンヂオ、マンフレッド等の諸王(Engio, Manfred)その大法官ヴィンニのピエル(Pierre des Vignes)等

が居並んで是等が詩人の一群をなして居た。暫らくの間パレルモ(Pallermo)は殆ど歐洲の首都となり商業の中心となつた。この盛況はシシリーがホーヘンスタウフェン(Hohenstaufen)家の爲めに導かれて、かの有名な皇帝と法皇との戰爭に加入する時までに及んだのである。

斯くの如き有樣で當時歐洲の諸國には文藝復興(ルネッサンス)の曙光がそろ〳〵見え初め、第十六世紀の華々しき光輝を思はしめるやうな趣があつた。外部の事情時の狀態、要するに境遇はこの文藝復興なる運動の起るに都合よく出來て居た。思ふに基督敎の社會は永い間困難をして後、今やかの野蠻人の侵入以來收めんとして居た政治的形式を實際に得るやうになつた。また當時まで引き續いてあつた戰爭は異つたる各國民を一處に混せたことに依つて彼等に多大な敎訓を與へた。そしてその戰爭に次での平和はその戰爭の危險の中に學んだ事をしてその果を結ばしめた。諸侯は時々狩獵を試みまた饗宴を開きその城塞の內に幸福なる生活をして居た。その生活は即ちツルバドゥールと行吟詩人が其樂しき歌に依つて賞讃した生活である。尤もこれは勿論諸侯が互に干戈を交へ若くは十字軍に呼

び出されるやうな事のない折の事であつた。斯くの如くにして好機だにあらば凡ての第宅は何時でも一個の光彩ある詩的活動の團體とならんとして居たのである。

四

併し上記の如き狀態であつたからと云つて、十三世紀の終りが黃金時代であつたと想像するのは間違である。何となれば一方に於て人々は封建制度固有の暴戾を脫し得なかつたと共に、他の一方に於てはその封建制度の根據が崩れんとして居たのである。

當時の歐洲の世界は實に二個の權力の間に分れて居たのである。即ち敎會と封建制度で、前者は其權力の根據として僧道と法皇政治とを有し、後者は所謂武士道を以て其支柱として居た。此兩勢力が嘗て一度其力を合同した。其合同から起つたものが一個の偉大なる史上の敘事詩即ち十字軍そのものであつた。十字軍當初の努力は即ち宗敎上並に封建制度上から來た熱心に依て成つたものである。二世紀の間ローマ法皇はこの大膽な企業を繼續し、八度歐洲の全力を東方に

傾注した。併し後には如何に誅求するも叱責するも、また繰返し〳〵訴へても抑も
また破門を以て恐喝しても、其命を拒むものを動かす事は出來ず、終に主權者も
人民も此大事業に倦怠して來た。茲に於てかまたローマの權力は不可抗である
といふ事が言へなくなつた。斯くて伊太利に於ては革命的の行動を採るものが
出來、それが忽ち黨爭と變したが、それに依つてローマ法皇の權力並に勢力がど
れほど衰へたかゞ證明される事になつた。其上法皇譜代の臣隷や諸侯は法皇の
爲めに非常な武勇を輝かし犧牲をなして居るに拘はらず、未來は兎に角此世に
てのその受くる報酬といふものは極めて些少であつた。例へば十字軍の遠征の
費用の如きは彼等自らその所有物を處分し若くはその特權を賣つて之を得た
のみならず、外征中留守にして居たので諸侯はその臣下等に對する威嚴を著し
く減殺されたのである。

さて又十字軍に行つた僧侶や武士は聖地から歸つて來て見ると、何事も自分等
が出て行つた時とは變つて居る。彼等が外國へ行つて居る留守の間に彼等の知
らない言語を用ひる新世界が出現し、或は個人の權利なるものに付いて語り或

は凡ての人間はみな等しく日光を享有する權利があるなどと主張して居たの
である。

僧侶の階級に對する俗人的若くは市民的といふ考が大學並に都市と共に人々
の心に植ゑ付けられ、夫れがまた敎育や詩人の心を支配し、權力に對して戰を始
めた。初めは暗闘で覆面をして戰つたが、それがだん〳〵に大膽になつて公然や
るやうになり、道德上政治上の事物にも變化の徵候が顯著になつた。斯ういふ傾
向は疾くからあつたので、前世紀ではすでにアベラルド(Abelard)があり、これに次
ではサン・アムールのギョーム(Guillaume de Saint Amour)が出て、學問を僧侶の間から
廣めて人民にも傳へるやうにした。大學の自由敎育は僧侶的敎育上に大打撃を
與へた。更に藝術の上にも丁度文學の上に於けると同じ事情があつた。然るに工人の結
に至るまでは建築道路井戸等の保持はみな僧侶の手にあつた。公務は市民と僧侶との權力
社は終にこの特權を彼等の手から奪つてしまつた。
に依つて兩分せられ、やがて輿論は兩者とそれ〳〵特種な能力があるものと判
定した。即ち大學は事物を敎へ、工人は建築を司り、國王と其大臣は政治をするも

のといふ事にきめた。かくて宗教に對する信仰は消滅しはしなかつたが、中等市民の常識は批評的になり稍〻宗教上の信仰を疑ふやうになり、宗教の束縛を以て丁度封建の弊害と同じくこれに堪ふるに忍びぬやうに感じて來た。吾人は當時普通に行はれた諷刺に於て之を認める。

その上マニキアン(ペルシアのマニといふ人から起つたキリスト教の一派)の信仰から反動の起つて以來宗教に對する輕侮の念が人民の心を支配しまた社會各階級の間にある爭も增加し、折だにあらば宗派が起つた。或るものはその主張に依りカソリックの雷に對し挑戰し、正統教會に不信を置くに至つて終に火刑に處せられ、その火刑の灰燼から一派の宗派が起つたといふのもあつた。信仰は一般に冷却し、前世紀偉大なる宗教根據も最早乾燥した論理の乾かし去つたその流を回復することは出來なかつた。まるで信仰はマングのジアン(Jean of Meung)の諷刺する處となり、若くは意地の惡い狐物語(Roman de Renart)の著者等の嘲弄となつたのである。

第十四世紀に於ては道德の標準は下向し、眞正なる温情のなき狹隘なる形式主義が往昔の自然の性情と熱心とに代つて起るやうになつた。斯かる主義や傾向は宗教審問の暴戻と百年戰爭の擾亂と共に天才の火を消すに至つた。殆ど百年間プローヴァンスの文學はアルビゼンセス(Albigenses)に對する猛烈な十字軍の結果として其隆盛を回復する事は出來なかつた。吾人はこのプローヴァンスの文學が一時其光輝と美觀を呈した事を想つて慨然たらざるを得ない。抑〻プローヴァンスの文學の榮えたのはオックの語即ちプローヴァンスの語がヴェンスからフォア(Foix)に至るまで、またポアチエ(Poitiers)及びロアール河(Loire)畔からカスチル(Castile)の境に至るまでの間に用ひられて居た時のことである。此語の諧調よき慣用語は各種の道程を經てイギリス、ドイツ、ボヘミヤ及びハンガリアにまで入つて行つた。斯くの如くにしてオックの語即ちプローヴァンスの語を用ひたツルバトールはイタリア、スペーンの詩、殊に前者の詩の基となつた名譽を擔つて居る。しかし今やこの成功と光榮とは消滅してしまつた。そして一二一〇年のツルース(Toulouse)の包圍に於ける流血のため全く其聲を潛めてしまひ、只折々薄弱な聲をあげる外第十四世紀に至るまで再びその盛時を回復する事は出來なかつた。

第十二章

新時代の生るゝ苦悶——第十四世紀の沈淪せる光景——各種の人民及び各種思想の激烈なる變化——宗教改革の前驅者——ウィクリフ——ジョン・ハッス——プラーグのジェローム——文藝の漠然たる運動に對する政治的社交的事實の優勢——東ローマ帝國の沒落——沒落のためギリシア文學はコンスタンチノープルよりイタリアに來る——スペインに於けるアラビア文化の沒落——フランス思想の比較的貧弱——文化の燈光イタリアの手に移る——文藝復興の曙光。

第十四世紀は歐洲全部に於ける激烈な變化の時代であるが、同時に幾多の害惡がその束縛を脫して人類の上に思ふまゝに働きをなした時代である。第十一世紀の初めは幾多の災害のあつた時代で、フランスの僧侶ラウル・ガラベル(Raoul Glaber)がその有樣を記述して居るし、また東方の歷史家がバシル第二世(Basil II)の治世を記述して恐るべき事件や烈しき疫病等その他無類の禍例へば戰爭と

か無政府の狀態とか種々なる不吉な事のあつた事を述べて居るが、それ等の恐るべきものもこの第十四世紀の恐るべき事物には到底及び難い程である。全歐洲は火に包まれたやうであつた。ホーヘンスタウフェン家(Hohenstaufen)の封建的帝國と法皇政治とは永劫の鬪をなして互に其力を消耗して居た。この非常なる爭鬪の亂暴な事は人間の良心と信仰心とを麻痺さしてしまつた。アヴィニョン(Avignion)とローマとは醜汚を極めたる爭をなし、兩方の僧侶は何れも貪慾極まる不潔汚穢な人間である。法皇は一度び選ばれるかと思ふと忽ちその位を引き下され、汚れたる法皇は更に汚れたる法皇に依つてその位を奪はれる。これ等は法皇黨となり、非法皇黨となり、戰をなし、互に呪咀し、互に破門を仕合つて居た。王國は何れも振動され、人民は失望の內に呻吟するといふ有樣であつた。內亂はイタリアに於て日常の事であり、戰はローマの市街に行はれ、ゼノアとヴェラスとは互にその怨を報ずる度の强さを競つた。またネープルスとミランとに於ける黨派は其亂暴なる行動に於て無類であり、又スペーンに於ては基督敎徒がムーア人を屠殺せんとして居たが、また此異敎徒を外國に逐ひ出す事は出來なかつ

た。無殘なる惡みが各州を滅ぼした。カスチルとマラゴンとは孰れが最も慘酷な虐殺者を出したか頗る判定に困しむ位であつた。即ち前者には殘忍といふ渾名を得たピーターといふものがあり、後者には典例の遊奉者と云はれた同じくピーターといふのがあつて其殘酷といふ點に於ては競つて居たからである。而してナプールにはまた實に夥しい害毒を流した禿頭といふ名のチャールスが居たのである。さらにフランターやオランダの各州も血の川をなして居り、ボヘミヤとハンガリアとにはスラヴ人とチュルコマン人との間に恐ろしい爭が行はれて居た。北方ではロシア人が韃靼人やスイーデン人と死物狂の爭をして居り、ギリシア人モンゴリア人トルコ人が入り亂れて戰をなし、進んで小アジアに於ては バジャセットの恐るべき侵入が旋風の如くにやつて來た。彼は都市を拂ひ國を荒らしつゝ其手兵を引さげて進めり。かれはニコポリス(Nicopolis)の上に下りその進路を阻害せんとせしカソリックの聯合軍を鏖殺し、法皇の位をさへ危くせんとせり。斯くてかれは西帝國に於けるキリスト敎を灰滅せんと計れり。然るに蒙古の勇將タメラン(バグダットの古跡に九萬個の髑髏を以て造りたるピラミットを建立

せしを以て有名なる王)アジアの荒原より疾風の如くに來り、バジャセットの上に墜落し鏖戰してこれを破れり。歐洲は慈心眩目してこの兩勇の會戰を觀望せり。實にかれ等兩勇は龍卷の如くに血の雨を降らせしなりといふが此眞相であつた。絞罪臺火刑柱等あらゆる人間の惡心の標徽となるべきもの及び自然より來たる災害の結果は至る處にあつた(たとへば黑死病の如きは、西方の諸國を盡く侵して居た)さればかゝる時代に於て歐洲は如何なる智的進歩をなし得たであらうか。

素より斯くの如き恐るべき第十四世紀の初めの有樣から考へて見れば、フランスの文明は多少の光輝を示さないでもなかつた。社會の墮落にも拘はらず都市と田舍との人民を亡ぼした不幸のあつたにも拘はらず、位置の高い人々の內には皮相的ながら一種の文化を保有して居た。吾人若しかの評判の寫實家であり、歷史家であり、また實見者であるジョン・フロイッサート(John Froissart)の記錄を見れば、當時の封建的驕奢が其美しき字句の內に顯はれて居る事を認め得る。當時またヴァロア(Valois)の宮廷は最も著しき中心點となり饗宴並に仕合その他の武

士的活動の舞臺となつた。一言にして盡せば王公の會合所となつたのである。併し國民が其歴史の最も暗黑なる時代に際會して居る時に當つて如何なる理由ありてか斯くの如き王公を喜ばしめた歡樂に對し、國民の心即ちその詩人や藝術家の心が感興を起し得たであらうか。夫れは到底あり得べからざる事であつた。

更にまた王フィリップは殘忍に、ヴァロアは輕薄に、凡ての貴族は無責任に、中等民族の精神は貧弱に、社會一般は野蠻であつたとすれば如何にしてそれが藝術の復興に便宜を與へる事が出來得たであらうか。由來フランスは文學藝術の天地に於ては第十二世紀と十三世紀との間に於て先進の榮を擔つて居たのであるが、今やそれが他人の肩に歸せんとして居たのである。即ちストラスブルグとコルン(Strasburg and Cologne)はフランク人が建立した(olus francigenum)かの一種の學派の本據となつた。又これより後はイタリアに起原を有するアヴィニョンの畫家がその特長を承認されるやうになり、フローレンスとローマとに於ては托鉢僧の組合が富を作り得て自ら藝術の保護者である事を誇り始めた。一言にして蔽へばフランスに對してイタリアがこれまで黨派政爭のため混亂の狀態にあつて、絶えずその進路を害されて居たに拘はらず、此時に至つて急速に進歩を始めたのである。

二

ダンテの神曲(Divine Comedy)は斯かる間に生れ出たものである。抑イタリアは古のギリシア、ローマの特別なる後繼者で、他の歐洲諸國とは異つて、古典的藝術竝にその趣味を示したものであるが、この神曲はイタリアが近代に於て未だこの趣味を明かに示さゞる時に際して、一種のローマンチシズムの例として生み出したものと言つて然るべきものである。而もそのローマンチシズムたるや其勃興する事が永い以前から豫期されて居たものであつた。さてイタリアの言語は偶然なのであつたかも知れぬが三人の天才に依つて成されたものである。其第一はダンテで、これはイタリア文學に入る第一の莊大なる門口である。第二はペトラークでこれはツルバドール歌人の最後のものであり、また最も秀れたもので抒情詩を復活させ再興させたのである。第三はボッカシオ、これは物語作者の最

も秀れたもので優美にして流麗な散文竝に明快にして巧妙な辭句を作り出した父と云はれ且つその創始した文體を如何なる場合如何なる思想にも適應せしむるやうにした人である。これ等の大家はその作物に古いラテン語の變體を用ひる事を止めて古典の純粹なる摸範を求め熱心にヴァージルやホーマーの用語を研究したのであつた。ペトラークの古文書探求は有名なものであつたが之に次ではリエンジ(Rienzi)ボッカチオなどが起り何れも成功したので續いて多くのイタリア人はフランスやドイツの所謂牢屋の中に埋められて居る古文書を世間に引き出す事を始めた。ペトラークの古文書に對する熱心といふものは實に非常なもので親ら集めたものをまた親更にその門生をして數多書き寫させ、それを廻章のやうに順に回はして凡ての門生に讀ましたといふ事であつた。恰も古の人が所謂神々に對してなしたやうな宗教的獻身を以て成し遂げたのである。吾人はペトラークが貴重な古文書を發見するのを豫期して僧院に近いた時其心臟の自ら鼓動するのを止め得なかつたといふ事を讀み、または恐らく永く求め漁つて居たものは此處にあるであらうと考へた時の深い感情に就いての記事を讀む時、如何にも其文獻に對する熱情を察せざるを得ぬのである。公衆の心は斯くの如きローマンチックの熱誠を以て皷舞された。時偶好機に際會してギリシアの學者の渡來があつた。パキメレス、ニセフォラス、プラヌデス、カシタクゼヌス、クリソロラス(Pachymeres, Nicephorus, Planudes, Cantacuzenus, Chrysolarus)等のイタリアへ移住した事が即ちそれで、これ等の人々は其本國に於ける壓制を逃れてイタリアに學問の芽を持つて來たのである。其芽はやがて生長して次の世期即ち文藝復興の時代の光榮となるべき果實を結ぶものであつた。

イタリアは斯かる有樣であつたが、其他の歐洲の諸國は、其進歩が孤立して居て、遙かにイタリアの後塵を拜して居たので、先づイギリスを見るにその先頭には來たるべき幾多の作家の前驅として、チョーサーが燦爛たる光輝を放つて立つて居る。併しチョーサーは恰も離れて立つて居る一里塚のやうに孤立して居る。其輕快にして優揚なる文辭は創作的天才の力を以て豐富にされて居り、その作には一種の目的を持つて居るに拘らず其内に

は外國文學(イタリア文學)の精粋とも云ふべき最も美しきその花を集めて居る。そして其結果は新鮮にして且つ全然創意的な作物となつたのである。イギリス人の思想若くは想像力は直にチョーサーの後を承け創意の高所に達せんとして居たのである(チョーサーの影響は後代にまで續いた。即ちドライデンがチョーサーの物語を近代的に改作し、またリー・ハント(Leigh Hunt)等が同様な改作したが其證據である。併しそれより以前にあつてはサー・フィリップ・シドニー(Sir Philip Sidney)の作並にエリサベス朝の戯曲にもその影響は明らかに認められる。また更に古くヘンリー八世の時代に於けるジョン・ヘーウッド(John Heywood)の作曲はイギリス歌舞伎の初めとなつて居るものであるが、これが又チョーサーの作から直接に其材料を取つたものであつた。序に言ふがチョーサー自らも戯曲の才があつたかとも思はれる。第一に脚色を編む事が上手であつたし、第二には對話を以て性格を顯はす才も中々侮るべからざるもので、その最も長とされて居る記述の筆にも劣らぬ程である。併しながら其發達は突然停止せられた。即ち内亂竝に宗教革命に至る騒亂の爲めに防げられた。第一にはロラード(Lollard)の運動に依り續いてはワット・タイラー(Wat Tayler)ジャック・ケード(Jack Cade)などの早急な企業、その社會主義又は共産主義に依り、更に後になつてはランカスター、ヨーク兩家の爭(薔薇戰爭)のために文學は放棄せられ、詩はその眞正なる價値ある復興を見るためには十六世紀の後半まで待たなければならなかつたのである。

翻つてスペーンは來たるべき時代の豫想を只一寸ばかり示したに過ぎなかつた。來たるべき時代とは即ち半島の文學史に最も華々しき光彩を顯はした時である。併し當時スペーンは只カスチリアのラベレーときまで言はれた有爲なヒタ(Hita)の高僧なるジュアン・ルイヅ(Juan Ruiz)の異彩ある姿を見たのみであつた。その詩は數多あつたが、先づ父と子と聖靈の名を以て始まり、各編皆互に連關したものであつたが、その内には比喩談あり、引用句あり、歌謡あり、ヴィーナスの頌あり、聖母讃美の歌あり、戀の話あり、卑猥に亘る光景あり、種々なる小話ありといふ有樣であつて、何れもその結果は說教に終つて居る。この種々雜多なる詩の内にてスペーンの未だ嘗て示した事のなかつた最も不思議な最も空想に富んだ天才

が顯はれて居る(A de Puibusque; Comparative History of French and Spanish Literature 參照)。同時に獨逸はホヘミア、ハンガリアと同じく內亂の笞の下に苦しみ呻つて居た。が併しその中から詩人の一派を出しては居る。例へば手工を職とする一團の內からマイステルジンゲル(ミンネージンゲルの後を承けたる平民詩人の一團)なるものが顯はれ諷刺詩を作つた。その諷刺は即ち當時の封建制度に對する不平不滿の怨みを述べたもので、封建の罪惡害毒といふものは當時四方から攻撃を受けて居たやうであつた。この手工を職とするもの即ち廣い意味に於ける職工等は鐵砧の上に打ち下す金槌の調子に合せて、その詩を作つたといふ至極風趣に富んだものである。

これ等のマイステルジンゲルの最後の人をハンス・サックス (Hans Sachs) といふ。これはヌレンブルグの貧乏な靴屋であつたが、ゲーテは此人を敬重して自らの作詩の上の敎師の一人だと云つたので、其名は永くドイツ國民の記憶から消えなくなつた人である(ゲーテはこの平民詩人の詩風を摸倣し——その作詩は數七千を超して居る——ハンス・サックスの作詩上の天職(Hans Sachsens Poetische Sendung)なる一篇を以て不朽の讃辭を彼に呈して居る。

三

第十四世紀及び第十五世紀はフランスの非常な危機に際した時であるに拘らず、道德上社交上著しき進歩のあつた時である。由來ローマの法皇政治は極力智識の進歩を妨害せんと試みたに拘はらず、日を追ふて理論追求の方法の精密になり行く爲め、かの超自然に對する信仰は漸々人の心を惹かぬやうになつた。夫れと共に神學の外に醫學と法學とが獨立したる學問となり、夫れが中々勢力を有して來た。神學者は凡ての智識は神から來たものであると信じて居たのであるから、此二つの學問を以て敵として取扱つた。即ち法律學は形而上の代りに科學的論理を以てせんと欲したといふので、また醫學の方は之まで疑念を挾まずして承認されて居た自然の現象に對する神秘的說明に反し、現實的の說明竝に人の經驗に信賴するものであるといふ點から反對されたのである。中世紀は凡て宗敎を以て凡ての說明の基本となし、之に依つて一大綜合をなしたものであるが、今や時代はこの敎學的綜合の時代より哲學的分解の時代に入らんとして

居たのである。

この十四十五兩世紀にはまた重大な事件があつた。即ちフィリップ・ル・ベル王(Philip le Bel)の下に國家の宗教的要素を離れた事、ヴァロア(Valois)家の下に世俗的遊興の復興した事、エチアン・マーセル(Etienne Marcel)の主領の下に智力あり愛國心に富める中等民族の起つた事、ジャン・ダークの下に愛國的理想の生れた事、チャールス第五世の下に行政的活動的政府の成立した事竝に最後に最も緊要なのは世界の表面を革新すべき異常な發見のなされた事等である。

之と共に神學上の論爭並に宗教上の騷亂がイタリア、イギリス、ドイツの各所に起つて居たが、その中から一種新らしい産物が出て來た。即ち平民的觀念(デモクラチック・アイデア)である。宗教に於ける權威に對する反抗的復讐的精神は十四世紀の書きものには必ず顯はれて居る。極めて輕微な文學の上にも顯はれて居る。この反抗復讐が即ちやがて平民的觀念となるものである。今その例を擧ぐればフランスに於てはツルーヴェルの諷刺となり、獨逸に於ては諧謔に富むチル・オイレンスピーゲル(Tyll Eulenspiegel)の滑稽的傳說となり、イギリスにては百姓ピエールスの幻(Visions

of Piers Ploughman)となつた。この最後の書は即ち勞働者ピーターとも云ふので、このピーターといふ男がウースターシャー縣の小山の上から明瞭に僧侶貴族との有樣を見下し用捨なく夫れを批判したものである。この外またイタリアにも同種類の作物があるがこれはみなフランスのを摸擬したのである。併し貴族僧侶に對する反抗の聲は中々これ丈けでは濟まず更に聲を高くし調子を重くして精神界の最も高い威嚴の府即ち法皇の政治そのものに挑戰し始めたのである。

その反抗者には先づイギリスにウィクリフ(Wiclif)といふものが一三六七年に顯はれて居る。丁度エドワード第三世の御世であつたが、之はまた正にローマ並に僧侶に對して非常な不平のあつた時代である。即ちロラード(Lollards)の一揆があつた。衆議院は教會附屬の財產を盡く押收しやうといふ提案を出した。キリスト新教は之より後百五十年にして初めて出來上つたものであるが、此時將に危くそれが成立を告げる處であつた。ウィクリフの反抗は勿論僧侶の腐敗に對して起つたものであるが、夫れと共に教會の教義に對しても反抗したものと云つて

差支ない。即ちこの宗教改革の先驅といふべきウィクリフは大膽に教へた。曰く、聖晩餐の式に食する麵麭は實際のキリストの肉ではなくて只その表徴である事、曰く、ローマの教會は他の教會に對して主上の權力をもつ權利のない事、從つてその僧正も他の僧正に勝つて居る筈のない事、曰く、罪惡のある教會はこれを破門してその所有物を奪ひ上げる事は正當であるといふ事、曰く、バイブル一冊は即ち各キリスト教徒を指導するに充分で、教會は他に信徒の必須用書を授けるの必要のなき事等、これ等であつた。然るに時代の傾向とバイブルの俗語に飜譯されたことに依つて、このウィクリフの説は非常な便宜を得て社會に散布されるやうになつた。そして此ウィクリフの説といふのはその多分はツールのベレンジャー(Berenger of Tours)から來たもので所謂聖餐の麵麭がキリストの肉になるといふ説、並に法皇の最上權に對し此人は先づ當初に反對した人であつた。そんな有樣で暗く間にイギリス人の大部分はコバム卿(Lord Cobham)の指揮の下にロラード(Lollards)の名を取り、然らざるものはウィクリフの門下であるといふやうな事を云ひ出した。併し此當初の改革的精神は教會と王家と竝に貴族聯合との

力に依つて打ち滅ぼされてしまつた。但しそれは全然打ち滅ぼされたのではなく、その精神は暫く年代を置いてこれ等殉教者の血の中から再び湧き出るやうになつたのである。併しイギリスに於てはヘンリー八世の即位の餘程以前に既に僧侶壓伏の機が來て居た。そしてイギリス人はジョン・ボール(John Ball)の説教に依り、凡て人間は平等であるといふ事を知つて居たのであつた。

又十五世期の初めに當つて二つの革命的計畫のあつた事は注意すべき事である。第一は上流の僧侶に依つて起されたもので、即ち僧侶會議そのもの〻内から起つたものであつた。第二は之と反對で激烈で熱情的な性質を帶びて居たので、ジョン・ハッス(John Huss)なるものとその黨との下に人民から起つたものである。ジョン・ハッスは福音書と初代基督教の教ふる所に從つて近代教會の王公等に對し公然反抗をしたので大騒亂を起した。それが爲めにコンスタンスの會議(Council of Constance)に呼び出されたが、ハッスはシジスマンド帝に依つて與へられたる保護條例に依頼し會議に出席した。併し到着するや捕縛せられて牢獄に入れられた。

次で一四一五年六月五日に鎖につながれながら判事の前に引き出され、會議は異端に對して與へた約束若くは契約などは之を破棄しても差支ないと宣言して、かの保護條例を無視してハッスを捕へた事を是認し、更に三十箇條の彈劾を以て此勇敢なる敎徒を責めた。彼は膝を屈して此宗敎の審問を傾聽せしめられ終に其身體はその著作ともに燒棄すべきものと宣告された。彼は斯くの如くにしてプラクのジェローム(Jerome of Prague)と共に火刑に逢ひ、聖歌を誦して從容死に就いた。之を聞いたボヘミアは全國沸騰し、齒噛みをなして彼等の死に復仇する事を誓つたが斯くの如き形勢は二十五年も繼續した。

四

偉大なる政治上並に社交上の事件は不安なる文學の世界の進歩の上に著しい影響を與へるものである。

一四五六年に此種の大事件が起つた。そしてその事件の繼續がやがて一時代の終を示し、また次の時期の初を劃すことになつた。吾人は既にマホメット第二世の襲擊の下に東ローマ帝國の滅廢したことを說いた。此マホメット第二世はバジゼッ

ト及びアムラット第二世(Bajazet, Amurath II)の後繼者で、その位に即くや直に東ローマの首都なるコンスタンチノープル侵掠の計畫竝に實行に努力した。彼はラテン人の想像した如く野蠻的猛將でもなくマホメット敎の盲信的信徒でもなかつた。彼は學識あり明智あり、よく五ヶ國の言語を語り、數學と軍學とに精通し、藝術の趣味があつて藝術家を寬大に取扱つた。宗敎に關しては心から懷疑的で、マホメット敎もキリスト敎も共に虛俗の敎であると考へて居た。それで確乎不拔の決心を以てその政治上の目的を斷行したので、その心に於ては自らビザンチン王國に君臨しやうといふ外何等の事をも望まなかつたのである。

當時の歷史的事件は東方と西方とを混和した。卽ちビザンチンの君主はトルコの侵略に對して屢〻ローマの助力を求めた。此兩者の共同竝にその結合は少くとも一時は東西兩敎會分離の爲めに起つた兩者の間の離隔を取除ける力を持つて居た。處が其處へ突然マホメット敎國がコンスタンチノープルの城下まで攻め寄せたといふ報告があつた。ニコラス第五世は聲を上げて西帝國の王公や人民を進めて東方の帝國を援けさせやうとしたが、その甲斐はなかつた。彼等王公も

人民も互に敵視して居て爲めに、その力は削減せられ、また人民もその社會に於て優勢ならん事を欲して、このビサンチンから來る苦悶の叫聲には耳をかす暇を持つて居なかつた。

爲めにコンスタンチノープルは一四五三年五月二十九日を以て落城し、爲めに先づ落命したものはローマ帝の最後たるコンスタンチン・パレオロガス(Constantine Paleologus)であつた。城の沒落と共に多數の人民はサン・ソフィヤの公堂を以てその隱れ處とした。斯くて婦人や小供や僧侶等は今にも天から天使が下りて來て、その强大な劒をふるひ野蠻人の侵入を止めてくれることと信じて居た。然るに恐るべき强暴なるトルコ人は市府に漲つて敎會堂にまで入つて來た。人々の待ち設けて居た天使は顯はれて來ず、男女は捕へられ奴隷として連れて行かれてしまつた。その日回々敎の時刻を報ずる男が、サン・ソフィヤの高塔に登りマホメット敎國の勝利を宣言した。斯くの如くにしてコンスタンチノープルはアンチオク、エルサレム、アレキサンドリア、カーセージ等と同じ運命に陷つた。且つ其滅落と共に東方の希臘(ヘレニズム)思想も滅落する事になつた。

さて此東帝國即ちビサンチン帝國は當時までローマの法律を保存し、古代の製作やギリシア、ラテンの作家の傑作を所有して居たのである(ウルフ氏(Mr. wolf)の統計に依れば、ギリシアは古代の諸國が世界に殘した千六百種の著作の內、その中には完全なのもあるが紛失したのもあるが、その四分の三を所有して居たといふ事である)。

然るに恰も此ビサンチンの沒落の前にギリシア語は復活して、之に依つて多少の作物が出來た。それは素より古のギリシア文學を寧ろ辱しめる位のものであつたが、併しなほ且つその古の大文學に依つて養はれたものではあつた。其處へこの帝國が野蠻なる襲擊に出會つたのであるから、その學者などはよし保護を受け得たと雖なほ國を去つてしまつた(學者の名はミカエル、ヴーカス、ジョン・ラスカリス、アンドロニカス、ムースロス等(Michael, Doucas, John Lascaris, Andronicus, Mouros.)である)。そしてイタリアを以て隱れ所となし、其處に自分等の學藝と貴重なる文書を持ち運んで行つた。此イタリアで彼等は歐洲全部の敎師となり、その言語の歷史に於て新時代をつくり出した。即ち再びギリシアの文化はイタリア

から世界の諸國に擴がるやうになつた次第である。

五

スペーンに於ては一方に宗教審問の恐るべき火が絶え間なく燃えて居た間に冒險小說なども出て居て、其內にはスペーン人が特に重んずる政治的理想を示して居た。併し文藝に於けるその進歩の程度といふものは遙かにフランス、イタリアの下風にあつた。例へば若しかのムーア人の據城であつたクラナダの沒落がスペーン人の愛國的精神から見て喜ぶべき事件であつたとしても、その直接の結果は文學及び藝術の上には非常な不幸であつた。今其沒落の狀況如何を見るに紀元一四九二年にカソリック教の王等はクラナダを攻落し、只一日の內にアラビア文學の書類百五十萬卷を焼き棄てた。實に恐るべき宗教上の復讐である。これを古に於てオマル(Omar)の手寧ろ其將校アムル(Amru)がアレキサンドリアの文庫にある凡ての寶物を焼き盡したといふ恐ろしい事實に比べて殆ど遜色のない好一對の暴戾な事跡である。なほ是等と等しく世界に於ける貴重品を焼き盡した事實を擧げれば、メキシコに於ける第一の大僧正が行つた野蠻なる

行動である。此僧正といふのは第十六世紀に於てメキシコの町の市場を焼き拂ひ、古代アメリカの文化を知る二つとない貴重な文書即ちアステック(Aztec)の文書なるものを盡く焼き棄てたのである。是等は無法なるキリスト教徒のなした千載拭ふべからざる大罪惡といはなければならぬ。

アラビア思想はスペーンに植え付けられ、その古の識見を以て之を導き、またその詩や建築や學問の上に多大な影響を與へたものであつたが、今や斯くの如き暴戾に依つて全く其跡を斷つやうになつた。由來スペーン人のムーア人に對するや、其宗教上の狂暴偏狹な心から、彼等がスペーン國に利益を與へた事は一向に考へず、只之を敵視して、機あらば之を絶滅せんと考へて居たのであつた。それ故今に至つてはアラビアの文書は分逸散亂して消滅し、之に代つて顯はれたものはキリスト教寺院の乾燥無味な年表の如きものに過ぎなくなつた。而かもスペーンのカソリックは斯くの如き變化を以て喜ぶべきものと考へて居たのであるに、斯くてチャールス第五世の後繼者等はムーアの善良平和なる農業者を放逐し、以て其國土を清めたと考へて居たのであるが、焉んぞ知らん彼等は却つて之

が爲めにその國土を荒廢さしたのであつた。

フランスに於ても當時文學の發達は盛んではなかつた。前時代の思想並に成績の損害を免れて殘つて居たものは只二三の名に過ぎなかつた。前時代即ち封建時代の詩は殆ど絶滅したやうに見えた。たゞ過然に冷かな脩辭學の教師の内にミランのヴァレンタインの子でオルレアンスのチャールス親王といふのが一人殘つて居たが、此人は生れは半ばイタリアでその情緒もフランスといふよりはイタリア的であつたが、その作詩に於てはシャンパニュのチボー(Thibaut of Champagne)の詩風と才能とに似た所を持つて居た。チャールスはその詩句に收めるに深い感情や偉大な思想を持つてすることはなく、輪唱歌(Roundel)や俗謠で巧みに普通の事を言ひまはす事を好み斯くの如き方法を以て自らその才分の極めて優しきまた脆き美を不朽に傳へしむる唯一の秘鑰と考へて居たらしいのである。

またこの第十五世紀の極く初めに當つてアレーン・シャルチエー(Alain Chartier)なるものがあつた。これは當代の不幸のため心を動かされ、それが文字となつて今日なほ吾人の心を動かす詩句を作つて居る。若し此詩人にして國家非運の日に際

して一篇の詩を作り「クァドリロジウム(Quadrilogium)」と題するもの國民の良心を覺醒しなかつたならばその名は到底忘却の運命を免れなかつたのであるが、これがために其名は遂に不朽になつた點、また思想の創意的に仕組の大膽であつた點から、寧ろすでに近代に屬するものと云つても差支ない。これと同じく當代中世紀の系統を追つた作家の一群の最後のものは即ちヴィヨン(Villon)である。併しヴィヨンはその用語の堅實であつた次第である。

にはまたコムミーンのフィリップ(Philip of Commines)といふ哲學的歷史家が居るが、これが又思想と感情との點に於て近代的の進化を示して居る。コムミーンは實に初めて批評的に歷史を書いた人で政事家の立脚地から政治問題を說明しまた哲學者の立脚地からこれを論究した。道德の上では懷疑派で個人の利害や名譽を重んずるに凡てその結果如何から論斷して居る。蓋しこれはかのマキアヴェリの前驅と云つて差支ない。彼はフローレンス派で酷烈に理議を重んずると共に前代の年表作者とも云ふべき歷史家の宗教的思想をもつて居たのである。併しその散文は何處を見ても中世紀の終末を示さない處はないその書いて居る

事件それに對して與へて居る考察、かれの文體、更にその用語に至るまで凡て中世の終りを示したものである。

これ等數名に加へて吾人はモリエルの前驅とも見るべき無名の一作家を擧げなければならぬ。其名は全く知れて居ないが、メートル・パテラン (Maitre Pathelin) といふ滑稽物の作者である。これ等の作者はみな孤立した單獨の人々であつたが、これに依りてフランス文學の乾涸はわづかに免かれて居たのである。またこれ等の人々を離れては藝術なるものは、當時益混沌の狀態に陷つて古の信仰はいよ〳〵皮肉的に輕侮せられ、不道義はます〳〵盛んになつて行つたのである。斯くの如くにしてローマの勢力時代は全く終りを告げ、更に陰氣なる勢のない時代が來たのである。人の想像力は世間の禍のあまり多いので消滅してしまつた。フランスは近くに至るまでその獨得の特權であつた智力上の覇權を失ひ、イタリアのみ殆ど獨力で文學的光榮の途上で華々しく乘り出した。そしてその途の上に全歐洲は爭つて集まらんとして居たのである。

第十三章

社會の紛擾漫延す——イタリア古學の復活——二大史實——文藝の復興と宗教改革——兩者の併進——ルーテル、エラスマス、メランクトン——文學に於ける宗教改革の遠き反響。

大體から言へば第十五世紀は良い時代とは言はれぬ。又歷史上後代の範とするに足る時代でもない。當時に於ける人々の行爲の標準といふものは、必らずしも社會の進歩を妨げないにせよ、その良心に適つたものではなかつた。權謀詐欺は公然稱贊された位で、不信不實は政事家の依つて以て力とする處なり」とはフランスのルイ第十一世、イギリスのリチャード第三世の守つて居た格言であつた。イタリアに於ては名族ボルヂアの一家は名僧ジァローム・サヴォナローラの眼の前で恥づべき行を敢てして居たが、かく名家の亂行と高僧の清思と相竝んで居たので、史上また斯くの如き著しい相違若くは注意すべき對照の顯はれたためしはな

いまた社會の混亂にとりまかれながら、それにも拘らず藝術の力の著しく顯はれた例もない。さて社會の狀態は如何といふに、イタリアは全く無政府の有樣であつた。その諸侯や各都市は互に競ひ爭ひ、また國全體としては外國の軍隊に依つて絶えず侵入せられ全く疲弊してしまひ、斯くの如き政治上の暴風雨のために國民としての存在さへ危くなつて居た。併しそれにも拘らず尤も完成した作物が出來、創作的天才力に於ても活動に於ても、減却はして居ないで歐洲一般の注意をひき、その研究所となり凡ての他の國々の野心を起させる本となつたのである。また實際イタリアは文明の世界に各種の必要なるものを供給したのである。たとへば技師や船長や政治家や銀行家や、雄辯家の敎師や畫家や建築師や彫刻家などは、當時みなイタリアから出たのであつた。但しゴシック式の藝術は充分イタリアに於ては歡迎されなかつた。と云ふのはローマ式藝術の傳說はなほ殘つて居たからである。併しルネッサンス式はイタリアからフランスに移植され、其處で根を生じ、それからイギリス、ドイツ等へ廣がつて行つたのである。

イタリアを除けては歐洲中で只一個の國が、イタリアと同じやうな藝術的運動

の標象を示して居る。卽ちフランダース(Flanders)である。フランダースには小共和國が何れも實際に獨立して築え、各派が都合よき各所にその中心をつくり、個個の長所を發達させ、その天才を發揮させるに力めて居た。

斯くの如き學藝の復興につゞいて歐洲社會一般の感興といふものが起つた。人類が一たび失つた美に對する精神は、イタリアの地に於て先づ回復された。イタリアは最早さういふ事に就ては死滅したと一般に考へられて居たのである。が、焉んぞ知らん、それは只眠つて居たのである。一言にして云へば文藝の復興なるものがイタリアから起つたのであるが、さてその起つた所以は次のやうな次第である。紀元一四八五年四月十八日の事であつた。春の長閑な花の日に當つて、ロムバードの工夫かローマのアピアンの道路〔Apian Way(古ローマの最古最良の道路)を開鑿して居る內に、計らず古い白い大理石の墳墓を發見した。蔽を取つて見ると中には神靈の眠つて居るやうなものがあつた。彼等工夫はその內に一人の乙女を見たのであるが、その色艶が恰かも生きて居るかのやうなのである。彼等は香氣高き藥劑を用ひまた魔術を施して見た。するとその乙女はその永く

閉ぢて居た双眼を開き覺醒したやうに見えた。頬は薔薇の如く赤く、唇は微笑して居るやうになつた。此美しい奇蹟が人の心を動かした。群集は寄り來つてみな愛情と熱心とを以て烏頂天になつて居た。それでこの乙女はその大理石の床に入れられたまゝ恭しく政廳に送られ、こゝに全市民は集まり來つてその靜かなる殆ど天人界に見る如き美に眺め入つた。こゝに於てかキリスト教會はそれに就て頗る不安の念を抱くに至つた。此眠れる偶像の神座に對し新たなる耶蘇教以外の禮拜が起らんとするのであらうか。法皇は不安のあまり夜中密かにそれを盜み取り、再び地中に葬らせる事を命じた。併し人々が此乙女の顔を見たのは無益の業ではなかつた。何となれば詩人の言つた通り「乙女は古代の美を有し、世界はたゞ乙女を凝視したるのみにしてまた再び花咲く事となれり」といふのである。此美の再び蘇生してその秀逸せる趣を示すや凡ての人はその心を魅せられたのである。

斯くの如くにして自然は幾百年の間これを蔽ふて人の目に觸れしめなかつた。煩瑣學派竝に僧侶的禁慾主義の覆面のうしろに漸く顯はれて來たのである。そ

して自然の顯はれたと共に第一には發見に對する愛好の念、第二には藝術的詩的の熱情を伴つて來、それがまた直に美と力とに對する崇拜の念となつた。且つ又それと共に自然は理想的な作風を完成せしむる道具ともなつた。この新作風は素より古代の文化と密接の關係ある此イタリアに起つたのであるが、それが順序を逐つてフランス、イギリス、ドイツをまで侵略し、その進むに從つて各民族の特性に適合して發達したのであつた。

イタリアは古典的精神を以て充滿されて居た。それは當時に風俗を見ても詩を見ても凡ての實務的の事を見ても解る。イタリアはまた此精神を以て歐洲の各國に影響を與へ世界に向つて異常なる多くの思想を供給したので、それから近世の世界が發顯したと云ふべき程の利益をなしたのである。賢人とも云ふべき人にはマルシリオ、フィチノ、ピコ・デラ・ミランドラ、レオナルド・ブルーノ・ダレッツォ、ポムポニウス、レトオ、及び僧正ベムボー (Marsilio, Ficino, Pico della Mirandora, Leonardo Bruno d'Arezzo, Pomponius, Leto, and Cordina Bembo) 等がギリシア、ローマの古學の復興を見せんと力をつくした。また學者にはヴァラ、ポッグ、フィレルファス (Valla,

Poggio, Philelphus) 等が文學のために多大な働きをなした。尤もかれ等互に論戰の間に言論が酷烈に亙り互の名聲を害ふやうな事もありはしたが、その力を致した事は認めなければならぬ。その上賢者も學者と共にギリシア文人の多數の後援を得て居た。則ち例のコンスタンチノープルの沒落から逃れて來るツレビゾンドのジョージ、ガザ、アルジロパウル (George of Trebizould, Gaza, Aigyropoulo) 等がその人であつた。ヴェラス、フローレンスは數年を出でずして多島海上島上の住人であつた詩人竝に文典學者が集合する學藝の中心點となつた。各諸侯はこれ等の學藝若くは詩文を奬勵する事に競爭をしたが、その內最も名高く最も熱心であつたのはロレンツォ・デ・メディチ (Lorenzo de Medici) であつた。メディチは君主としてまた行政者として出來るだけその多忙なる執政の間から余暇をつくり、ラテン語イタリア語を以て即座に文を作り、また原語を研究し或は詩を研究し好んでヒューマニスト文學生と交りかれ等と共に哲學を論究した。メディチの外斯くの如き文藝に心を傾けた人にはヴィスコンティ、スフルザ、ゴンザガ (Visconti, Sforza, Gonzaga) 等があり、なほフェララ (Ferrara) にはフローレンスに於けるメディチの如き位置に立つて居るハ

ーキュレス・デステ (Harculis d' Este) があり、ミランにはルドヴィコがあり、更にローマには ユリウス第二世があつた。特に燦爛として中世紀の風習を保存して居て盛んなローマンチシズムの空氣の內に浸されて居たが、此處には特に力を敘事詩の修練に傾注して居たやうであつた。即ち其處に居たボイアルドー (Boiardo) は此敘事詩の點に就て後に來たるべきアリオストーの前驅とも言ひ得るのである。

二

紀元一四三六年の頃に於ける印刷機の發明は多大な材源を世界に與へた。吾人は十五世紀の終りに當つて研學探究の盛んであつた事を見た。爲めに十六世紀に於てレオ第十世アリオストー、マキアヴェリ等の人々が出た時には、各自が其光彩を發揚すべき道路はすでに準備されて居たのであつた。何れの點から見るも イタリアの思想は創造的で其頭角をぬきんでゝ居た。斯くの如き國民斯くの如き時代は、無双の光榮を以て其頃に王冠を被らるべきであるが、只不幸にして暗雲が蔽ひ重つて後代の目にその光榮と美觀とをかくし、大諸侯の道德は墮落

の極に達して、政治上の權謀術數は全く一個の組織的のものとなつた位であつたので、此時代の文藝に於ける光榮がさまで目に立たぬやうになつたのは當然の次第である。此權謀術數を組織的の者としたといふのは即ちマキアヴェリ主義を指したので、此主義を以てイタリアは他の歐洲諸國の良心を腐敗せしめ、これ以外にイタリアで文化上に貢獻したその偉績に汚點をつけたのであつた。さてこの十五世紀から十六世紀に至る間の歷史の中心には二個の偉大なる歷史的事件が伏在して居る。即ち文藝復興と宗教改革とである。この兩者は何れもその起るべき原動力であつて、それから出て來たものである。此時代の事物は凡て此兩運動を離れて存在せず、又此時代に於ける凡ての努力はこの兩運動の方に向けられて居たのである。但しこの兩運動は同じ原因から起つた結果でもなく、また互に原因結果の關係を持つて居る譯でもない。併し兩者を結合する連環は容易に認められる。兩者は多くの一致の點をもつて居る。そして兩々相携へて働らくにしても、また互に獨立して働くにしても、屢同じ結果を生じて居る。抑古代文學の侵入はカソリック主義竝に封建制度の社會に古のローマやアテンスの

言語、政治、哲學竝に宗教の式典等を紹介する事になつたのであるが、それがまた同時に自由なる論議研究に便宜なる思想を持ち込んで來たのである。言ふまでもなく宗教改革なるものが只全然此自由討究といふ事のみから來たとは云はれぬ。それは更に古く永く繼續して來た事の結果であつた。同樣に燦爛たる文藝復興もすでに十三世紀に於てフィオレのヨアチム(Yoachim of Fiore)の手になつた「永久の福音」(Eternal Gospel)竝に十四世紀に於けるダンテの「神曲」の內に顯はれて居た。吾人がすでに說いた通り宗教改革の精神なるものはルーテルの說教を以て、人心を燃やすをまたなかつたので、それより以前斯くの如き精神は折々表明されたことがあつたのである。たとへば十二世紀にも改革者はあつた。宗教會議の威光に依りまた人民の力に依つて壓伏されるまで奮鬪したものが當時すでにあつたのである。ルーテルが考を大きくして盛んに說いた情操のその原子はアルノード・ブレッシア(Arnaud de Brescia)の神秘主義の內に收められて居る。第十四世紀に於ては反抗の精神がイギリスに於てはウィクリフの熱心を起し、またボヘミアに於てはジョン・ハスやプラーグのジェロームの熱情となつて顯はれて居る。

宗教改革の精神は實は十五世紀の初年に於て武力に依つて勝利を博して居た、のであり、それはジョン・ヂスカ(John Ziska)といふ拔群なる名將が八大合戰に依つて帝國の軍隊を打ち破つた時の事である。一言にして蔽へば中世紀に於ける異端の主唱者は火刑その他の所刑の苦難に打ち勝つて、その精神をカソリック主義の內心に貫徹せしめたのである。斯くて十六世紀に至り、こゝに宗教といふものゝ統一なるものが終りを告げたのである。

三

以上の事實に依つて見れば、宗教改革は文藝復興とは獨立して全く關係なくても當然起り來たるべきものであつた。素より前者が後者から受けた間接の助力は大なるもので、また有力なものであつたのみならず、これに依つて宗教改革はその發展を速かにし、それに確實なる根蒂を與へ、更に兩者その仕事を共同にする樣になつてその目的を早く達することが出來たのである。斯くして人の心は新しい狀態に入つて行つた。即ちギリシア的ローマの精神は科學的思想の範圍に入り込み、古のギリシア、ローマの思想はその將に覆さんとして居た信仰と入り亂れて居たのである。

文藝復興期に於ける歐洲の狀態如何といふに、西帝國に於ける敎會の大破裂の創傷から漸く回復した計りの有樣であつた。敎會の威嚴に對する威嚇はすでに外部から烈しく攻め寄せると共に、敎會內部に於ても意見の衝突の爲めに自らその力を增し益〻勢力を得て來た。法皇と雖結局は人間に過ぎぬのであるから、いつまでも普通人民の良心を愚にして通して行くことは出來ない。それと共に大學中學は勝手自由に法皇の權力を批評した。パヅア(Padua)の大學は永い間無神論の溫床と見做されて居た。またモデナやヴェニス(Modena & Venice)のアカデミーが異端を敎ふるといふ口實の下に閉鎖を命じられたのも少しも怪むに足らぬ事で、實を云へばイタリア全國が宗敎に反對して居たのである。その適例を擧げれば不信仰者なる文人プルチ(Pulci)は其作物に依り信仰を輕蔑し、肉感的遊逸を賞めて居り、滑稽詩の各章の初に祈禱の書から拔萃した本文を載せて居る。凡てが斯の如き調子であつた。人心は制縛に堪へなくなつて煩瑣學派の敎訓とその薄弱なる規則を流し去るべき新潮流の來たる水門の開くのを鶴首して待つ

て居た。從來キリスト敎は人間を自然の外にまた自然の上に連れて行つてしまつた。然るに古典の研究は人をして自然を深く且つ温情を以て味ふ事をすゝめたのである。何となれば古典の研究は人生に對する愛情を復興さしたものであつたからである。即ちこれは二個の最も甚しく離反した意見の衝突で、ドストイエフスキー(Dostoievski)の神の人と人の神とが互に相對したのであつた。約言すればベルヴェデーレのアポロとキリストとの衝突である。そして此自然に對する感情は從來酷烈なる敎義に依つて制壓されて居たのである。然るに今や古典の研究は人々互に相違背せん事を恐れた。中世の何事をも一樣平等ならしめんとする型に欲つた考に代るに、理論として最も有力なる個人主義を紹介した。この個人主義の御蔭で人々はみな自分の意見や行爲や所信に對する責任を明かに有するやうになり、やがてその心持をよく自己の著作の內に顯はすやうになつて行つたのである。それ故に人々は古典主義を以て大旱の雲霓を望むが如く待ち設けて居た救世主と考へたのである。が、今度は其反對に思想のこの種の在來の思想に對し、第一に反抗の途に上つたものは先づ智的研究の面

白味のためにその方に引き附けられたのであつた。世間は從來相率ひて從順信仰といふものに附隨しそれに隨喜して居たのであるが、今度は其反對に思想の自由及び懷疑の方に同情を寄せるやうになつた。如何に或思想が人間の心の內に深くその根を張つて居るとはいへども、これを檢査し或は改訂せずには濟まされなくなつたのである。

四

エラスマスとルーテルとは第十六世紀の初期に於ける大達者である。前者は宗敎改革の前驅として、後者はその豫言として兒童走卒にも其名は知られて居る。此二人の間にボヘミアに於ける耶蘇新敎の主動者たるメランクトン(Melanchthon)が居る。而してエラスマスに至つてはその活力と著作とに依つて世界に感化を及ぼして居る。

或評家が次のやうな事を言つた事がある。曰く、十六世紀に一人の男があつた。この男は法皇をも帝王をも自分の延臣と考へて居た位で、ヘンリー八世、フランシス一世、チャールス五世、サキソニーのマキシミリアンと交信して居た。獨逸の諸市

凱旋門を築いてかれを歡迎し、その隨喜者の內にはトマス・モーア、僧正ベンボー、サドレット、メランクトン、ウルリチ・フォン・ハッテン、ユリウス二世等(Thomas More, Bembo, Sadolet, Melancthon, Ulrich Von Hutten, Julius II)かれに信書を送る時には宛名を「文學の君」「獨逸の星」「學藝の太陽」など〻記してやる。それでその書信は配達されない事はない。何となれば斯かる名稱を博するに足るものはエラスマスより外ないからである。さう言つて居る則ちその男といふのはエラスマスの事なのである。エラスマスの文學上の著作の大部分は、只卷說に過ぎぬといふ說もあるが、その歐洲全部に及ぼした影響、ルーテルとの論爭、文學、哲學、倫理、敎育の各部に及ぼしたその刺激の力等に至つては、凡てこれ當代の歷史と密接な關係をもつて離すべからざるものになつて居る。

エラスマスは耶蘇新敎(プロテスタント)と往々其意見を同じうして居たに拘はらず、彼等の迫害を受け、その哲學的寬大の思想と折衷的態度との遠く時代の群を擺んで〻居たために、新舊兩派から疑の眼を以て見られて居た。そしてその生涯の平和安靜ならん事を熱望して居たに拘らず、繁激多忙の一生を送り、バールに於てその友人

にして印刷者たるフローベンなるもの〻家に於て死んだ。實にかれはその著作エンコニアム・モリエ(Enconium Moriae)の內に自由、平靜及び愚昧の三性を稱贊した程靜かな生活を愛好したのである。

エラスマス同樣溫和妥協の精神並に古典文學に對する熱心を有し、更にその後繼者とも言ふべき唯一の文人はフィリップ・メランクトンで、これも博識を飾るために優美なる文體を自得して居た。またメランクトンは辯證法を用ひて各種の智識に系統組織を立てる事をした。また古代の文學を復興したのは多く、その人々はまた自ら發見したその光に自ら眩惑したものもあつた位であるが、メランクトンはその中にあつてその古代文學を適用し、小供の心にも解るやうにならした。これ等は特にかれの名譽に歸さなければならぬ處である。一言にして蔽へばかれの敎師としての影響は偉大なものであつた。

メランクトンは初めルーテルと協同し、一五三〇年アウグスブルクの信條を制定してやりなどして、新敎會內部の爭鬪を靜めんと力めた。また實際その德と緩和力並にその位置の力とに依り、互の間に於て共同一致の實を擧げしめ、ルーテ

ル派の各派の間に於ける紛爭を靜定することを得た。併し獨逸の市府には各種の新敎派があつた。ズウィングリ派の敎師、アナバプチスト、カールスタッド派、イルリア派 (Zwinglians, Anabaptists, Carlstadions, Illyrians) 竝に嚴密なるルーテル派などが群つて居て、何れも自分等が眞正に神から道を傳へるために送られたものだと宣言して居た。併しその說く處の說敎の後にはいづれも自家勢の伸張を熱望する心持が明かに看取されるのであつた。メランクトンは斯かる有樣に對し倦厭の情を起し、何とかしてこれ等の新たに開放された人心を一に歸せしめんと欲して居たが、結局それが出來ずルーテル派とカルウィン派との調和にも成功せずして死んでしまつた。

ルーテルはまた獨逸思想の最も著しき樣化の一つである。ルーテルの生れた時の智能は全然その活力と獨立とを失つて居て、只十四世紀、十五世紀のマイステルジンケル一派の詩が僅かにその餘韻を殘して居たのみであつた。加之封建時代の壓制が再生した趣があつて、それが人民の物質的竝に道德的墮落を甚しくした。個人性を滅却する事、獨立の確信なき事、曖昧朦朧な思想、學究的文辭を以て

言語の活力を消滅さす事、千遍一律に只重々しい文體を以てする事、これ等の特色が凡て拙劣なるラテン語を以て顯はされ、それがまた人々の精神上の滋養となつて居たものである。獨逸の國語を用ひて人民の敎育に力めて居たものは極めて僅かであつた。而かもそれさへ古い神學に基礎を置いた乾燥無味な道德上の問題を大袈裟にまた複雜さして說くに過ぎなかつた。これ等の敎の內には殆ど純粹なる哲學的思想などは覗ふことは出來ない。只折々向上的思想の閃きを見る事はあつたが、殆どその凡ては敎化敎訓的のものに過ぎなかつたのである。斯かる有樣であつたから人間は極めてその自由を持つて居なかつた。又その思想の發表に於ても甚しく制限されて居た。これは或る特權を以て居た階級の人民でもまた組合の成規に從ふものでも同樣であつた(組合とは即ちギルドの事で、各種の工人がそれ〳〵組合を立て成規を持つて自家の便宜を計り、且つその勢力を維持した中世以來の組織的團體である)。此組合の成規に依つても個人的の活動は絕對に禁止され人々の思想も意志もまた行動さへ全く制限されて居たのである。この封建的服從と信條に固定せる事との外、なほ一種の屈從の類が

あつた。その智力的宗教的方面に於ける結果は個人の生活に顯はれ、社會的政治的に於ける結果は公の生活に顯はれたのである。即ち固定した意見に反對するのは極めて危險であり、また一定の學說に對して異議を挿む事は異端視される恐れのあつたといふ事である。要するに人の頭腦も心情も萎縮して動かす智的必要をさへ自覺せぬ位であつた。

斯かる抑壓的靜謐の際に當つてルーテルは立つて人間の最も高尙なる權利即ち個人の獨立といふことを唱導した。これは宗教的思想を明かにするには先づ個人の行動の基を定めなければならぬとして唱導したものであつたが、これが歐洲全部に亘つて各種の思想に意外な衝動を與へたのである。

當時ローマに反對するといふ事は世界に向つて挑戰すると同じ事であつたのであるから、ルーテルのローマとの戰の猛烈であつた事は言ふにも及ぬ事である。ローマ法皇は人民の無智を利用する事は勿論巧みであつた。それに公衆に向つてはヤソ・キリストの無限なる功德を宣言し、且つそれと共に次のやうな事を宣言して居た。即ち聖僧が異常なる務めに依り、生きて居る人の生靈は勿論死し

て煉獄に居る人の靈魂も、斯かる聖僧の功德に依つて救濟を受ける事が出來ると言ひ更に此特別なる救ひの方法は聖ペテルとその後繼者に委托されてあり、それを人々に授ける事が出來るやうになつて居ると說いた。即ち免罪といふのがそれで、金さへ出せばその救ひの道を買つてやる事が出來るといふのであつた。オーガスチン組合の一僧であつたマルチン・ルーテルは斯かる免罪といふ商買に對し慨然として立つた。そしてテッツェル(Tetzel)なる法皇の代理者の行動を暴露した。このテッツェルなる僧は特にドイツに於て此詐欺的な商買の監督をして居たのであつた。ルーテルは此男の行動を攻擊して後、進んでその原理に及び、免罪といふやうな事をなし得る力は人間にないといふ事を說き、更に煉獄なるものの存在をさへ否定した。煉獄とは死者が天國か地獄か何れへかへ送られる前暫時置かれる處であるが、免罪といふ事は此煉獄の存在に依つて成立するもので、死者が未決の狀態にあるので、金を出してその靈魂を天に送つて貰ふといふのであるから、煉獄の存在は是非此免罪の事には必要なのである。ルーテルは終にそれをまで否定したがまた更に所謂宗教の自白、罪障消滅等に關してさへ疑問

を挿み最後に個人が與ふる審判の權利に付ても抗議をなした。此等が即ち宗教改革の根本的原則となつたもので、これが人の思想を自由にする事の上に偉大な衝動を與へたのである。

ルーテルはその多忙なる一生中ドイツ國内を東奔西走したが其重もなる都市はアイスレーベン、アイゼナッハ、エルフルト、ウォームス(Eisleben, Eisenach, Erfrt, Worms)等である。また固牢なる舊教の徒と戰つたその敵手の名を擧げればスクルテット、カエタン、スタウピッツ、ウェンセスラス、リンク、ミルチッツ(Scultet, Cajitan, Staubitz, Wenceslag, Linck, Militz)等で、また當初は自分の味方でありながら半途變説したものもあつてそれ等とも戰つた。即ちヤルク・スツーブネル、ストルク、ミュンツェル、カールスツッド、ツウィングリ(Mark Stubner, Storch, Munzer, Carlstadt, Zwingli)等である。併し彼の苦んだのは等外敵からのみではない。第一には自分の心に苦んだ。堅固ならざる良心、疑念、惡魔の攻圍、迷信的の恐怖、是等は彼の大敵であつた。併しまた是等の困難があつたので却つて彼の事業は完成したのでもある。彼は斯くて遂にキリスト教會の新舊二派に分裂するのを見たが、この分裂が政治上宗教上に永久の結

果を殘す事になつた。ルーテルがウィッテンベルク市場に於て法皇レオ第十世の教書を焼き棄て、公然自からローマと分離して以來、全歐洲は耶蘇舊教(カソリシズム)と耶蘇新教(プロテスタンチ)との二大陣營に分れたのである。

史家は筆を揃へて色彩明確に宗教改革の事蹟と之に伴ふ事件並に爾後の一般思想の趨勢に及ぼす結果を叙述した。何となれば新教のパン種は思想の非常なる醗酵を考へたのみならず、從來嚴酷なる法律の上に壓伏せられて居たドイツ併阪の地に於てさへ社會的方面に於てその奮起を促がしたからである。この改革者の行動に催されて文學も藝術も科學もみな合理的精神の標徴を持つやうになつた。只一つ注意すべき事は宗教改革をよく拒絶した歐洲の國々に於ては文藝復興の運動がその勝利を博して、それ等の國々に古の異教主義に返るやうな現象があつた事である。

第十四章

急激派及び敎義上の論爭——ジェネヴァに於けるカルヴィン——ジョン・ノックス及びスコットランドに於ける長老派——社會的宗敎的革命の道行——イグナシウス、ロヨラ——トレントの會議——歐洲其他の諸國民を碎滅したる無數の害惡と竝立したる偉大なる思想上の活動——局外に存立せし二種の文化の滅落に就ての一考ロベハーとメキシコ——社會の災危はタッソーとアリオストーを有したるイタリアに於ける文學の進歩を阻害せず——シェークスピアを有するイギリスに於ても同樣なり——セルヴァンテスを有せるスペーンに於ても然り——カモーエンを生みしポルトガルに於ても同じ——なほトルコに於ても同樣にして當時は此國の黃金時代なり——フランス文學發達に復歸す。

前章に於て吾人は世界の眼をドイツ及びイタリアに引きつけた二大事跡は宗敎改革と文藝復興とである事を述べたが、當時の人心は凡て未知のものを探つて出さんとする企業心を以て充たされて居たのみならず、凡ての人はコロムバスやピサルロ(Pizarro)やヴァスコ・ダ・ガマ(Vasco da Gama)其他スペーン、ポルトガルの多くの冒險家の先例に依り刺激せられて、みな新世界新領土を獲取せんと欲し、それ〴〵小船を艤裝して出立した事であつた。さらに思想界の方面を見れば、人々は思想の開放されて自由になつたその天地の廣大無邊なるに心を動かされ、宗敎改革者を模範として奮闘的酷烈なる活動を演じたのであつた(當代の企業を言へば先づコロムバスのアメリカ再發見、ヴァスコ・ダ・ガマの喜望峰をまはつて印度へ到着した事など、何れも歐洲全部の文學竝に宗敎の敎は過去と現在との間に截然たる一大區劃が立つた。その上宗敎改革は人間の心を自由にすると共にその言論をも自由にして、精神上の事のみならず實質上の事物をまで論究するやうにさした。即ち一般研究の精神が人間の活動の世界を支配し、同時に上下の區別を撤排して平等主義平民主義の理屈を人心に浸潤さした。これが精神界の活動と共に物質界にも一大飛躍のあつた所以で、かの新大陸の發見の如きもその一例となつて居るのである。

併しながら自由の進歩にはその一歩毎に困難が伴つて居た。實際十六世紀は歷史上屢遭遇することであるが、社會上に一種の反照を呈して居る。即ち此世紀は一面に於て近代世界の向上的精神とその勝利とを示して居るが同時に、從來の最も專制的なまた最も權力集中的な舊時代をも代表して居るのである。其一例を擧げればドイツは宗教改革なる新時代の代表たるべき光彩ある運動の中心であつたに拘らず、農夫の戰(Peasants War)なるものを引き起したドイツ封建制の壓抑的な猛烈なる再興なるものがあつた。此封建制の再興は耶蘇新教の一派なるアナバプチストの運動を抑へつけて後、大にその權力を增大し、小作人勞働者等に以前よりも重き負擔と苦痛とを與へたのであつた。

宗教改革の運動には立派な思想を有する人々の味方があり、高貴な人々の深き同情があり、加之數多の政府が公然これに助力を與へたので、その勢は隆々として これに抵抗することは殆ど不可能に思はれたのであるが、而かも强大なる抵抗が之に對して行はれた。利害の關する處には即ち武器にまで訴へて之を己の爲めにするのである。舊教の教權は先づ宗教の新運動の新研究を起さじた。その

起因に就て注意その點に就ての謬りを正す事に力めた。然るにその起因といふのは古典の研究にあつたので、此研究は今や之を制止するも遲く、既に現在から將來に亘つての大問題になつて居たので、此問題に向つては如何ともすべからざる有樣であつた。玆に於てか耶蘇教會は分裂せざるを得ぬ運命になつて居た。同時に舊教の徒は之に依つてキリスト教が支離滅裂に終りはしないかと恐れたのである。實際歐洲の各國は單にその教義からばかりでなく、その慾望やら都合上やらでそれ〳〵ローマから分裂した。即ちドイツ、スウィーデン、ノルウェー、オランダ、イギリス等は全〳〵ローマ舊教を棄てゝしまつたのである。

ジェネヴァはカルヴィの主宰した神學界の中心となり、その辛辣なる手腕を以て支配されて居た。スコットランドはその嚴正にして自つ教權を重んずるといふ點に於て特に宗教改革の一本源地であつたが、此處にはジョン・ノックスが舊教の敗墟の跡に長老教會を組織し、恰もカルヴィンがジェネヴァに制定したと同じ平民的教會政治を打ち立てた。ノックスはカルヴィンの弟子中で最も熱情に富み論理的な人であつて、特にスコットランドに於て有名な教會を組織したのであるが、これは即ち自

由の鄕に於ける自由の敎會とも言ふべきものであつた。

ローマ敎會はその門徒のやうやく去つて新敎に投ずるのを見て自家の防備に力め、その勢力を集中せんとした。そして勢力の新策源地をつくり、それを實際に活動せしめんとして盲信的信徒に訴へてその活躍の地をなさしめた。即ちスペーンは「僧侶の王國、神聖なる國民」と言はれて居る國である宗敎改革の初めから正統敎會の爲めに働く勇士であつたが、今やローマ敎會は最もこの國に信賴しその力を借りる事になつたのである。

過去幾世紀間スペーンは思想の獨立を棄てゝ僧侶の權利に服從してしまつた。僧侶はまた敎會に依つてその衣食の如き實質上の供給を受けて居たのである。から、その返禮としてローマ敎會の宗敎を飽くまで維持し且つ防禦する責任を持て居たのである。それ故にスペーンに於ては凡ての著者も詩人も戲曲作家も大抵は僧侶の出身であつて、何れも宗敎的戲曲を以て敎義の敎へる處、敎會の聖僧若くは殉敎者を讃美することをしたのである。スペーンに於ける十六世紀並に十七世紀の最も著明な戲曲家は僧侶であつた。例へばアラルコン、ロージャス、ソリス、カルデロン、エスピネル、モレトー(Ararcon, Rojas, Solis, Colderon, Espinel, Moreto)等はそれである。またロペ・デ・ヴェガ(Lope de Vega)はマドリッドに於ける宗敎會議の主領であり、またトレドーに於ける大僧正內局の財政檢察員であつた。更にミラ・デ・メスキア(Mira de Mescua)はフィリップ第三世及び第四世附の牧師であり、ティルソ・デ・モリナ(Tirso de Molina)(宗敎上の名はガブリエル・テレス(Gabriel Téllez)師といふ)は僧侶宮臣等に對して頗る皮肉であつたが、なほ神學の敎師で、自ら僧侶の組合に屬しカルメライト派の修道院の方丈であつた。なほまた王公は自ら率先身を道の爲めに捧げて臣下を奬勵した。斯んな工合で敎會と貴族と文人とは皆一致して自ら甘んじて制縛に就きその鎖を固くするに力めたのであつた。スペーンには宗敎の上に於ては偉大なる君主があつた。即ちチャールス第五世がそれで、此君主は人生の榮華に飽きて後セント・ジュスト(St. Just)の僧院に於ける蕃室に退隱したのであつたが、此處に此君主は極めて嚴重な規律に服從し、最も謙讓の態度を以て方丈の叱責を受け、之に依つて宗敎上立派な光榮を得たと言はれて居る。スペーンにはまたフィリップ第二世といふのがある。これは僧侶よりは一層嚴格な生活

を送り宮廷をして自分と共にその苦行を頒たしめた。そして自ら珠數をつまぐりながら自分の身をいろ〳〵の難行に遇はし、最後には身を土窖の內に生きながら葬らしめたのである。

斯んな工合でスペーンはローマ敎會の有力なる武器であつた。自ら愛國的義務を果すといふ自負の念を以て斯かる無慈悲な宗敎に國を捧げて居た。それで程なくかの巧妙な辯證家として知られ、また甚しき空想家として知られて居たイグニオ・デ・ロヨラ・イ・オネヅ(Ignio de Loyola Y Onez)に依て、ジェスイットといふ有力な宗敎上の組合が出來る事になつた。このロヨラは實に聖母マリアを守る武士とも言はるべき僧で、敎會の絕對的威權を保つためには「死するまで戰ふ」といふ事を誓言として居た人である。

凡そ史上にロヨラ程ローマ敎會即ち法皇政治の兵士として熱烈な力を盡した人はあるまい。彼は非常な熱心に加ふるに頑固なる、併しながら秩序ある思想と動かし難き忍耐とを以てし、その想像は超自然に傾き、誠心誠意の謙讓を有して、その中間の內に慥くべき勢力を有して居た。斯くて彼は慥くべき組織を企圖し

た。即ち一個の團體を組織しその支部を各處に置き、又それをして全人類の思想を左右し、光明を與へ、また凡ての自由を掌握し、世界の物質上並に精神上の覇權を獲取せんと力めた。此團體的の組織は敎育の上に並に文化の上に偉大な勢力を有する事となつたが、それと共に一種の秘密なる方法を以て政治上の問題に干與し社會に混亂を起さしめ、在來の道德及び世間普通の思想を打破する事に力め頗る危險なる要素となつたのである。斯くの如くして歐洲は此組織體に有名なる憲法を與へたが、後に至つてレーネッ、アクアヴィア(Lainez, Acquavia)等がその跡を繼いで之を製成した。ロヨラは一方からは崇重されて居る、併し兎に角その死ぬ前に既にその團體の將來に於て大勢力たらんとするその曙光を認めたのである。抑〻此團體は幾多の攻擊、爭亂、また時には迫害をさへ受けたが、物語の內にあるアンテウス(Antaeus)のやうに斯かる困難の場合に遭遇する毎に益〻強大になつて行く運命を持つて居たものである。ヨロラの死する時に當つて、彼が立てた立派な專門の學校は其數百に達して居て、ブラジルの森林からポーランドの邊境まで廣がつて居たのである。此ヨロラ

が立てたジェスイット教派の事に就ては、說かれたもの、書かれたもの、更に想像されたもの、その長をのべたもの、その害を說いたもの、實に無數であるが、その眞を知らんと欲せばサンセッ、エスコバー、ディアナ若くはフィルシウス(Sanchz, Escober, Diana, Filucius)の論文を見なければならぬ」。

二

この大危機に際して基督教會竝に法皇政治の歷史に三個の注意すべき大事件があつた。由來此時代は教會史上の大時期で、第四世紀に於けるアリアン派の問題の起つた時と同じく、それから從つて起つて來る利害の問題もかの四世紀のそれよりも決して少くはないのであるが、さてその三事件といふのは、第一ジェスイット派組合の成立、第二ローマ教に於ける宗教審問の再興(この再興に依つて新教は全然スペーン及イタリアから根絶されたものである)、第三トレント(Trent)會議の召集これである。

この會議は屢〻召集されまた解散されたものであるが、その間には當時の勢力ある人々また盛名のある人々が互に辯論を闘はした即ちチャールス五世、パウル三世、カセリン・デ・メディチ、フィリップ二世等が其重もなる君主で新教とローマ教とが互に相對向じたのであつた。併し君主も人民も此兩派を緩和融合しやうと欲して居たに拘らず、終にその目的を達し得なかつたのみならず、宗教の教義を一層嚴正に僧侶の上長に服從する義務を更に重くすることになつた。即ち法皇政治はその絶對の權力を强固にする事を求めたのであるが、之に對してフランスとドイツの代表者は抗議を呈した。要するに此會議は個人の自由を犧牲にし、中央の權威に對して受動的に服從する事を定めたものであつた。これが即ち名高いトレントの會議であつたが、これがまた文學史上宗教史上並に政治史上に新時期を劃したわけであつた。即ち此會議があつて以來ラテンの勢力が著しくなり、中世を支配して居たアリストートルの哲學は修正され改訂せられ、これを文學の規矩としてそれを支配するやうに定められた。これが亦所謂古典時代の精神と特色とを示すもので、多くの詩人や或は思想家から色々な攻擊のあるに拘らず一般に承認される一般を立てる事になつたのである。

三

凡そ思想のやうやく一定の形をなして實現して來るのは混亂衝突の後である
が、さて社會上並に政治上の點から觀察すると此第十六世紀は歷史上最も不幸
な時代の一つであると言はなければならぬ。外部は如何にも立派に見える。精神
も自由に活動して智力上の考察なども思ふ樣に行はれ、更に將來を見れば希望
の光さへ顯はれ黃金時代を夢想せしむる位であつたが、それと共に一面には幾
多の缺點やら罪惡やらが潛んで居て、それが事物を破滅に終らして居た。人民と
君主と黨派と宗派とは絶えず爭をなして到底調和の見込なく、宗教改革者もそ
の反對の正教會派と共に破壞的熱情を以て溢れて居た。されば此新氣運の時代
に於て人をして又も破壞の暗黑時代が再現したのかと思はしむるほどで舊教
の僧侶は講壇から近頃堀出された古代の立像の傑作を賞嘆する事の罪惡なる
所以を說き、又之を破壞し粉碎する事を躊躇するものを以て不信の徒なりと叫
んで居た。宗教改革の徒は更にそれより甚しくチューリッヒ(Zurich)に於けるズイ
ングリ並にその徒の如きは色硝子をさへ打ち壞し裝飾の彫刻を粉碎し、祈禱集
をさへ火中してしまつた程であつた。ウィッテンベルヒの教會に入つてカールス

タッド(Carlstadt)は大勢に舊約聖書申命記中の句を讀み上げ、汝等は擅に刻める神
の姿をつくるべからずと叫んだ。そしてゴシック建築の寶物はかれ等野蠻なる群
集の手に落ちて棄てられてしまつた。基督教會の禮拜の內には一個たりとも異
教に關する遺物を容るべからずといふことで、キリスト教の門徒はその破壞的
活動を逞うし、その烈しさはかのヴァンダル人や回々教徒の盲動にも決して劣ら
ぬ位であつた。斯くて遂に諸方に恐るべき戰爭が起つた。イタリア共和國に於け
る傭兵の酷烈なる事はモスコーに於けるロシア專制君主(怕るべきイヴァンと言
はれた露帝などを指す)のそれにも劣らず、軍隊は行く處掠奪を擅にして人家を
燒くを常として居り、故なくして一鄕一郡の燒かれ奪はれて荒地と變ずることは珍らしくなかつた。吾人が當時見得るものは都市並に地方の滅落して鮮血の流域となることのみであつた。何れの方を見るも吾人は只侵掠放逸を見るのみであつた。

尤も斯くの如きは只歐洲の狀態ばかりではなく、當時發見されてまだ日を經ざるアメリカの地も同樣征伏者の慾望のため鮮血の巷となつて居たのである。

四

歐洲大陸とは遙かに離れて頗る古くまたキリスト教と趣を異にして居る二個の文明があつて、それが各、靜かな幸福な運命を保つて居た。偶然の機會はフェルナンデズ・コルテズとピヅァロ(Fernandez Cordez and Pizarro)二人の乘船がメキシコとペルーの海岸に到着することになつた。この新に到着した征伏者の爲めに是等の國は恰も狂火に見舞はれたやうな有樣になつた。彼等住民はこの新來の客の何人であるか、何處から來たものであるかをも知らず、只彼等の起した破壞と荒廢との爲めに呆然としてしまつたのであつた。此兩國民の內メキシコはナファトル人即ちユカタンのマヤス(Nahuatls or the Mayas of Yucatan)から其偉大なる才智と純潔なる道德とを承け繼いだもので此國の君主なるものは代々詩才に秀で又よく藝術を保護したといふので著名であつた。そして金は富み其處の紀念碑の類は立派に國土は豐饒で、凡てがよく一致調和して居た。コルテズが初めてメキシコなるテノクチトラン(Tenochtitlan)の有名な市であるアズテクス(Aztecs)の首府を見た時彼はその運河の島をめぐり、又それが市街をなして居る處など著しく

美しいに敬服し、之をイタリアのヴェニスに比較した。なほ又その建築も美しく、その古跡は壯大であつて、それ等に書き記されてある事柄は其人民の古の叙事詩であつたさうである。なほ此處には立派な圖書館もあり、極めて價値ある挿畫の文書があつた(ナファトルといふ極めて企業的活氣に富んだ人種は近頃漸くその起源を知り得たザポテック人(Zapotecs)より新しい人種である。古にあつては今アズテックとして知られて居るメキシコにその根據を据えた一派とは別の幾派かを有して居た。たとへば其內のトルテック(Toltecs)人の如きは幾多の文化の中心を持つて居た。テキソコ、ドバスコ、チアパス、グアテマラ(Texoco, Dobasco, Chiapas, Guatemala)等で、それ等の都は又アルヴァレドー(Alvaredo)の爲めに滅されてしまつた。またユカタンもその一つで幾多の盛んなその都テオチフアカン、チョルロ、チュラ、トルカ、ソチカロ(Teotihuacan, Cholulo, Tula, Toluca, Xochicalo)等を有しまた美事な寺院壯大な宮殿を有して居た。此インディアンの文化は紀元第九世紀にその絕頂に達したが、この時は即ちトルテックの帝國が擴大してメキシコ灣の邊から太平洋の岸に達し六千哩の周圍を有した時であつた。

此外なほ一つアメリカの文化がインカス(Incas)政府の下にその智力上社交上最も高い位置に到達して居た。全能の神なる太陽に捧げられたといふ國王の住居はカスコ(Casco)にあつたが此宮殿が藝術上の製作として驚くべきものであつた。決してあなどるべからざる土着の建築は美しい都を建立し美事なる石碑を築いて居る。當時の歐洲を觀ると其內にあつて最も驕慢不遜のイギリス人さへ殆ど用ひるに足らぬ道路を有して居つたのである。此ペルー人は餘程以前から恐らく人間の手に依つて成つた公道中の最も驚くべき、又最も有用なるものを以て其帝國を縱橫に交通さして居たのである。

さて初めに書いたスペーンの征伏者が來た時のメキシコ、ペルーの狀態は斯の如きものであつた。彼等征略者は獲物を得んと熱望して斯かる美しい地に下つて來た。慈悲と平和の神の福音の名に依つてかれ等は幾日となく人を殺し掠奪を續け血の川は町を流れ、全民族は消滅するに至つた(メキシコに於ける大寺院の建立を祝するに六萬四千人を虐殺してその犧牲としたとの事である)爲めに數年を出でずしてメキシコ及びペルーの文明はその起源のバビロン、ニネヴェの

それと等しく古きにも拘らず全く亡されてしまつた。スペーンは世界の面前に斯くの如き罪惡を購ふに足る何等の事をもなしては居ぬ。メキシコ、ペルーに行はれた斯の如き前代未聞の慘酷はまた折々歐洲にも行はれたのであつた。

こゝで一寸長い說明を入れる必要がある。抑コロンブスの發見以前既に「新世界」に文化があつたといふ事は今日よく知られて居る。之は最早疑を容れる餘地はないので、殊にフンボルト、ブラッシュール・ド・ブールッール、シェラリエ、ワルデック及びスティヴンス(Humboldt, Brasseur de Bourtourg, Cheralier Waldeck & Stephens)などの著書に依りメキシコの歷史以前の研究に依つて特に明かになつた。合衆國に於ては一八六〇年頃出版業者のバンクロフトと(Bancroft)いふものが其財產の多分を投じて圖書館を立て之に充たすにパナマの地峽よりアラスカに至るまでの地方特に中央アメリカ、ユカタン、メキシコの古代の住民の種族に關する人種學の文書を以てした。またバンクロフト自らも「太平洋沿岸諸國の土着の人種」と題した浩瀚な書物を書きアメリカ人種學の道を開いた。またジョン・ウェルス・フォスター(John Wells Foster)

といふ人も同樣熱心な研究者で、アメリカの大湖水の邊からメキシコに至るまで、之から中央アメリカはイスマヌの地峽に至るまでの間に屢、見出される一種の土器が、其內にアメリカの古代に於ける社交的生活の狀態の趣を細かに示して居るとの考から刺激を受け鼓舞せられて、色々の研究を遂げ多く有益なる結果を得た——フォスター氏著なる合衆國史前の人種を論じた「ミスシッピーの流域(The Valley of Missippi)參照——之よりフォスターの後を繼いで立つた學者が數多あつた。スウィッツルのガシェ(Gachet)ドイツのベレント・シーレー(Berendt Seler)合衆國のホレシオ・ヘール、バウディッチ、サヴィル、バンテリエ、カッシング等(Horatio Hale, Bowditch, Savile, Bandelier, Cushing)フランスのデシレ・シャルネー、イー・ハミール、ジュアル(Désiré Charnay, I. Hamy, Lejeal)等が其人々である。その上ルーバ公(Loubat)の有力な保護と奬勵とに依り是等の學者は新世界の爲めに非常な功績を擧げて居る。これ等の人のその功績は恰もマスペロ、モルガン、ラヤード、シュリーマン、スミス・ドラトル(Maspero, Morgan, Layard, Schlieman, Smith Delattre)等が舊世界の小亞細亞、エヂプト、アッシリア、カーセージ等になしたと等しくある。その結果は幾多の新發見となつた。例へば中央アメリカの地中から採掘された石上文字はその形に於て又その意味に於てエヂプトの形象文字と一致して居る事が知れた。また新世界の古代に於てはその土着の人種とエヂプト及び小亞細亞の人民との間に親密の交通があつた事が明瞭になつた。時に中央アメリカの古代の人民が持つて居た宗教上の儀式と印度支那のそれとの間に極めて著しい比較がなされた。それ等から推してこれ等の研究はこんな事を明かにしたといふ成功をなして居る。即ちアメリカに住んで居た人種とモーゼの書いた舊約聖書中の書物に載つて居る人種とは相對して住んで居たといふことは、少しの疑をさへ容れる餘地もないといふ事になつたといふ次第である。

斯くの如く研究が重んぜられたのであるからコルデスがアステックの圖書館を焼き拂ひ掠奪して破壞し去つたと雖、なほ近代の科學はアメリカ古代の歷史のみならず、最も古いその前住民の事をさへ明かにこれを再現し得るといふのである。

五

殘酷な宗教審問は前に述べた通り當時再び開始されたのである。それで遠征者なるコルデス、タピア(Tapia)の一隊の道を追々同樣な恐るべき僧侶が密使としてメキシコへ遣はされた。處が彼等が來て見ると此國には猶その古代の文化を示すに足る宗教があつた。即ち人間の犧牲を求める神々の偶像があり、又その犧牲を捧げるに熱中して居る僧侶も居た。そこで彼等スペーンから送られた僧侶の宗教審問は是等の異教に對して充分酷烈なる取扱ひをなした。恰も古のメキシコの神樣のフィッチロポクトリ(Huitzilopochtli)が人を苦め、往々虐殺をさへしたと同じ程度であつた。更に歐洲に戻つて見るに、イタリアに於てはジョルダノー・ブルノー(Geordano Bruno)が宗教審問の爲めに火刑に遇つた。ブルノーは即ちスピノザの汎神主義の前驅となつた人である。スペーンに於ては素よりこの審問の火焰が洽ねく行き渡つて居て、大審問者なるトルケマダ(Torquemada)の後繼者等はその一四八四年に發布された敎書に基づいて暴戻を逞うした。その熱心酷烈の爲めにスペーンのムーア人は著しく減却し、異端と稱されるものは全く消滅するに至つた。併しユダア人のみはなほ在住して居たが、それ等殘存者は宗教審

問の材料に供せられ、その火刑の火を燃す材料となつたのである。即ち彼等の所謂審問火刑の聖火は絶滅しなかつたのである[マーチン・フィリプソンのカソリシズムの起原、パウル・ド・サン・ヴィクトルの人と神(Martin Philipsons, Origin du Catholicisum, Paul de Sacnt-Victor, Hommes et Dieux)參照。]

曾に宗教審問のみならず十六世紀に於ける宗教上並に政治上の戰爭は凡て至る處に野蠻な殘忍の事實を殘して居る。ドイツに至つては其酷烈の度が次の世紀に至つて一層甚しくなつて居る。イギリスも當時立派な文學を持つて居たに拘はらず、その道德上の進步は遲々たるものであつて、法律の嚴酷なるは戰慄すべき程で至る處に强者は弱者を無慈悲に壓抑して居た。

イタリアは文明の上に於て歐洲各國に感興を與へた本源であつたに拘らず、矢張道德上に於ては他の諸國の例に洩れず野蠻極まる戰爭の巷であつて、至る處拔劍の音が聞え怒號の聲が擧いて居た。尤も兎に角藝術は是等悲劇の背景を飾る役は務めて居た。天の攝理は是等の殘忍も藝術の進步と共に減殺せられるやうにはなつて居たのである(當時のイタリアの光景を見るに人民は飢渴の爲め

に死に頻して居たに拘らず、法皇は狩獵に日を送りまた夜は演劇を觀覽して居たといふ事である。

併しよし地は轉覆するとも、思想の飛躍は之を止める事は出來ない。即ち例へばローマは混亂の狀態にあつたと雖、それはミカエル・アンゼロの仕事を妨げる事は出來なかつた。その混亂の狀を瞥見するにフローレンスに於けるゲルク黨とギベリン黨とは絕えず互に鎬を削つて居たのみならず、法皇と諸侯と帝王とは互に爭つて居た。併しアンゼロは靜かにその傑作を大成して居たのである。此時代は只イタリアのみならず歐洲の大時期であつた。イタリアにはブロナロッティ(Bronarotti, Ariosto Raphael)あり、スペーンにはセルヴァンテスあり、イギリスにはシェークスピアあり、その他ルーテルもエラスマスもウルリッチ・フォン・フッテル(Ulrich von Hutter)もカルヴィンもセント・テレザもマキアヴェリもロスピタル(L'Hospital)もモンテーヌ(Montaigne)もイグナシウス・ロヨラもカールダノー(Cardano)もコペルニカスも皆此時代の人で、實に創作的創意的の思想がよくも斯く一時に集つたものと驚かれる。而かも彼等はフランス、ドイツ、イギリスの諸國に散在して居て互に何等相關知する處なかつたに拘はらず、なほ期したやうにその作物に同種の特徴を有し凡ての智識の形式を改造したのである。

六

イギリスに於てはその文壇にシェークスピアが居たのであるから、それから推察して其政治上道德上の狀態もそれに相應して立派なものであつたらうと考へられるが、一見した處では後者の狀態は遙かに異つたものであつた。人口は五百萬を超えず、而かもその貴族は暴橫に僧侶は甚しく墮落し、下層の民は怠惰であつたといふのであるから、國民は實に沈滯の狀態にあつたのである。然るに一方を見渡すと寺院の內には莊大な庭園がある、綠濃かな草庭がある、殘虐なる諸侯は立派な城廓を持つて居る。これと共に他の一面に憐はれ至極な茅屋が僅かに集合して村落をなして居るといふ有樣であつた。國の大部分は廣き濕地若くは荒地であり、殖產工業も若くは商業も榮えず、飢饉が來ても之を防遏する方法はなかつたのみならず、都市の住民も田舍の住民も疫病の食物とならずば、收斂の犧牲となるのみであつたなほ其上彼等國民は皆甚しく無學で、貴族と雖亦其多

分は書物を讀み字を書く事さへ出來なかつた程であつた(尤も當時彼等國民の位置は漸く改善されて來て居た。市民の內には其自由を得んとする行動が明瞭に見られた。土地財產の所有權が大に變化して來て中流の手に渡つたのである。政治上に於ける自由の精神は、大陸に於ては又自覺されず極めて漠然たるものであつたが、イギリスの社會には各方面へ其根據を据え、活動の舞臺を見付け出して居たのである)。

併しながらこの社會上の狀態とは全然對照をなして英文學は將にその黃金時代に入らんとして居た。イギリスの藝術上の修養は外國から得たのであるが(例へばイタリアの影響を受けた事夫れが其國民の元氣に富む思想に依り驚くべき程同化されて忽ちに偉大な發達をなし、歐洲の他の諸國を遙か後に瞠若たらしむるやうになつた。當にルネサンスの武士の物語が嚴格なアングロ・サクソンの空氣の內に浸潤し、人民の風俗を醇化したのみならず各種のフランスの書物が傳播し、至る處に人民の思想なり風俗なりを感化して居た。續いて從來フランス譯のみに依つて覗はれて居たイタリアの書物が迎へられ其摸倣といふも

のが行はれた。又スペーンからは極めて都合のよい刺激が入つて來た。即ち戲曲が入つて來て、之が中世以來觀者の好奇心を繫いで來た神秘劇若くは道德劇の束縛を脫せしめて、新なる傾向を與へた。斯うなつては、素より學問に趣味を有するものは文藝復興の一大光彩に眼を向けざるを得ない。されば中等社會若くは下等社會は尙藝術並に學問の事に就ては不關焉であつたにした處で、少くとも國名エリサベス女王とその宮廷との周圍には、著しい智識上の活動があつたのである。

此エリサベス王朝の光彩ある幾多の文人の先頭に立つて居るのが、將に起らんとする一派の抒情詩の頭領たるエドマンド・スペンサー(Edmund Spencer)である。其巧妙なる比喩的製作はよく時代の流行と趣味とに合つたもので、當時にあつては何事にも神話を愛好し、これが王宮の遊戲興行若くは諸の祭の際に用ひられて居たのである。スペンサーはその問題を掴む思想上の力に於ても、想像力の富有なる點に於ても、亦音律の流麗なることに於ても、イタリアのアリオストー若くはタッソーに劣るものではない。スペンサーに次いではサー・フイリップ・シドニー

(Sir Philip Sidney)が居る。シドニーは文藝復興の優美に添ふるに前時代の熱烈なる活氣を以てしたのである。自ら光輝燦爛たる勇士であると共に、心寛く任俠の精神に富み實に當代の精華ともいふべき人であつた。その傑作にはアーカディア物語(Arcadia)といふのがあるが、之は素より其他の諸作に於ても、彼が實生活に於て示せる道德上の調子を鼓吹して居る。シドニーこそ最も著しいシェークスピアの直ぐの前驅者たる一人である。

併しながら此時代の光彩と元氣とは主として當時漸く苦悶奮鬪の後自由になり得ず戲曲の方面にあつた。而して其進歩は急激で且つ廣大であつた。此青春の勢力と氣力に富んだ戲曲は極めて異つた色々の要素の結ばれて出來たもので あつた。即ち戲曲的宗教上の拜式やら、ラテン悲劇の遺物やら、イタリア若くはスペーンの戲曲の拙劣な飜案やらから出來上つたものであつた。併し夫れは突然に出來上り發達し、驚くべき程創意的の作物を出して廣つたものである。

此戲曲に於て亦中世の遺子ともいふべきはリリー、ロバート・グリーン、キッド、ジョージ・ピール(Lyly, Robert Green, Kyd, George Peel)等で、これ等が新しいその藝術の興起

する道を開いたのである。尙シェークスピア以前の戲曲家の一團に首領たるものは勢力無比なるクリストファ・マーロー(Christopher Marlowe)であるが、之に次で顯はれたものがシェークスピアである。シェークスピアと言へばその名のみで、既に偉大な觀念を人に與へて居るであらう(マーローはシェークスピアの前驅と云つてよからうか。彼は僅かに二十九才にして料理屋で爭鬪の結果殺されたが、若し今少し長生したらシェークスピアの競爭者となつたであらう。彼は其著作に於ても、其生活に於ても、同時代の人々に勝つて不羈奔放なる時代の精神を顯はして居た。由來シェークスピア前に周圍の文星を出したのは、實に此時代の狂瀾努力に依るものであつたのである。近代の批評の語る處に依れば、かの戲曲に顯はれる人物は極めて微な又力ある想像力を示して居ると共に、不思議にも中世的の傳說と文藝復興期の古典的精神とを極端に包合して居るといふ。例へばゲーテの大作の第一の先驅とも見るべきドクトル・ファウスト(Dr. Faust)其他マルタの猶太人、エドワード第二世(The Jer of Malta, Edward)は其適例である。

シェークスピアの初めの作は紀元一五八七年に出來て居る。其戲曲の材料と言へ

ば前代の人々が用ひたるもの若くは夫等を完成し、自分獨特の創作力を示し、又其天與の才を以て激烈なる情緒や、血腥き恐るべき事實など當時の公衆が渇望して居たものを盡く美化したのである。又その作は年を經るに從つて高尚に且つ著者の個人的特色を發揮して居るやうである。彼は悲劇に於て偉大に忠實であるが、喜劇に於ても同樣で、人間の精神を深く洞察し研究し且つ性格を描寫して活躍せしむる才を有し、恐るべき事、喜ぶべき事、微妙なる事、笑ふべき事、崇嚴なる事皆其材料となつた。即ち人情のあらゆる有樣をあらゆる形に顯し、又あらゆる變化の場合に於て示したのである。例へば德義、罪惡、厭惡、犯罪、温情、喜悦、悲哀、滑稽、沈憂等は色々の色彩を以て公衆に示されたのであつた。彼は實に恐るべき暗黑を創作し之を示すに神聖なる光を浴せ、斯くて明かなる對照を作らせる。例へば乞食と國王と、小供と老人といふ樣な取組を作るのである〔シェークスピアに關する書史は浩瀚なるものであるが、次の書物の如きは參考とするに足る。イギリスの新シェークスピア協會報告(Irussnetia of the deutschen Shakespeare Gesellschaft)〕當代の人心に強大な影響を與へんとする事を主としたので、十六世紀のイギリス

の戲曲家は此時代の强烈な熱情の流れに從つて推し移つて行つた。夫れ故極端に走らんとする傾ある天才の詩人は、只氣の合ふといふ事を以て其唯一の指導者とし力として居た。即ち失戀、悲哀、罪惡、狂氣、死等凡て悲壯な心象が絶えず詩人の腦裏に往來して居て、普通の考はその內に入つて來なかつた。漠然たる境遇に支配されてか、抑〻亦時の潮流に依つてか、彼等詩人の感じ易いその意識は、彼等が存在して居たまた彼等が活動して居た其場所の空氣を最も烈しく反映して居る。而して時代は如何と云ふに當時位悽愴な感を表白するに時はなかつた。ピエール・プローマン及びロビン・フッド(Piers Ploughman and Robin Hood)は當時より少し以前のイギリスの思想を代表したものであつたが、其後繼者たるこの時代にあつても此兩著作が代表する樣な事件が續々世間にあるので、當時の文人は夫れに依つて著しく刺激を受け、製作を出す事が出來たのである。

即ち當時の思想は道德の標準を變更し、社會を革新する暴風雨となつた。吾人は當時イギリスが其歷史の最も大事な時期に際會して居るのを見る。之こそ實に危險の時であつた。併し同時に光榮の時であつた。スペーンのアルマダ艦隊の來

た時であり、エリザベス女王の光榮ある御世でもあり、又ローマ舊教の滅落した恐るべき宗教的爭闘の時でもあつた。新世界の探檢の時代も此時であつた。ローマンチックの赫々たる光彩ある旅行、若くは冒險の勇にはドレーク、カヴェンディシ、ラレー等が居た。斯かる際に於て六十年間の永き月日イギリスの戲曲は驚くべき製作を出して居る其盛なる事後代が如何に力めても及ばぬ程人生を現實的に捕捉して居た。シェークスピアの後にはベン・ジョンソン(Ben Jonson)が出て居る。之は素よりシェークスピアに代るべきほどの大作家ではなかつたが、なほ色々な人物を寫し、又其元氣に富む諧謔を深き悲壯の感を以て充分に其天才を發揮し、珍らしきベン・ジョンソンとまで呼ばれて居た。シェークスピアの影響はボーモント及びフレッチャー、マッシンジャー、フォード、ウェブスター、トマス及びジェームス・シャーレー(Beaumont & Fletcher, Massinger, Ford, Webster, Thomas & James Shirley)にまで及んで居る(ボーモントとフレッチャーとは合作で凡そ六十曲ほど作を出して居る。二人はシェークスピアの後繼者で、彼の天才は缺いて居たが、その優美なる點に於ては彼よりも勝つて居た。彼等二人は又貴族的生活の事を知り、世間的の智識をもつて居た。そ

して時々淺薄なる批評の念なき公衆に依つては、シェークスピアよりはよく歡迎された。次にマッシンジャーはボーモント、フレッチャーの名聲を繼ぐ人であるが、其才もあり文も秀れて居りまた成功もしたに拘はらず、極めて貧しく、其一生を終つた)。十三世紀の初めに於て、イギリスの文界に名を馳て活動して居た人々は、即ち今最後に求めた如き者であるが、國民は其偉大なる事を知らず又暗黑野蠻の內に彷徨して居ると自ら考へて居たのである。而して其間にフランスの優美なる社會は所謂懷古的精神を以て浸潤されて居た(即ちクラシックの精神に傾いて居たのである)。

清敎徒の精神は既に時勢に對する攻擊叱聲に依つて之までとても顯はれて居たのであるが、シェークスピアの影響が滅却した時に、其異常なる盲進的な勢を示した。劇場は又幼稚なものであつたが、之が彼等敎徒の惡む處であつた。夫で彼等は小冊子を以て戲曲家を攻擊し、又政府にも訴へなどして、淸敎徒の文人は繰り返し〳〵劇場なるものを廢棄すべき事を叫んだ。併し初めの程は公衆が冷淡であつた爲め其叫び聲は無効であつた。社會の各階級の人々が戲曲に對して持つ

て居た趣味は日々に增大し、却つて作家の熱心がそれに添はぬ程であつた。演劇に對する嗜好は公衆の思想に固き基礎を持つて居たのである。夫れ故にエリサベス朝若くはジェームス一世の朝に於て傳道者が其熱血を濺いだる抗議を自分等の心を攪亂する遊戲、即ち演劇等の上に試みたが、夫は何等の効力をも持つて居なかつた。夫れ故彼等益、群集を煽動し暴れまはり痛罵を盡した。其結果はやがて彼等清敎徒の日が來るやうになつたのである。恰もカソリックの宗敎審問がスペーン半島に於ける凡ての發達を杜絶した樣に、此清敎徒の烈しい熱心も其自由を得んと欲する熱望と相合して劇場と役者とのみならず、其攻擊の極に達するや戲曲其ものをも一掃し去るに至つた。此結果は凡てのものを沈滯せしめ、演劇遊戲其他の快樂慰みを禁止したと共に、イギリスの戲曲の驚くべき進歩をも止めてしまつた。此進歩は驚くべきもので、前後百年に足らざる間に於て、戲曲史のあらゆる狀態を通過したとさへ云はれて居たのであるに、此妨害に遇つたのは頗る殘念な次第である。

ジョン・ノックス(John Knox)はウォーター・スコットやロバート・バーンスに先き立つてスコットランドの思想を代表した人であるが其顯はれた方面は宗敎の革新にあつたので、之も亦既にスコットランドに於て行吟詩人の琴を奏ひ去つて居た。過去二世紀間スコットランドの思想は神學上の議論に魅せられ、詩若くは小說に對しては嫌厭の念を持つて居た。イギリスに於ては文學の如き智識的快樂は充分な監視の下に許されて居たといふものがたゞ僅かに二三の有力なる聲が聞えるのみであつた。ジョン・ヘールス、チリングウォース、ジェレミー・テーロア、バックスター、バンヤン(John Hales, Chilingworth, Jeremy Taylor, Baxter, Bunyan)等が僅かにこの陰氣な時代の冷酷な狀態に活氣を與へて居たに過ぎない。生活には樂しみもなく慰みもなく笑ひ聲さへ神聖を叫ぶ口を濟すものとなされて居た。イギリスに於ける最も人氣ある作はおかげやなるバンヤンの作巡禮行(Pilgrims Progress)である。これは比喩的の物語りで、その舞臺は不思議な空想的な考を以て充たされて居るが併し興味もあり壯大な趣をも備へて居る大作である。」

斯かる有樣で全英國民は宗敎と政治との爭覗に心を任かせてしまつた。戰爭をなすべき兵士は敎議を論じ合ひ、敎室に入らんとする學生は立ち止まつて憲法

に就て論議を始めるといふ有樣であつた。清敎徒は道を歩くにも絶えずその双眼を天に向け、又その心は痛切の念を以て充ちて居た。その悄氣な顏、五分刈の頭、黑い衣服は彼等の辛烈にして社交を厭ふその氣質とよく調和して居た。これこそ實に陰氣な幽閉な時代であつた。併し何れの時代にも物がその極端に走ればその反動が起る事は避くべからざる事實である。吾人は清敎徒の極端な禁慾主義の後に王政復古時代の智的並に社交的放逸の時代が來るのを見た。

七

イギリスの事から直にスペーンの事に亙る、即ちシェークスピアからセルヴァンテスを說く事は、やゝ突飛のやうに考へられる。併しながら此兩國民の間には接觸の點、類似の點が少なからずある。兩者に共通な冒險な精神、國民的特色なる自負の念、兩文學の特質等は兩者の關係を示すものである。

吾人は既にスペーンが文藝の復興に關してイタリアの後を繼いだ事並にスペーンの人民は幼少の時から不思議な奇談に養はれて、その結果これを實現せんとして、半ば物語の如きアメリカの地に新鄕土を開き、あらゆる遠征と冒險とを

試み屢暴行奪掠等に依つてその空想的武士道を破り、之に汚點をつけながらも大に猛進した事をのべた。併しスペーンは勇壯なまた敬神的空氣に包まれ奇蹟と空想とに蔽はれて居たので、是等過去の桎梏を脫し、超自然若くは不可思議以外に想像の力を延ばさんとするにはなほ幾何かの歲月を要したのである。それで往々過去に戀々たるスペーンも漸くその舊衣を脫して近代的の趣味を味ふやうになつた。

かのスペーンに起つて盛んに行はれた勇士シッド(Cid)の物語並に傳奇(romancero)は漸くその跡を收めて、イタリア的肉感主義の一派に道を讓るやうになつた。スペーン固有の自尊の風は失せアリオストーの詩を諳ひタッソーの調子を朗讀する行吟詩人がその各市府を遍歷して行くやうになつたのである。

スペーンの國民文學の流れは文藝復興の出水の爲めに漲つた。ボスカン及びガルシラズコ・デ・ラ・ヴェガ(Boscan and Garcilasco de la Vega)等はその考の巧妙なのに於て秀れて居た。今や律語はスペーンに於ける日常語のやうになつた。その文人を一々陳べる暇はないが、只重なるものゝみを計上するにしても中々少々ではな

いこれ即ちアイベリヤ半島の黄金時代で、かのセルヴァンテスあり、フルタドー・デ・メントザ(Hurtado de Mendoza)あり、ルイ・デ・レオン(Louis de Leon)あり、モンテメーヨル(Montemayor)あり、大歴史家にはマリアナ(Mariana)あり更に快活なるピカレスク(一種の傳奇的小説の總稱)小説の作家數多あり、また無盡藏ともいふべきロペ・デ・ヴェガ(Lope de Vega)がある。この最後のロペ・デ・ヴェガを以てスペーン文藝の歴史は十七世紀の敢居を跨ぎ、カルデオンに達せんとして居るのである。今スペーンを他と比較するに、

イタリアに於てはトルクァトー・タッソーの作アミンタ(Aminta)は賞讃を博し、ヤコポ・サンナザル(Yacopo Sannazar)のアーカディヤ(Arcadia)がその幾版かを重ねて居た時にスペーンに於てはモンテメーヨルがその最も名のある傳奇牧歌ディアナ・エナモラダ(Diana Enamorada)を公にして居たこの作は一五四五年に出たのである。モンテメーヨルはその作の半ばで一五六四年に死んだ。それでペレス(Peres)といふ作家がその後半をつくつたが、無論大に前半とは劣つて居る。なほギル・ポーロ(Gil Polo)といふ作家が次の世紀——一六五四年にその續きを五巻にして出して居

るが、之は大に人の賞讃を博して居た。それでかのフランスの數多の小説家並にその最も成功した最も有名な牧歌の作者オノレ・ドルフェ(Honore d'Urfe)がその武士的傳記小説の上に戀愛の話を織り込むやうになつたのは實に此モンテメーヨル並にペレズ・デ・ヒタ(Pelez de Hita)の優美な小説にその模範を取つた故である。スペーンの勢は斯の如く實に盛んなものであつた。斯の如き影響はイギリスのシェークスピアにさへ及ぼして居る。例へばヴェロナ(Verona)の二紳士(Ton Gentlmen of Veroia)の如きはその尤なものである。

斯の如く十六世紀から十七世紀にかけてスペーンの豊富なる想像力は發揮して、歐洲諸國のローマンスを好む諸國に各種の新しい題目やらその扱ひ方などを知らしめた。そのスペーンの文人中にも特に嶄然として頭角を顯して居るものはセルヴァンテスでドン・キホテなるマンチャ(la Mancha)の武士の行動を深刻にして而かも滑稽的に書いた人である。セルヴァンテスは大人物である。併し不運の人でその辛勞と笑ひ聲とは全歐洲に鳴り響き、罪惡と人の弱點とに對して戰ひ勝利を博したが、併しその存生中は金も名譽も贏ち得ず、人々から重んぜられもしな

かつた。併し今はスペーンの文學中に玉座を占めて何人も之を爭ふものはない。彼は數奇な一生を送つた人で運命に弄ばれ、アラビア人並にキリスト敎徒の兩者の捕虜となり奴隷となり、戰場に出ゝでは苦しめられ、嫉妬惡意の弄ぶ處となつた。併し斯く不幸でありまた人々から不實なる待遇を受けたに拘らず、其心の長閑な樂しい處は失はれず、一生は小說の如く不可思議であつた。それでその全心と全想像力とをかの有名な人口に膾炙したドン・キホテの行動(Adventures of Don Quixote)なる一篇に收めつくした。此書は面白き而も哲學的な叙事詩で勇壯なる事と平凡なる事と不思議に混せ合はせた、人民の風俗信仰及びその愚昧な事の不思議な鏡である。また同時に空想と實生活と樂しき遊樂と密かなる苦難との矛盾した混和であるが、之こそ高尙なる心の人の向上心と現實なる事物の平凡なる事との間に常に起るべき映照を示したものである。セルヴァンテスの此書に於ける直接の目的は武士小說の影響を排除するのであつたが、此種の影響はフイリップ第二世の時代に極端に行はれ、終にスペーンの議會は之に關與し國王に依つて斯の如きものゝ排斥を求むるやうになつたのである。併しセルヴァンテス

のつくり上げた此ドン・キホテなる著作はその當初の考とは異つて、其結果は所謂一人の私すべきものでなく、人類共同の遺産とすべき世界の大作の一となつたのである。

此時代はまたポルトガル文學の最盛期で、當時此國の道德思想はその最高潮に達し、從つてそれから文學が鼓吹されて來たのである。少くとも百年間はポルトガルが文明世界の旗手たる位置を價値して居た。實に之が此國の最も光榮ある時代であつたので、此十五世紀及び十六世紀間に於て示したその燦爛たる光輝は遂に再び之を發現する事は出來なかつたのである。そして此隆盛はその國君の才能に歸すべきもので、その國君は歷史上比較すべきものゝない一種特別な仕事をなして居り、その斷然たる所行は自國に利益を與へたといふよりも全人類の上に多大な効果をもたらしたものである(例へば航海者と渾名されたヘンリー王の努力がなく又その次の君主ペドロの地理的智識がなかつたならば、ポルトガルの新世界發見の事蹟もあれ程非常な發達はなし得なかつたであらう。實にこのポルトガルのなした發見なるものは世界の商業を無限に擴大し、引い

て近代國民の風習を革新するといふ結果を起したものである。

ポルトガルの航海者は印度其他で主上權を有して居たが又その詩人歷史家は航海者と同樣光彩ある併しながらそれよりも永續すべき名譽を國家の爲めに贏ち得たのである。吾人は先づ音律に於て一種の巧みなる才能を持つて居つたベルナルディン・リベーロ(Bernardin Ribeiro)を擧げざるを得ぬ。此人は其才能に依つて色々な變化に富んだ考を詩に示したのであるが、それが更に智識と豐富なる想像力とに依つて益〻光輝を增して居るのである。此人はまたポルトガルの牧歌の創作者で、その理想的田園的生活は幾多の摸擬者を生じた。此詩人の次には古典的なサー・デ・ミランダ(Sa de Miranda)を擧げなければならぬ。此人は空想的ロマンティクな文人と正反對であるので大に注目されて居る。此空想的な方面の作者で著名なものはギル・ヴィンセンテ(Gil Vincente)であるが、此人はその粗大な寫生に依つて、約百年後のロペ・デ・ヴェガ及びガルデロンの先驅となつて居るのである。さて是等詩人の最後に最も偉大なるカモーエンスを味つて見る必要がある。その叙事詩は深く崇嚴の趣を示して居る。その一生の全然數奇であつた點に於て、

はダンテ、タッソー、セルヴァンテスに似て居て、カモーエンスは終生侮辱と無禮と不信實とに對して激しい戰をしなければならなかつた。そしてその一生の大部分を遠洋の航海に過し、自から歌を以て賞讃した。その自國が將に外國の配下に就かんとする時に當つて死んだのである。かれは小牧歌(エクロガ)に於てはガルシラッソー(Garcilasso)と技を爭ひ、抒情詩に於てはペトラルカと爭ふほどである。彼はまたポルトガルのヴァージルと云はれるが何人もその稱號を非とするものはない。何となれば其大作ルシアデス(Lusiades)はその偉大な考を示したもので、作者の完美したる文體と極めて巧なる音律の諧調を得て居る點に於てヴァージルと競ひ得るからである(一九〇三年にフランス、イタリア、スペーン、ポルトガルの文人や藝術家が集まつてカモーエンス會を設立し此詩人の作物を研究し始めた)。

歐洲北方の狀勢如何と見るに南方の諸國に後れざらんとして居るものはポーランドであつて、また文藝復興の光彩に對して多大なるその分配に與らんとして居た。只その隣國なる不可思議な野蠻のロシアはなほ永久の寂寞の內に埋もれ、歐洲の運動には局外に立つて居り、なほキエリ及びノヴゴロート(Kieri & Nov-

goród)の物語なる叙事詩の時代にあつた。即ちなほ粗野なる時代にあつたのである(ロシアの民謠は歷代の複雜した結果で、また組織立つた發達をして今まで續いて來たものであるが、近頃になりロシアの學者に依つて漸くその研究が積まれた。即ちその學者は、キレエウスキ、サカロフ、リブリコフ、ヒルフェルディンク(Kiniev-ski, Sekharov, Rybrikov, Hireferding)等で、また西洋の諸國にはラルスタウン、ビストロム、ダンベルク及びアルフレッド・ラムバウ(Ralstaun, Bistrom, Danberg, Alfred Rambaud)の著書に依つて紹介されて居る。その俗謠の豐富なること並に連續して居る點に於てはすべての俗謠研究者が驚嘆して居る處である(カインホルトのロシア文學の起原より近代に至るまでの歷史及びナークのスラヴ御伽談、アルフレッド・ラムバウのロシアの詩(A von Keinholt; Geschichte Derrussischen Litteratur Vonichren Anfängen. Bisauf die Nenesto Zeito. Nuake; Slavonic Fairy Tales. Alfred Rambaud; La Russie Poétique)參照)。

ロシア人は同じキリスト敎徒ではあるがアジア的キリスト敎徒で、歐洲のキリスト敎徒たるラテン人ゼルマン人とは深き溝壑を以て分れて居る。併しポーラ

 (323)

ンドも亦西方諸國の思想には門外漢であつたが、自ら大詩人、著明なる散文家を有つて居る事を誇りとして居た。その議會には隨分雄辯を耳にする事が出來た。何事につけてもポーランドの前途は有望であつた。そのクラカヴ(Cracov)の大學は歐洲の名高い大學と競爭し得るやうになり、第一流の學者がその敎授をして居たとへば有名なブルッゼヴォのミカエル(Michael of Brudzevo)の如きはその一人でその弟子にはまた有名なるコペルニカスの如きものもあつた位である。またそれと共にまた文學の諸方面にも名高い人があつた。ニコデス・レジニコカノヴスキ、ジョン・サモジスキ(Nicholas Rej, Kochanovski, John Zamojiski)及び冷熱に富んだるスカルガ(Skarga)等で、中にも最も有名なのはコカノヴスキである。此人はその最愛の娘の墓に實に人の心を動かすに足る、また永久忘るべからざる挽歌を棒げて名を得、また頌歌に於てはギリシアのピンターにも及ぶと云はれたがれはこればかりでなく叙事詩、抒情詩、諷刺詩、短詩等に於ても心を傾け、文學の精錬と音韻の諧調と並に感情の深大な點に於て大に秀れて居た。從つてポーランド詩人の王といふ稱號を充分に値ひして居た。また此人の下にはその師を辱かしめざ

る弟子が澤山に集まつたのである。ポーランド文學は斯くの如くその前途洋々たるものがあつたのであるが、不幸にして戰爭と外敵の侵入があり、これが爲めにその華々しき努力は妨害を受け、斯くして古代スラヴ文學の思想も感興もみな滅殺されてしまつたのである。

八

歐洲の一方にはトルコといふものがある。その過去の歷史から想像して何人も此國がなほ野蠻の狀態にありと考へるであらう。然るに此國民は一種の努力を有する國民で、その領土を巧みに廣げると共にその國語並にその思想をしてよく新問題に適應させる事をした。それ故に當時のトルコ文學は決して遊技の民であつた。その昔の韃靼人の口にした劣等な歌でなくして純粹の立派な文學であり、國の軍事上並に政治上の權力と相竝んでソリマン大王の時代にその絕頂に達したものである。

トルコ人は以前にギリシア人と交つて居た。併し後者の智的に秀れて居るといふ事に就ては全然これを知らずに居た。ギリシアは遂に其文學と藝術とを以て

此トルコ國民を敎化し、また感化する事は出來なかつた。併しトルコ人のペルシア人並にアラビア人に對する關係はまた異つて居た。アラビアのカリフ政廳の沒落は回々敎の信仰傳說並にそれに關する書物をトルコに輸入する事になり、かれ等トルコ人はこれに依つて敎育せられ、變化を受け、溫和なる民となつた。即ちアラビアやペルシア文學の傑作に接し、その寶庫から自分等に欠乏して居るものを自由に引き出した。一言にしてこれを蔽へば詩歌も道德も哲學も科學もそれから學んだのである。彼等は實にカイヤムやハフィツやサーヂやドジャーミ (Khyyam, Hafiz, Saadi, Djarmi, ペルシアの詩人)と等しく同じ源泉の水を飮んだのである。こゝに於てかコンスタンチノープルには幾多の詩人が顯はれた。何れの國民にも皆その文華燒發の黃金時代がある。ギリシアにはペリクレスの時代あり、ローマにはオーガスタの時代あり、フランスにはルイ第十四世の時代あり、イギリスにはエリサベスの時代がある。その如くにトルコはソリマン (Solyman) の時代を以てその黃金時代とする。これは即ち神秘的のフヅーリ (Fouzuli 一五五三年に死す) 奔放なるヂ

プスデ(Deliburade)兩詩人の築えた時代である。フヅーリは薔薇と杜鵑との面白い戀物語りをうたつて居る。またそれに次ではバーキ(Baki)といふ詩人が居る。批評家は萬人の前に出し得べき立派な摸範とすべき詩であると此人の作に就いて云つて居る。その詩には一種の魔力と深い考がある。トルコ人はこれを稱んで抒情詩人の王とも云つて居る。當時は斯くの如く幾多の大詩人が輩出したのであるが併しその時機は短くあつた。そしてトルコ即ちオットーマンの文學は再び特筆するに足るやうな非常な盛期には達しなかつた。殆ど現代に至るまでトルコの思想は外來の影響を受ける資格もなかつたのである。

さて今から此歐洲の東端を去つて再び中央部に戻り、さきに半途で棄てゝ置いたフランスの事を語らう。當時のフランスの熱望と時の事情とを閑却する事は出來ぬ。その熱心の結果は古文學に對する熱情をイタリアから受け繼ぎ、さらにこれを自國の性癖と趣味とに從つて改造するに至つた。これが即ち漠然とではあるが將に來らんとして居た驚くべき變化の時代を暗示したものである。またイタリアの影響を受けなかつた時のフランス國民は戰爭に飽き、幾多の辛

苦を經て全く疲勞の狀態にあり、後繼者の出で事後をよくする事を熱望して居た。然るにイタリアは又フランスのルイ第十二世フランシス第一世の爲めに征服せられながら、却つて後者即ちフランスの王に元氣と活氣とを與へた。即ちフランスは斯の如くにしてイタリアに依つて與へられた活力と藝術に關する覺醒並に人生に對する喜悅と希望の情とを歡び迎へた。茲に於て十六世紀の初めは恰かも將に來らんとする春を待つが如き有樣になつた。悲哀と苦悶とは只記憶に存するばかりであつた。その影響の偉大であつた事は當時大作が世に出たのでも知られる。キリスト敎に依らざる修養が語に顯はれ、政治と哲學とを占有し、人生と社會に對する從來とは全然別途な考を立てるやうになつた。

一方にはクレメント・マロー(Clement Marot)の如き詩人は國民的美所を謳歌すると共に、一方にはロンサール(Ronsard)並にその一派はギリシア、ローマの作物からその感興の泉は得て居つた。

此古典にその詩興の源泉を求めた一派は之をプレーアッド派(The Pleiad)と云ひ、その主領は即ちロンサールであつたが其下にはバイフ、デ・ベレー、レミー・ベロ

ー(Baif, du Bellay, Remy Belleau)等の著名な詩人が屬して居つた。マンサールは是等の詩人を率ひて、當時のプランスにホーマーやピンダルやまたアナクレオンの詩を示してやつたのである。特にアナクレオンの名はロンサールと離るべからざる關係になつて居る。ロンサールの詩は流暢で其想像は創意に富み何時でも富有で大膽で又常に生命があり熱情が溢れては居たが、又其學識が深大ではあつたが充分に消化されて居なかつた爲めに、往々其詩に煩ひをなして居たやうに思はれる。例へば其誇張な言語を用ふる時には、殊に其不調和が耳にさはる。併し一度自然に戻り其藝術と自然に對する眞情を吐露するとなると、其筆は只美をのみ織り成すといふ觀がある。表情の富有なる事、想像の大にして且つ品位ある事、創意の美妙なる事、描寫の微かなる事、これ等は實に彼の長所であつた。彼の門下はそれを模擬したのであるが、彼に及ばぬ事勿論である。

此プレーアッド派の爲め新しい音律が出來て、これが全歐洲に廣がる樣になつたが、それがスペーン、イタリア、イギリスの詩人に依つて借用され多少の改訂を經て、それから特別な押韻法が出來るやうになつたのである。

併しながらこれと共に一方には不祥な努力が顯はれた。即ち詩の想像的の美を文字用語の如何と同一にする傾向であつた。これはロンサールの望んだ高所から一轉して技巧の美に走らんとするものであつた。その勢力は斯樣にして起つたものである。ルイ第十一世の治世の晩年に生れた青年は彼の煩瑣學派に不安を感じ、熱心に新しい考を以てラテンの大作を勉強し、其間から中世時代に於て又觀取しながつた深い意義と並にその形式の美とを捕捉せんと欲した。即ち彼等は寺院の圖書館内に殆ど忘れられて居るルークレシアス、タシタス、クィンチリアン等の大哲學、心理學並に修辭學等に注目した。ヒューマニストの名はイタリア人の心を動かし、王公の助力をかりるに最も有力であつたが、同樣にフランスに於ては學者(スカーグァン)、文典學者(マーリアン)並に詩人藝術家の名がフランシス第一世並にその姉妹マーガレットの周圍に於ける特別なる團體を形造つて居た。それでヒューマニズムといふ事が極端に走り、ギリシア化し、ラテン化する勢力は顯著になつて、國民的思想は萎靡し、凡て何事も外國若くは古代の思想に打ち任かせてしまふ樣になつたが、これが國語の獨立と其精確といふ事に就いての危險を起すものであつ

た。それと共に一方では古文學を訂正するものである。學識と古代言語の學は最も重んぜられ、ビュドー、ルフェトヴル・デターブル、ラムス、ジュリアス及びジョーセフ・スカリゲル、ミューレー、ドーラー、ターネブス(Budé, Lefevre d' Etaples, Ramus, Julius & Joseph Scaliger, Muret, Daurat, Turnebus)等は其例を見ざる程尊ばれた。世間はこんな調子になつて、詩や思想よりは文字の研究に熱中するに至つた。これが即ちロンサール一派とは全然其趣を異にした流れであつた。併しながらそれ等を超絶して何れの派にも屬せず、學者であり又諷刺家あつたラベレー(Rabelais)がこの時に居て其不思議な大作に依り時代の二特色を一身に集めて居る。即ち思想の剛健と深大なる學問とである。凡てフランスの散文が其自由と美麗とを得るやうになつたのは此ラベレーの力に依たので、彼の散文の末だ開かざる當の如き美を備へたる事は何人も承認する處である。さて又ギリシア、ローマの勢力といふものは、表面にこそ見えないが充分戯曲の上に顯はれて居た。例へばジョデル並にロバート・カーニエ(Jodelle, Robert Garnier)の悲劇に於ける如きがそれで、これ等の人々が名聲を博したのは其實際の價値に依ると

いふよりは、寧ろこの事實即ちギリシア、ローマの勢力に從つたといふ點にあるのである。ロンサールもヨデルの作を以て完全に近いものとなし、これ等の人々がソフォークレスやメナンダーしのに比すべき光榮をフランスに與へたと云つて居る。斯かる賞讃の辭は吾人より見れば少しく度外れに考へられるが、當時一方には彼の古典の勢力があり一方には戯曲作家のなかつた有樣を考へれば無理もないのである。

九

下つてヴァロア王朝の時代になつて文學は他の方面に向つた。實は當時はフランスの危機であつて國を制統するものもなく、宗教上にはユーゲノットと其他との爭があり、又政治上にも思想上にも交々黨を結んで爭つて居た。そして其不定不安、不決心の狀態で推しうつり、或時は宗教上の異端を好遇するかと思へば忽ち又迫害し、自由思想に對して好意を表するかと思ふと又之を苦しめ始める。表面ではイタリアの勢力を排斥し、而かも一方では其詩人の戀愛に關する考や道德の放逸を學んで居た。更に進んでは內亂の騷ぎ、宮廷の驕奢、職人組合の爭等があ

つて、當代の文學に暗澹たる殺伐な色彩を與へた。例へばモントリュック(Montluc)の追想記、ドービニ(D'Auvigne)の悲劇(Trajique)の如きはそれで前者は「軍人のバイブル」と云はれた程で、又後者に至つては怒氣が全篇に漲つて居るのである。併しながら暴風は徐々におさまりつゝ、フランスの特色なるゴール的精神(Esprit Gaulois)は再び回復される樣になつた。此時に顯はれたものはモンテーヌ(Montaigne)と其友人シャロン及びラ・ボエチー(Charron, La Boëtie)であつた。モンテーヌは世間の野心を離れ、時代の爭亂の爲に心を動かされぬ樣に世を送る事を願ひ、自分は自分一個獨特の生活を送らんとした。それで其作の題目を自身の感じた事に取つた。即ち日々自らの爲に智識を得んと熱中する自分の心の反省を筆記して置いたが、之がモンテーヌの所謂有名な文章(Essays)である。彼は自分以外に何等の材料をも要しなかつたのである。彼は生命ある詩的な心意と自からなる修飾のなき文體並に創意的想像とを有し、且つ文字に富み、表白に巧みで、要するに永く一異彩を放てる文人として殘る事である。其作はまた感化の力ある事驚くべきもので、多くの人がその不朽の泉から其思想の水を汲んだのである。

第十五章

壯麗なる古典時代の曙光——尙攪亂の時代

奴隷的模倣——文學に於ける目的の不確定——コンセッティズム、カルティズム、衒學——マリニズム、コンゴリズム及びエスティロ、カルトー——良趣味及び常識の反動——フランス及びイギリスに於ける社會の狀態——王政復古時代の放肆を招ける完全なる反動、著しき滑稽的調子の發動——イタリア文化の狀態——スペーン、オランダ、ドイツ——三十年戰爭の後——森嚴なる道德上の苦惱——佛獨時代——多數の歐洲國民等しく模倣を愛好す。

一

紀元一五九八年はヴェルヴァンの平和會議の日であるが、この日を以てフランス第一世以來フランス、スペーン兩國の間に永く蟠つて居た葛藤が修りを告げる事になつた。また同年の終りを以て其會議に於ける一方の君主、惡烈なる迫害者なるフィリップ第二世が死んだ。フィリップ第二世は當時の最後の代表者であつたが、そ

の死と共に耶蘇の正統なる教派の聖所に汚點を與へて、これを滅した處の血を見ざればやまぬその狂暴なる行動も葬られ終つた。こゝに於て歐洲は稍〻平和の時期に入り、これに依つて世の進歩を見る事が出來るやうになつた。

顧れば十六世紀は暴風雨の如き時代で、人々互に不和の熱に浮れ、教義の爭を事とし、カルヴィンの本國スコットランド若くはフランスに於ては宗教上の著作にもその跡を印して居る程であつた。然るにかの温和なるサルの聖フランシス(S. Francis de Sales)が宗教改革派の粗放なる神學者の後を追つて進んだ時、吾人は妥協の時代が接近した事を認めるのである。人々の刺激を求める事が度が減じて來た。間は洪水が退いて、聖い箱船が再び顯はれたやうなものである。同時に熱心執着の精神が世界から消え失せてしまい、宮廷などにも見られず僅に修道院の奥などに潜んで居るのみであつた。それ故サルの聖フランシスは再びこれを世間に導かんと欲した(此僧の大作は一六〇八年に著はされた信神的生涯の序論(The Introduction of The Devout Life)といふので、幾度か飜譯され又改版されたものである。素と出版の目的を以て書かれたものでなく、全く當時の著名な人々を稍

神的に導くつもりで書いたものである。此書の如何に立派なものである事は著名の人々のこれに對する考を見れば直に解る。即ち莊重なるボスシュエ(Bossuet)も、温雅なるフェネロン(Fenelon)も、剛健なるブルダルー(Bourdaloue)も、性急なるヨセフ・ド・メートル(Joseph de Maistre)も、其眞正直で而もその術に於ては巧みに内部生命の神秘を明快に扱つて居る事、並に著しく實際的特色のある事、要するに著者の驚くべき才能を何れも一致して賞讃して居る。またモンテーヌ(Montaigne)は、從來一部狹隘なる學派のうちに限られて居た道德と哲學とを一般の人の興味をひくものとなした。のみならず、モンテーヌはまた宗教的生活を交際社界に行はれるやうにした。其温容は周圍の人々にまで感化を與へたのである。斯くてフランスは職人組合のこれまでの爭から脱し、又社會上宗教上の平和の爲めに元氣を回復して、前世紀の初めに於けると同じ樣に平和なる發達妨害のなき進歩をなさんと欲して居たのである。即ち幾多の名家が輩出し、散文に於てはグェズ・ド・バルザック(Guez de Balzac)がその流麗と機智とを以て第一流に立ち、戲曲に於てはコルネーユ(Corneille)がロトルー(Rotrou)に次いで起り、抒情詩に於てはレ

ニエに次でマルアルブ(Malherbe)が立ちやがてルイ第十四世の下に成熟すべき偉大なる智的運動の基を置いたのである。

第十六世紀のフランスに於けるギリシア及びラテン文學の影響は恰も急流のその勢の下に幾多の貴重すべきものを運び去り、その跡に只荒廢を殘したやうなものである。それでマルアルブの如きはその運び去られた寶石を求めんとせずして、むしろ荒滅の跡を修繕せんと力めたのである。例へばかれは溝を穿つたのである。併し流れは矢張りその欲するまゝに勝手な方向に行かんとして居た。一言にして蔽へば新時代は直ちに完全なる位置には達し得なかつた。また左樣に一躍して完全になるものではない。それはかの偉觀をなした後の古典時代に至つて見らるべきものである。此時代はなほ前時代の强烈な勢を持つて居て、文學の如きはなほイタリア、スペーンの模倣に力め、其缺點とも言ふべき輕浮なる趣には心附がなかつたやうである。如何にも模倣は第十七世紀初期の一般の風であつて、それが凡ての文學に顯はれて居たのである。ルイ第十三世の時代にイタリアからフランスに來たマリニの如きは度を過した程の大才を有して居な

がら普通の常識を缺いて居た一例であるが、この人が用語を弄び彫琢をした言ひまわしをなし、またその奇警な句とか、淺々として盡くる事なき達辯とかを以て、一般の文學上に多大な害を與へた。又人の感情に訴へるといふよりは人を驚かさんとの望みを有し、理智、情操等の事には一向に心を用ひず詩を作るに一句毎に警語(Concetti)を吐く事を以て能事として居た。華々しい印象を好み、變つた句を對立させ、また尋常でない思想を組みあはせ、普通に見るべからざる結果を求めたが、それが流行になつて非常な熱心を以て人々に迎へられるに至つた。斯んな風はイタリアのタッソーにもあつたので、ロペ・ド・ヴェガの如きは彼を評して、マリニオを太陽とすればタッソーはその曙であると言つたが、これは必らずしも誇大な言ではない。實際タッソーの重んぜられて居たのはその驚くべき技巧と言句の豐富な處にあつたのである。マリニはフランスに來て歡迎された。又その影響は偉大なものでマリー・デ・メディチの如きは彼の技巧を讃美し、彼を以て世界第一の眞正なる詩人であると云ひ、特に世の注目を惹いた程であつた。交際場裡に彼が一たび顯はれるや、恰も太陽の前の群星の如くその影を潛めた。彼は斯の如く

にして一派の詩風作風の基となり模範を示したわけで、爾來歐洲の文學は盡くその影響を受けたのである。コンセッティズム、カルティズム、ゴンコリズム等はみな之とその質を同うするもので、何れもアリニズムの一派である。

斯くの如き殆ど無意味なる技巧を一言一句の內に挿んだものは、スペーンのコンゴラ、モンタルヴァン、グラシャン・レデスマ(Gongora, Montalvan, Gracian Ledesma)等であつた。此內のルイ・デ・コンゴラは想像力の強い人で且つ創作の才のあつた人である。併し不幸にして文學不振の時代に顯はれたのである。その初めての作は詩集で、その形式は簡單であつたが、その調子は高尙にまた壯重であり、少しの誇張もなかつた。例へばその作不撓艦隊(インヴィンシブル・アルマダ)の頌の如きはそれである。併しそれは彼の名を成すものとはならなかつた。それで彼は何とかして頭角を顯はさんと欲し、終に普通の途を棄て、熱心にカルトリズム(Culteism)に潛心し、その先輩ルイス・デ・レオン(Louis de Solomyor)を凌駕したかれは新しい文體を創意した。否殆ど新しい國語をつくり始めた。その文體とは華々しく、新語を用ひ、漠然たる比較、若くは意想外なる比喩を用ひ、更らに强いて文の組織をかへるといふやうなことを

やつたのである。さてコンゴラとその門下のモンタルヴァンは自分等の說が行はれたので得意であつたに相違ない。併しこの不思議な彫琢を施し色彩を加へ金箔をつけた斯くの如きを Estilo Culto といふ(此 Estilo Culto といふ作風はポルトガルがその起原だといふから全く無意味な文學に墮落してしまひ、終にはスペーンとイタリアの詩人の間に競爭が始まり(此 Estilo Culto といふ)文辭は漸く發達をしたが、さてそれと最も意義の解らぬ纖語、竝に不合理な文句を多く挿入し得るかといふ事を競つたといふ位である。彼等此派の詩作家の望む處は單に其結果を有力ならしめんとにあつたそしてそれには意外の事若くは人を驚かすやうな事を巧みに言ふ事を以て第一として居た。之はコンゴラの派でもマリニの派でも共に一致する處であつた。故に彼等は人の靈性に訴へる事、思想を動かす事を忘れて只其詩が讀者を驚かしさへすればそれが即ち勝利であると考へて居たのである。

全歐洲は殆ど此惡趣味に捲き込まれてしまつて、之を以つて最も立派なるもの優美なるものとなし、又思想の最も氣高い表白であると考へるやうになつたの

である。

イタリアに於けるコンセッティズム (Concettism)、イギリスに於けるリリー (Lyly)のユーフュイズム (Euphuism)、スペーンに於けるカルトリズム (Caltorism)、其他ドイツに於けるホフマンスワルダウ及びローヘンスタイン(Hoffmannswaldau & Lohenstein)の衒學的固守的の作風、竝にフランスに於ける所謂朋黨 (Coteries) の矯飾等はみな同一のもので、恰も道理と自然とに對して反對の同盟を形づくつたやうな有樣である。莊重なるイギリス文學へユーフュース物語 (Eupheus) の出現を歡呼して迎へた。之こそ眞に此派の最も適當なる代表作で如何にも心を惹くものである。抑イギリスの散文はアスカム・ウィルソン (Aschum Wilson)等に依つて莊嚴單調に傳へられて來たものであるが、それが爲めに今や此變つた癖のある小說を喜び迎へた次第である。其故は實際此風が前の謹嚴莊重な文に優美盛裝竝に調和の趣きを添へたからである。

リリーの著作を出版したブラウント (Blount)といふものゝその出版の序に言ふ處を見るに、次のやうな事が書いてある。曰く、わが國民は彼(リリー)の敎へたる新

英語に負ふ處が多くある。即ちユーフュースと彼のイギリスなる書は實に斯の如き英語を用ひ始めたものである。凡てわが宮廷の貴婦人は皆其門弟であつて、苟もユーフュイズムを語る事の出來ぬ貴婦人と同樣に輕蔑されたものであつた。以てその勢力を想像する事が出來る。凡ての事を優美に風流に語るといふのが此極端に衒學的な文學の唯一の希望であつたが、之が一度フランスでラ・ブイエ家(Hôtel de Rambouillet)の盛へた時分で、少數の一團この家に集まり詩を修めたのである。それでこの氣取り矯飾なるものは、技巧的の心をさけ親密の情を吐露すべき私の手紙にまでも及ぼした。學問のあるものはその私書の內に其才筆を示して喜び、また極めて必要のない事を流行の趣味を以て巧みに書く事などを考へて居たのである。手紙の文體は決して獨立した他の文辭と離れたものとなるわけには行かない。矢張社會上の事物、文學上の傾向と同じやうに衒學の色を以て染められて居た。婦人の室に於ける儀式作法を云ふても婉曲極まる辭句を用ひて之を律語に顯はしたものであるが、其結果は實に滑稽に陷つて居る。用語を弄ぶ事は最高の技術と考へられて居た。併

しその警語妙句を餘り澤山に濫發したので終に平凡となり終つた。併しその極矢張常識が其頭をあげ、その主張を通し終に勝利を制するに至つた。「アラン」で衒學者流に依つて修められたユーフュイズムはモリエールの嘲罵の爲めに消滅した。併し他の諸國ではなほ餘程後まで行はれて居た。特に其本國なるイギリスにおては永く行はれて居て、後のカウレー、ウルラー(Cowley, Waller)にも殘り、さらに或る度まではミルトンにも及ぼして居た」。

斯くて漸く常識の重んぜられるやうになつたので、此矯飾的文學の本家ともいふべきイタリアのペンシエリ(Pensieri)もスペーンのカルトリストス(Cultoristos)も共にその作風が公衆の注意を惹かなくなつたので、之を一變するの已むなきに至つた。併しこの作風にも一つの利益がないでもなかつた。それは當時の粗野なる風を緩和し、優美な風を添へるには間接の効力があつた。さてスペーンから來た此風は先づその勢力を失つた、併し其結果としてフランスにスペーンのものを求める嗜好を殘す事になつた。併しまた公衆は漸く學ぶ處があつて、單に表面のみ光るものと實際に光輝を持つて居るものとの相違を知り、終にはその文

事に關しても、怪しき複雜なる裝飾をさけて單簡なる作風を願ふ樣になつたのである。

簡潔といふ事は最も普通に求められるやうになつた。之がやがて莊重なるアカデミー(國立文藝院)の文體を呼び起す基となつて、それがまた十七世紀佛文學の特色となるのであつた。

二

文學は衒學、矯飾、極端に走る等の煩から脫し、從來國民文學を左右して居た各種の外國の影響は卻けられ、趣味と文體とは清められ、文學上の理想は正當なる處に復じた。そして形式と實際と古代的と近代的と眞實と優雅とは少しづゝ一致して大作を出すの素を定めるやうになつた。

又フランス國民の特色である社交的傾向並に對話の趣味は流行を追ふサロンと口語を互に批評する嗜好の爲めに大に發達せしめられた。その最も盛であつたルイ第十四世の社會は次の二つの事實に蔽はれ得る。即ち第一は極端なる風俗の優美、第二は文學の高い標準、これである。

ルイ第十四世の時代は特に優美な文化に進んだ時代であつて宮廷の人々もアルセニス(Arthenice)に紹介される事を欲した位で、最も高貴な生れの人も術學者流や女流文人と共にカセリン・ド・メディチ(Catherine de Medici)やラムブイエ侯(Marquise de Rambouillet)やその娘のジュリー・ダンジャンス(Julie d'Angennes)の家に集まつたものである。そしてまた其集まる人々の内にはマルアルブ、ラカン、マダム・ド・サヴィニエ、マダム・ド・ラ・ファイエット、大コンデ、僧正ド・ラ・ヴァレット、ブッシー・ラブタン、マドモアゼル・ド・スカデリー、タルマン・デ・レオー、ヴォアチュール・ラ・ロシフコー、コルネーユ、ゴドー、其他多くのものが(Malherbe, Racan, mme. de Sovigne, mme. de la Fayette, the "Great Conde," Cardanal de la Valette, Bussy Rabutin, mlle. de Scudery, Tallemant des Réoux, Voiture la Rochefoucould, Corneelle, Godeau)があつて、彼等は言語の純化を話題とし或は彼等の最負にするゴンベルヴィエ、ラ・カルプレナード、或はスカデリー(Gomberville, La Calprenade, Scudéry)等の小説を主題として或は論じ或は談じたのである。それでこの自ら出來た才人の文藝院(アカデミー)の事を考へるのは必要な事である。何となれば其處で與へられた評定は文學上の名譽並に成功の上に特殊な勢力のあるものであつたからである。名譽を得、有名になり、若くは信用をさへ得るにはラムブイエの邸宅に出入する事が必要であつた。尤も斯く優美典雅な文學に愛着し、思想上の快樂に身を委ねて居た交際社會はこれまた矯飾に陷つた事は事實である。併しながら斯の如き社會に依つて從來イタリア、スペーン等から輸入されて居た古い過去の習慣的の思想は打破せられるやうになつたのである。併し斯の如き文藝上の修養から來る永久の効果は言語の純化といふ事にあつたのである。斯かる勢でフランスの文藝並に社會の上では平衡とか優美とか區劃とかの感が著しくなつて來たのであるが、それには二種の勢力が其方面を異にして大なる働きをなして居た。即ちその一つはラムブイエ家で一つはフランス文藝院(アカデミー)である。此文藝院はその頃コンラール(Conrart)なるものに依つて建てられ、國令に依つて認定せられ、僧正にして宰相なりしクシェリュの親昵に依り國立的のものになされたのである(ベリッソンなる人の記する處に依るとフランス文藝院は一六三五年勅命に依つて定められたものであるが、其起原はそれより四五年以前にあつて且つ其成立もある方面から言へば偶然の事であると言ひ得る)。

顧みれば前世紀のフランス語は甚しき不確定の狀態にあつた。素より特色を有し變化に富み、興趣を持つて居り、且つ自由奔放であつた。併しそれと共に規律を缺き不確實で變更しやすく、筆者の心次第で勝手に用ひられたものであつた。即ち南方の用語と北方の用語とは異り、各州みなそれを異にし、或はギリシア、ラテンより或はイタリア、スペーンより用語を採用し、其種類の多き事は著者の數と同じく、著者は各々自個獨特の言語辭句を用ひ、その個人的特色を示して居た。それのみならず文の組織から語の綴に至るまで人々各異つて居て、それが永く文法學者の努力を無視して居た。然し之を統一し整理する必要が終に感じられ、ヴォーゼラス(Vougelas)なるものが改革者の先頭に立つて働き出した。それから文藝院の多くの規則も出來たので、それが往々極端に走る事もありはしたが併しこの規則の爲めに從來勝手に用ひられた用語の語尾が一定の形をとるやうになつた。文章組織の法も一定し用語は制限せられ又その定義も定められた。前に一寸述べたバルザック(Balzac)は既にフランス語に調和と變化を添へる事をなしたバルザックに次いではホートロー ヤル修道院に屬する文人が其跡をつぎその

文體の誇大的な處を去つて有力ならしめ學理に於ても實際に於てもそれを簡明にした。從つて觀念も自から明確になり、又自然の結果として純粹になつた。哲學に至つては從來煩瑣學派の手中にあり、爲めに個人の努力は止められ、みな一定の規律の下に收められて居た。然るに文藝復興期に及んでプレトーの威嚴が重んぜられ、續いて煩瑣學派の攻撃となり、その内の美點をさへ無視するに至つた。併し當時之に代るものは何もなかつた。觀念は只機械的に目的もなく引き出されて居たのである。この際にデカート(Descartes)が顯はれ、恰も翼を張つて飛揚したやうに形式と傳說とを破り、その魔術の如き考察に依つて之まで囚はれ居た人間の道理心の進むべき道を開いた。既に人々の心に起つて居た考察點から出立して、彼は革命的の運動を始めたが、それがやがて外界的威嚴を一掃し、良心を承認する事に至つた。言ひ換れば煩瑣的理想に代へるに近世的精神を以つてしたものである。

なほデカートの哲學を筆にするや、古典的ラテン語を取らず國語を用ひた。その事は恰もドイツに於けるルーラル並にフランスに於けるカルヴィンが神學に於

てなした如き事を哲學の上になしたのである。デカートは之に依つて思想の各部に於て全國の用語を一定するに與つて大なる功績があつた。

ニサードの言ふ處に依るに雄辯は凡ての他の藝術を推奬するもので、曾に言語の美を以て滿足せず、その學理の力と推理の光彩とを以て人心に影響を與へるものであるといふ。斯の如き雄辯は即ち當時の法となり、一般に是非修めなければならぬ人々の理想となつたのである。

第十七世紀を進んで行き、其大家の作を(第二流の作に至つては遙かに下る)研究すればするほど、吾人は大時期に入つて行くといふ感を深く覺える。吾は其處に最も高い智力の完成—即ち雜駁中に於ける統一を見る。この古典的時代はその結果に於ては絶對的に統一して見える。併し精密なる研究者には慥くべき複雜の有樣を呈して居るのである。ボアロー、ラ・フォンテーヌ、パスカル、フェネロン、ボッシュエー、バイル、ラシーヌ、ガッセンディ、ブリュエー、ブールダルー及びサン・シモン (Boileau, La Fontaine, Pascal Fénelon, Bossuet, Bayle, Racine, Gassendi, La Bruyère, Bourdaloue & Saint Simon) 等は即ち當代第一流の人々であるが、此人々の內に幾多の相違、幾多の陰

影のみならず幾多の矛盾が見出されるが、此內最後のサン・シモンは人物描寫の大家で、第十七世紀終末の最も著名なる文人であると共に第十八世紀の最も秀れたる代表者たる二重の特權を持つた人である。

吾人は暫らく斯かる仲間に交つて充分に著者並に作家の事を研究したいと思ふ。その內にもボアローは平凡なる幾多の性質若くは資格を巧く一身に集めてその平均を保たしめ、斯くて當代の第一流になつた事やら、ラ・フォンテーヌが多くの模倣をするに拘らず、到底人の模倣する能はざる處を持つて居る事などを研究して見たいのである。またモリエールの大天才は非常な元氣の中に深遠なる思想をたゝへ、自身は陰鬱なる人であつたに拘らず世界に與ふるに喜劇の最も完全なる模範を示したる事を論じ、或はラシーヌが悲劇に關する技巧上の制限を妨げながらもよく人心のあらゆる情緒を描き、自からが守つて居た美に關する完全なる理想を忠實に守つて、而して不朽不滅の形式の下に眞理を開明するを得た事實を說きたいと思ふ。又更に進んではラ・フリューエーの技巧は時の風俗を巧みに實際に示した事から、フェネロンとヴァージルの比較をなし、又一寸でもボシュ

エの長所と短所とをのべ且つその大哲學的理論家であり、大僧侶であり、同時に政治家であり、又君主の諮詢者であつた事を述べたいと思ふ。ボシュエは其言語を自在に用ふる點に於てはプレトーと競ふ事が出來、哀な趣を捕へるにはコルネーユと比肩し、同情に富める事に於てはサン・シモンと等しく更に人生の實際を了知する點に於ては、それを利用する主義をこそ異にして居たが、ヴォルテールと同列に置くべきものであつた。併し著者は今フランスに於ける第十七世紀の只表面丈けをも充分にする事は出來ぬ。實を言へば此千古無比の光彩ある時代に關しては、到底著者の企及すべからざる筆を以て之を論評して居るものがあり、又よし其力量を有して居たにした處で、此著の如きものでは到底それを試みる餘地はないのである。

フランスは當時外交的手腕の確實であつたと內政の整つて居たので歐洲の政界に偉大なる勢力を有して居たが、其文藝上の光彩と藝術上の成果とはまたその勢力を益〻增大するに與つて力があつた。

併し斯の如き王國の光榮と燦爛たる文星の羅列も、社會に蟠つて居た窮迫を蔽

ふ事は出來なかつた。歷史は此時代の光輝の背景となつて居た暴狀災害等を無視する事は出來ぬ。權力と信用との濫用、作者の驕慢、宮臣の卑劣等より、上流社會に於ける財政上に關する腐敗の行爲竝に社會の下層に至つては極端なる窮乏に陷り、特に地方に至ては麵麭を得ずして草を食つて居るといふ程になつた事、更にアウグスブルクの役の間、フランス陸軍の受けたる苦難若くはスペーン王位繼承の戰に於ける侮蔑の如きは凡て歷史家の注目を免かれる事は出來ぬものである。また兵力を以て多數の人民を强迫し、騎兵を派遣し劍火を以てラングドックの自由の市民を威壓し、耶蘇舊敎の信仰に改宗せしめた事も特に永く銘記される事であらう。

是等の點に就てルイ第十四世と其治世は極めて緊要なものである。運命は實に此君主をしてクシェリューが政治上の天才を以て得たる效果を自からに收め、更にマザラン (Mazarin) の才能を用ひて、その治むる王國を、禍災の後を承けたに拘はらず、前代よりも更に偉大ならしめ、その一身の光榮に添へるに當代に於ける天才の喚發を以てし、遂に是等二人と並んで自からをフランス史中分つべからざ

る三偉人となしたのである。併しルイ第十四世は自分一個としては甚しく無學で、未だ嘗て書物を開いた事もない位であつた。そして其人民は永く壓伏され苦しめられ終には消滅するに至つた。その結果フランスの贖ひ得たるものは僅かにその國民の秀れて居るといふ自負の念と社會の安全とに對する滿足の感のみであつた。而もその自負若くは滿足の感はフランスの文人の秀れて居る事が諸外國から承認されたのと、また其國語が明かに他の諸國のよりも勝つて居ると認定されたので、之を歐洲に於ける外交上の用語としたといふ處から來たものに過ぎなかつたのである。

三

フランスの有樣は斯くの如くであつたが、フランス以外の文學も亦眠つては居なかつた。即ちイギリスに於ては之が記述的並に抒情的詩人の時代であつて（此時代の詩人には隨分驚くべき朦朧詩を作つたものがある。その內に就き最も頭角を顯はしたものはロバート・ヘリック（Robert Herrick）で、その作一六四八年のヘスペリテズ（Hesperides）は極めて心を惹くべきものである）稍〻散文的な體を以てそ

の努力を害ふ趣はあるがポリオルビオン（Polyolbion）といふ巧みな詩を以て名を博したドレートン（Drayton）からイギリスのマルアルプと言はれ其古典派の先驅となつて居るエドマンド・ウォラア（Edmund Waller）並に該博な智識をもつて居たドライデン（Dryden）に至るまでが此時代である。

此時に於けるイギリス詩人の感興を起したその源泉は從來のものとは異つて來て、全く新しい精神が思想の向勢を定めたのである。從來精神と言へば即ちイギリスに於ける、文藝復興の氣運で又その精神その氣運に依つてイギリスがペトラルカ一派の古文研鑽的精神を鼓舞されたのであつた。然るに之が今一轉化したのである。といふのはフランスの高尙と其趣を一にしたもので、ボアローに依つてフランスに紹介された立派なる調和の感がイギリス海峽を渡り、イギリスを征伏したのである。また前時代の恐るべき過度の勢は制止せられ、空想を逞うして勝手氣ままな事をするに至らしめた、象徵主義印象主義は前代の想像を喜ばしめた空想と共に跡を潛めてしまつた。即ち人の心は過度の刺激を求めぬやうになり、賢明なる形式的規律に服するやうになつた。故に當代のドライデン

の如きはスカリゲル並にカソーボンに依つて説明された古典的ラテン文の規則の外詩の法則といふものはあるべきでないと云つた位になつたのである。このドライデンはその缺點と不完全な點とを持ちながら明瞭に變遷時代を表はして居る。彼は前の奔放な時代と後の古典全時代との中間に生れ、兩樣の思想の間にさまよひ、何れの方から見ても完全なるものとなり得なかつた。併し其作は效果のないものではなかつた。則ち批評と善良なる文體を確定したのは彼である。

世は王政復古になつたが、其間になほ共和政治の夢を見て居た老ミルトンの胸中には、當時なほ崇嚴なる理想主義が活動して居て、一六六一年から一六六七年に至る間に三大作(パラダイス・ロスト、パラダイス・リグーント、サクソン・アゴニステス)を建立したが、之に依つて彼は雄大なる近代詩人の第一であるといふ光榮を永久にかち得た。彼は此大作に依つてダンテ、ホーマーと同列になり、又之に依つてバイブルとの連鎖をつくり、彼をしてユダアの大豫言者と同列に立ち得るやうになつた。彼は頑強な政治家であつたと共に崇嚴なる詩人であつた。それ故に彼の主義とする清教徒主義の詩想を妨遇するに拘はらず、美を感受しそれに對する非常なる愛好心を注ぎ出した。之に依つて彼は一種の除外例のあるべき事を世に示したものである。即ち主義の如何に拘はらず、また周圍の事情が如何に不利なるに拘はらず、人間の心はそれ等を離れて全く自由であり得ると云ふ事を證明して居るのである。そしてこの人心の自由といふ事は先づミルトンの天才に依り其立派なる散文に依り又サー・ジョン・エリオット(Sir John Eliot)に依り唱導され、更にジェームス・ハリントン(James Harrington)の如き空想的熱心家、並に終りをよくしなかつたアルジェルノン・シドニー(Algernon Sidney)の如き熱烈なる人々に依つて等しく唱導せられたのである。

併し共和政の日は過ぎ去り文學の調子は變つて來た。ミルトンのパラダイス・ロストは一六六七年に出たのであるが、之は道義的の憤慨の聲であり、また迫害され征伏されたる清教徒主義の盤であつた。不思議な事ではあるが、イギリスのドシ・キホテと呼ばれて居るサムエル・バトラー(Samuel Butler)のヒューディブラス(Hudi-

bras) も同年に世に出たのであるが、これはクロムウェルの圓頭黨並に耶蘇新敎の長老派を嘲り、革命を起した政治上並に宗敎上の黨派を全く異つたる見解から罵倒したものである(ヒューディブラスといふのは清敎徒たる武士の名で其從士ラルフ (Ralph) と共にセルヴァンテスのドン・キホテと其從士とからその想を得たのである。バトラーは云ふまでもなくその想像に於て優美に於て變化に富める事に於てまた自然なる機智に於てセルヴァンテスに及ばざる事遠いのであるが、なほ風俗特質等を明らかに示すものとして研究の價を持つて居る。ヒューディブラスはイギリス思想の特有であるヒューモアの著しい模範である)。今やスチュアルド王家は再び其祖先の血を流した王位に登つた。其チャールス第二世は王位に即くや則ち世は全く變化し、清敎徒嗜陰なる日に對する反動を起し、上下擧つて全く快樂を追求するといふ風をなした。其變化の著しき手の裏をかへす樣であつた。一朝にして異鄕に轉じ又異つた時代に身を置かれてもこれ程の變化は感じなかつたであらう。言語も亦風俗と共に變つてしまつた。イギリス宮廷の生活は凡ての點に於てフランスのそれに似て來た。趣味流行及び快樂の種類はみな凡

パリ、ヴェルサイユ、サンセルマンを想ひ出さす。チャールス第二世の下に舞踏や運動、獵宴其他華々しい諸〻の式典などが引き切りなしに續いた。此國王の例に倣つて男も女もわれ〳〵が當時の書物に於て讀みまた其戲曲の內に見るやうな濫らなる行跡を平氣で行つて居たのである。

このチャールス王は破廉恥にして又貧乏であつたと云はれて居たが、年々幾何かの金額を得る爲めに其王冠を典し又自分の妹を犧牲にしてまでもロチェスタード伯 (Earl of Rochester) の如き又エドマンド・ウォラー (Edmund Waller) の如き詩人に奬勵を與へた。この內前者は過度の荒亡の爲めに精力を費し三十歲で死し、後者は懷疑說を抱いて不道德と政治上に於ける無節操との完全なる模範とされて居るものである(ウォラーは其初めクロムウェルの德を讃美して有名なる詩を公にし勉めて其辯護をした。然るに風向が變つて王政となるや、それと共に自分の方面をも轉じ、その詩才を以て自己の榮達を計らんと欲した詩人である)。かれウォラーは又無作法極まる喜劇を好み又ウィッチャレー (Wycherley) の鐵面皮を愛した。此ウィッチャレーもまた王の愛人であつたがその處世術に失敗し、負債の爲め七年間牢に

入れられたが、次のジェームス第二世に依つて助けられ更に養老金を下附され保護されて居たのである。是等を以て見るも如何に王政復古時代の風俗が破廉耻や空氣は全く不道徳を示し、その人物はフランスの服裝をしたイギリス人といふ異樣なものであつた。彼はモリエルに私淑して居るといふが其模倣は極めて拙劣なものである。併しその野卑極まるにも拘はらず當時の風俗を明らかに描寫したものとしては最も秀れたものであらう。

清教徒の峻酷な制裁の弛んだ爲めに得たその第一の結果は芝居に於ける自由の復興であつた。王政復古時代に於けるイギリス人の間に起つた變化は著しいものであつて、其當時の人々の父なる人達は只の今迄嚴肅な風采をして風俗を審査して居たのであるに、其子は全く奔逸な生活に入つて行つたのである。清教徒は辱かしめられ賤しめられて都から逃げてしまつた。それでイギリスには東西南北至る處劣等なる俗情は擅まゝに横行し放逸は宮中にもはびこり、人民間には烈しき野獸的慾情が爆發して居た。野蠻極まる秩序を辨へぬ人々はドル

リー・レーン座(Drury Lane)に於ける時世の有樣を反映した芝居を見て居たのである。由來眞面目に內氣で一時の政治上の騷ぎなどでは心を動かされないイギリス人も此時はまるで氣違になつて居た。王公を始め、貴族並に宮中の女官等皆等しく快樂を擅まゝにせんと固く心を定めて居た。公衆を樂しましめ得たものは只當時の非行を忠實に示す喜劇に外ならなかつたのである。

王城の下なるロンドンが斯んな風であつたので、邊阪の地からも平民も貴族も軍人も水夫も其妻をまで同伴して此都の不規律則ち不品行の樣を見物に集まつて來た彼等群集は、ロンドンの町の衛生に害のある事もその折流行して居た疫病などには少しも頓着せず、爭つて芝居の入口に押し合つて行つたのである。

[グリシー氏の十七世紀に於けるイギリスの喜劇の歷史を見よ(A de Grisy, History of the English Comedy in the 17th Century)]。此混亂した社會の趣味及び情熱などを了解するにはウィッチェレー及びその後繼者即ちファークラー、ヴァンブルー、コングリーヴ(Farquhar, Vanbrugh, Congreve)等の喜劇を研究しなければならぬ。

當時の狀態は半はフランス人であつた。ミルトンの微やかな繪畫にも顯はれ

ては居るが、ウィッチェレーの書いたものは更によく更に細かに寫して居る。なほそれと共に當時の事を細かに叙述したペピーの日記(Peppy's Diary)は必要な書物である。

斯くチャールス第二世とジェームス第二世の治世にイギリスの喜劇的才氣の喚發したのは實に驚くべきものであつた。斯の如く多數の才能ある戯曲家を出し又斯の如く偉大なるまた趣味ある觀客を劇場に集め得たのは實にイギリスに於ける絶後の事であつた。

イギリスの戯曲的並に社會的生活に於ける斯の如き狀態はだん〳〵に退いて、ウィリアム三世の時に至つて突然停止してしまつた。其停止した時の事情はこんな事であつた。一人の神學者にジェレミー・コリアー(Jeremy Collier)といふものがあり、これが不平滿々たる清敎徒を集め自から其主領となり、輿論の名を以て劇場に於ける自由奔放なる所行に對して戰を布告した。彼の舌鋒は凡てのものを傷けなければやまないので、コングリーヴ若くはドライデンをさへ見逃さなかつた。況んやウィッチェレーや其競爭者なるトマス・ドルフェー(Thomas D'Urfey)の如き最も

烈しく攻撃される處となつた。一般の人民も亦反動して斯の如き攻撃を喜んで居た。コリアーは之に力を得て更にその要求を增大し國民の不幸及び王家の威嚴の衰亡は皆戯曲作家の責任であると云ひ出した。公衆は勿論之に耳を傾け又其云ふ處を信用した。其元氣に富んだ小冊子は非常な勢力となつて、演劇的道德に新しい標準を定むるまでに至つたのである。當時のイギリス思想は前の突然な趣味と理想の變化の爲め、其強い自制の力を失つて居たが、今や再び舊の平調に戻つて來たのである。茲に於て喜劇は其力を失ふに至つた。之と共に一方には國民性に適つた文學の種類が發達し擴張されて來た。即ち小説が今や戯曲に代り、詩の世界を横領し、散文が作物中の大事な位置を占有する樣になつて來たのである。

それで爰に注意すべき事は散文が今秩序立つて發達して來た事である。其作家には天才のある著名な人々がある。例へばロ・バートン(Robert Burton)の如き一種獨特の道德家はそれである。〔バートンといふ人は一種不思議な人で陰氣な人と交る事をしない人であつたが、それで居て時々非常な賑かな元氣を出す。

彼は其獨特の力ある著書「憂鬱の解剖」に於て自己の思想に於ける此矛盾を解剖したが、その內には不思議な獨想的空想に交ふるにそれを結合させるための幾多の引例を擧げて居る。後のスターン、スウィフト(Sterne, Swift)などはみなバートンから多く鼓吹されて居る。其他此世紀の初めに居るベーコン、それに次ではホッブス等がラテン語を以て哲學上の著作をなして居る。併しそれ以後の哲學者若くは其他の學者等はみな自國語を以て一般の公衆に訴へて居るのみならずベーコンと雖其小論文に於ては極めて美しき又彫琢を盡した英語を以て其思想を著はして居るヴェルラムの男爵であつたフランシス、ベーコンの著作の近世の上に與へた影響の如何は今更ら絮說する必要もあるまい。不幸にして野心に滿ち正義と良心の感とを缺いて居た爲め、其目的の追求にのみ齷齪して居た。從つて其品性はその才氣と比べて遙かに劣つて居たのである。素より智力といふ見解から言へば彼は極めて緊要な人物である。智識を求めて倦む事を知らなかつた人である。即ちその哲學をして煩瑣學派の形式から脫せしめ、哲學と事實の研究とを連結せしめた。彼は人間の智識を委しく分類した。それで縱令彼は自から云

ふが如く新方式の建立者ではないとしても其歸納の方の可能なることを明かにするに大に力めたといふ事は否むべからざる事實である。

ベーコンは實にイギリス文學の特色である論文を發達させた。ベーコン以後半世紀にして此論文を色々に用ひる人が出來、或は巧みに華々しく比喩を用ひて滑稽的議論をなし又流暢なる文體や或は思想の急激なる思想を之にたゝへ、若くは非常に大膽な談論をその簡單なる文字の內に含蓄させるやうになつた。アディソン、スティール(Addison, Steele)に至つては遂にやがて此形を以て論爭の具となすに至つた。

斯く言ふと吾人は今や女王アンの時代に近接して來た。之は即ちイギリス文學中の品位に優美と獨特の容儀とを備へた古典時代である。之から後に至つてイギリスもその國內の隆運と其歐洲に於ける勢力と並に文學美術に於ける其製作物とに依り第一流の國として立つ樣になつたのである。

四

第十七世紀はイタリア文化不振の時代であつた。當時イタリアの國民は全く衰

亡の有樣にあつたのである。蓋しイタリアの思想はその濫發と急速な發育との爲めに一時盡滅したのであらうか。其大氣は呼吸をつまらせるやうで大作を振興すべき元氣に富む空氣は全くなくなつて居た。言語も變化を受け其光彩の度を減じ其文學は即興的の詩がコンセッティ(巧妙なる言ひまはし)か警句か然らずば意想外なる比喩に陷つてしまつた。先づグァリニ (Guarini) が衒學誇張的作風を建てたので之に模倣する拙劣なる作者を多く出し、また既に記したマリニの如きはつまらぬ誇張した言を巧みに用ひる事に於てスペーンの同じ風を尙もカルトリストス (Cultoristos) と技を闘はして喜んで居た。併しながら尙注意を惹くべき才のあつた人がないでもない。中には充分敬嘆に値ひする人もあつた。チアブレラ、グイディ・フィリカヤ (Chiabrera, Guidi, Filicaya) 等は其杼情詩に於て當時の惡趣味を超脫せんと欲して居た。又サルヴァトル・ローザ及びボッカリニ (Salvator Rosa and Boccalini) には其諷刺詩に於て明快と頓才を示し、ベルニ (Berni) は其滑稽の作風に於て大家たり得る資格を示して居た。併し是等は皆孤立した二三の例に過ぎぬので、フランスから各種の作風を紹介して居た平凡なる作者の數に比べては

實に言ふに足らぬのである。稍實質のある又力ある著作は大抵習學若しくは科學の如き特殊の問題に關するもので、且つ多くはラテン文を以て書かれて居る。その內最も著名なるものはガリレオ・カッシニ、トリツェリ (Galileo Cassini, Toricelli) 等である。

之に反してスペーンは其政治上の威力が衰へ、王宮は睡眠の狀態にあり、僧侶の行動は非愛國的になり、社會一般は貧窮と困苦とに攻められ、國民の元氣は衰亡してしまつたに拘らずその文學上に於ける勢は遙かにイタリアを凌駕して居た。實際十七世紀と十八世紀との間に於てスペーンは戲曲若くは傳奇に關する作物に於て漠大なる數を出して居るのである。

戲曲は社會の狀態を最もよく表す者であると云ふが、當時のスペーン戲曲程よく此事實を證明して居るものはない。國民としてスペーン人は極めて觀覽物を愛好する性質を以て居る。十七世紀の劇場はこの愛好心を充分に滿足させる場所であつた。特に宗教劇が民衆の心に合つた。此無智なる且つ事物を容易に信用する人民を喜ばしたものはかの奇蹟劇であつた。學問は彼等の好まぬ處であり、

批評は只彼等を倦怠せしむるのみで、彼等は論議よりは傳說の類を好み、學問上の新說などよりは奇蹟の幕の入つたソートル・ダム・デル・ピラー若くはサン・イシドル(Notre-Dame del Pilar or San Isidor)の劇を好んだ。アウト(Outos)と稱する一種の神秘劇が澤山と出來た。其狀景を一言すると、先づ天が開ける、光榮と愛の太陽が神の選びたる民を照らす、それより天界の光景が顯はれる、といふやうな工合である。フランスの神秘劇と同じ樣な宗教劇が或は聖母の爲めに或は聖僧若くは各市の守り本尊となつて居る聖僧に捧げられる。それが又少なからず人々の想像に訴へる。此等の宗教劇は不信心、異端若くは正統派に屬せぬ人々に對しては頗る猛惡な態度を示し、正統の宗教を信じて居るとさへ言へば惡人でも非常に寬大に取り扱はれ、其罪惡を赦されるといふやうな事を敎へるやうに作られて居る。其作者は多く僧侶等であつたが、彼等は皆嚴格な神學の敎育を受けて居たので、何れも敎會の功績殊勳等を其作中に稱讃して居る。且つ其作は凡て趣向若くは意匠に富み頗る統一して居るが、併しその人物の資格の發達に至つては頗る論理に合はぬ荒唐なものである。作家は其作の內に耶蘇變形の場(耶蘇

の姿をかへて神になる處)を設け又それを幾度も用ひて觀客の氣に入らうとする。觀客は又表面こそキリスト信徒であるが其本性は異敎徒(ベーガン)と同じで舞臺の華やかなのを好むのである。

斯かる作家の內にも或るものは此アウト即ち宗敎的戲曲のみを以て安んじて居なかつた。才能のあるものは實際の人生に於て人の心戀に深大の感銘を與ふべき秘密が潛んで居るものとなし其方面の開拓を試みた。又彼等は喜劇に就て色々な狀情(シツチーエーション)に關する變化を示し、或は巧みな計略を用ひ或は自然な賑かな光景を點出して人を笑はした。

それ等の中での隨一はカルデロン(Calderon)でその名聲の擧つたと共に彼は戲曲家中極めて緊要な位置を占めて居る。其作は自から東洋的思想の跡を示し、可笑しな戀の計略から最も暗黑なる情熱に至るまで人情の廣い範圍を示すものである。其喜劇の或るものは輕快な人物の極めて巧みなる牧歌であり、又或るものは獸力を示し其簡單にして烈しい對話は尋常ならざる結果を人心に與へて居る。カルデロンは其觀察力の强大であつた爲め同く佛奇的のものを取り扱つ

て自からそれに哲學的思想を含ましめる事を得た。彼又慾くべき才能と勢よき感興とを持つて居たので、スペーン人特有の思想とその頑強なる主義とを巧みに扱ひ之を藝術化する事を得たのである。是等の特質の爲め彼は現在のみならず未來に亘つての大家である。

カルデロンの競爭者には前後してロペ・デ・ヴェガ、ジョン・ルイヅ・デ・アラルコン、ティルソー・デ・モリナ、及びギュリエン・デ・カストロ (Lope de Vega, John Ruiz de Alarcon, Tirso de Molina, Gullien de Castro) 等があつて、其手腕に於ては素よりカルデオンには及ばなかつたが何れも一事業を成就せんと力めた。そして其事業といふのは以前のナハロー及びロペ・デ・ルエダ (Noharro, Lope de Rueda) 等の麁笨なる戲曲を改めてスペーン戲曲に特色を與へる文藝上の個性を與へる事である。カルデロン及びロペ・デ・ヴェガの次に位し更らにアラルコンと伯仲の間に居るものはティルソー・デ・モリナである。またアラルコンは不幸にして生前其名を稱揚するものなく、死後二世紀にして始めて世間から了解されたのである。其戲曲は異樣な不規律なものであるが併し生命と才氣とに富んだもので實際に滑稽的な力を示して居るも

のである。且つ彼は劇場を以て人目を樂しませると共にその詩想を發揮すべき手段の場と考へて居た。併しロペ・デ・ヴェガの戲曲に關する考は更に廣く人生を忠實に觀て、その著作に現實的深遠な心理上の基礎を與へんと力めた。傳ふる處に依ると彼の著作の速力は極めて早くあつたといふが、少くとも其早い速力にて成し得る限り人生を忠實に觀じ且つ心理的の基礎に立つたのである。實際彼の作にはその深く考へたのでないものに於ても立派な狀景がある。その詩は又ティルソー・デ・モリナのよりも澤山にあつて時々其觀念の偉大なるを以て人を驚かす事がある。

併しスペーン人の想像は全然戲曲に限られて居た。其才力は同じ文藝とは云へ、純文學以外に於て著しく示されて居た。古典的作風を採つて居たアントニオ・デ・ソリス (Antonio de Solis) は歷史を書くに小說の如き魔力を以てした。歷史家、百科字典家、政治文學家等は良心研究家と共に無數にあつた。エスコバール (Escobar) と其派は良心に關しての其精神的指導者であつたが、その巧みに處世的の利害と宗教の要求とを一致させる事に於て勝れて居た。更に又惡事をなしても表面

を修飾して置きさへすれば良いといふ都合のよい格言を辯證するに嚴密なる説明と廣大なる論法を以てし、これを正當なるものと見せる事などに至ては實に天下無雙と言ふべきである。斯くて斯かる神學上の詭辯主義と共にピカレスク(Picaresque)の作風(勇壯なる無賴漢のやうなものを主人公とし、其行動を書く一種の小說の淫逸をも助長する事になつた。

今ピカレスクなる一種の小說の起原を案ずるに、第十六世紀に於てフルタード・デ・メンドッァ(Hurtado de Mendoza)と其同時代のマテオ・アレマン(Mateo Aleman)がスペーン半島に於ける獨得の人物を筆に現はして特殊の文學を起した即ち前者の作は稍滑稽を帶びた大作でラザリロ・デ・トリメス(Lazarillo de Torimes, 一五五三年出版)と云ひ、後者のは多少自傳の樣なものでグズマン・ダルファラーシの冒險(The Adventures of Guzman d'Alfarache, 一五九九年出版)といふのであつた。これがピカレスクといふのが流行の作風となつた。是等の作は又願るよく當時の社會の狀態を表はしたもので、向ふ見ずの冒險的精神、僧侶の僞善、各階級の怠惰の風をよく表はして居る。當時不運か此富の國を支配して居た。そして最早富の國で

なく窮乏の國となつて居た。アメリカ發見の當時に於て遠征に依て得られた掠奪物は最早なくなつて居た。餘りに野心に驅られた結果は貴族も亦行吟詩人の輩も共に仕事をしない程になつてしまつた。仕事をしないで生活せんとすれば勢ひ欺僞か計略か或は賭博的の事に依るより外に道はない。こゝに於てか何事も恩惠に依つて處理される事になつた。各種の冒險家、貧乏な紳士、司法警察官放浪生活の人々、學生、醜業の婦人、奴僕、竊盜、惡漢、無賴漢、浮浪の徒、乞食等の類は凡てその頓智と欺僞とに依つて生活して居た。スペーンの稍大きな町を步けば必ず此種の人物に出會ふ。即ち文人はそれを捕へて描いたのである。これが即ちペレズ・デ・レオシ、ヴィンセンテ・エスピネル(Perez de Leon, Vincente Eshinel, Rojas, Guevara, Santos Quevedo)等の作家に無盡藏なる材源を與へた次第であるが、此內最後のクェヴェドーは一般によく知られた作家で、他の人々とは自ら區別して見なければならぬ人である。

彼は該博なる學問と豐かなる想像とを有し、驚くべき程變化に富める點に於てスペーン著名の一人となつた。彼はまた外交官で大使ともなり、オッシュナ(Ossuna)

公の朋友でもあり、また愛人でもあつて、當時、時局の要件にはみな携はつて居た。またその運命も變化極まりなく、今や名聲赫々たるかと思ふと忽ち墮落してしまふ。その變化に富める一生は先づ文學の上に於ける成功を以て始つたのであるが、この變化多き生活の合ひ間毎に歷史の研究やら小説やら道德的論文並に滑稽やらを書いた。その內最後に云ふ詩に至つてはその大部分を失ふに至つたのである。彼はまた諷刺に長じ極力學識を辯護し、また惡趣味の橫溢を制した事に依り、またその滑稽に依りその巧みなる鋭い人を噛むが如き皮肉に依り、吾人はかれを大滑稽家アリストファネス、ルシアナス、ラベレー、スウィフト及びダニエル・デフォ(Aristophanes, Lucianus, Rabalais, Swift, Daniel Defoe)等の後繼者として視るも不當ではないといふのである。

五

吾人は今歐洲文學の鳥瞰景をつくるにオランダを除く事は出來ぬ。オランダは光榮ある過去を誇り得る國である。イギリス、フランスに於けるが如く十七世紀はオランダに於ける燦くべき智的發達の時代であつた。當時オランダ共和國は

その道德上政治上偉大なる頂點に達して居たのである。

抑オランダは一小國民に過ぎず、或は漁夫若くは商人を主とした民であつたが、不撓不屈の努力を以て自然と戰ひまた人間とも戰つて勝利を博した。彼等は終にその領土を安全にし、海水の浸入を防ぎ(低地にて常に海水の陸上に寄せ來る事を防いだのである)運河を開き、疏水工事を完うするなどして、先づ自然に對して勝利を得、更に轉じて外敵を國外に逐ひ、自國の宗教的並に國民的獨立を確定し、地球の端に至るまでその海水の名聲を轟かした。その香橙(オレンジ)の旗はスマトラ、ジャワ、ヒンドスタン、セーロン、ニュージーランド、ブラジル並にギアナから喜望峰(Sumatra, Java, Hindostan, Ceylon, New Zealand, Brazil, Guiana, the Cape of Good Hope)に至るまで各所に飜つて居た。ヴァン・トロンプ、パイエット・ハイム並にオプダム(Van Tromp, Pietheim, Opdam)等の名はオランダの國旗をして海上の威力を得さし、また陸上に於てもオランダはルイ第十四世及びチャールス第一世の聯合軍と對抗して居た。また歐洲に於ける外交界に於てもオランダ著名の大官デ・ウィッ(Jan de wit)の名は列國著名の國王の間に立つて遜色のないものであつた。オランダの名聲を博

じたのは單にその權力を有して居たといふ事のみでなく、學者の住所でありまた他の諸國に於て禁遏されて居た自由がこゝに得られたからである。イギリスの迫害を受けた舊敎徒はフランスに來て愛國者としての行動と、思索との自由を得んとした時に當つて、其ルイ第四世並にその顧問等の爲めにフランスを逐はれた新敎徒は遁れてオランダに迎へられて居た。ベイル(Bayle)の如きはオランダの斯くの如き好遇を稱して亡命者の巨船と云つた程である。又アムステルダム、ロッテルダムの印刷所は他の宗敎並に政治上の壓制の行はれる國に於ては なし得べからざる幾多の文書を市中に供給した。

前世紀に於ては宗敎改革の說敎が爭論の流を起したが、其言論の機關となつたものはラテン語であつたが、それと共にジェスイット敎派の確實なる基礎の上に發達した古典的の敎育は幾多の學者、即ち神學者言語學者飜譯者等を喚び起した。それ等が又多くはオランダの人で、それが此國の名譽となつて居る〔エラスマス、エヴェラルディ及びユスタス・リプシウス(Erasmus, Everardi, Justus Lipsius)等である〕。又熟練なるラテンの詩文を作り得る者はホレースやヴァージルを模して古代文

學の同好者の心をつないだ。その他のものはフランス人なるジャック・ド・タウ(Jacques de Thou)の例に從つてリヴィの用ひた古い言葉をかり、注意すべき歷史的著作をなした。グロシアス、ボラシト、ヤンセン(Grotius, Bolland, Jansen)等はその法令上並に神學上の著作を以て大に評判を得た。スピノザの如きは貧困のなかに退隱してその理想とした凡神論の一大系統を建てやうとしたのであるが、それと共に當時の才氣に富めるものは古のローマ人の用ひたその國語を以て古い大作を模倣して頭角を現はさんとして居た(スピノザの著作はその死後に至つて出版されたので、その學說もまたその死後までは世に知られなかつた。その大作は倫理學で、之に依り此近世唯物論者の先驅たる幾何學者の全系統を覗ふ事が出來る。スピノザは其門下をフランスに持つて居なかつたが、これに反してドイツに於ては生理學者等がかれの說から生命の普遍說を引き出し、又歷史家はその歷史說を、哲學者は所謂將來の眞正なる哲學に關しての豫想を得たと云つて居る)。

オランダは今示した如く歐洲に於ける自由思想の隱所であつた事を以て滿足せず、また其社會の狀態からラテン思想の保護者となつて居た。則ち博學廣識に

して實に近世に於ける國際の義務に關する說を建立したといふグローシウス(Grotius)に於てはラテンのリュカン(Lucan)の高い調子、セネカの智力を見るべく、ダニエル・ハインシウス(Daniel Heinsius)に於てはヴァージルの高尙な詩調を見、また其子ニコラス・ハインシウス(Nicholas Heinsius)に於てはオヴィドの作風の妙を見る事が出來る。更にブレーキウス(Braekius)に至つては最もよくプロペルシウスを模擬したものである。更にオランダに接してフランダーはその競爭者たる名聲を得んと欲して居た。そのウィリアム・ベカン(William Becan)の牧歌は、その彫琢の跡を示さぬ立派なる模範となつて居る。

併し斯くラテンの思想に感化され之を重んじたとは言ひながら、それが爲めに國語が犧牲に供されるやうな事はなかつた。深い祖先以來の精神に涵養せられたる愛國的思想は固く保持され、少しも變化を受けるやうな事はなかつた(これより以前にコルンハート、ヴァン・ブレデロード(セント・アルデコンデ、マルニックス、ピーター・タセナス、ローレンス・スピーゲル、レーメル・ウィッシェル並にその二人娘アン及びマリー等は力を合せて十六世紀の學者並に文人(ヒューマニスト)の一體の傾向に對し、反對的の働きを起しオランダ國詩の標準を立てんとした事もあつた)さてオランダの主要なる詩人は如何な人かと言へば、ヴォンデル、カッツ及びフーフト(Vondel, Cats, Hooft)等を擧げなければならぬ。

其內にもヴォンデルは最も天才のあつた詩人で今日もなほ其主な詩人とされて居る。ミルトンより早く出て而もミルトンのパラダイス・ロストの主旨と同じ大問題に基礎を置いた惡魔(Lucifer)といふ悲劇の大作を作つた。即ちこれは惡魔の墮落並に天と地獄との戰を歌つたものである。コンネーユ・フーフトは詩人としてよりも寧ろ歷史家として重んぜられて居るので、その元氣とその莊重な趣とその明確にして信賴するに足る點がオランダのタシタスと言はれる程であつた。併し三人の內でもヤコブ・カッセは最も世間に歡迎された文人であつたが、オランダに於ては第二のバイブルとして考へられ、平和なる家族に必須の書物とされて居る。翻つてヴォンデルの事を一言するが、かれは一六三七年にギスブレヒト・ヴァン・アムステル(Gisbrecht Van Amstel)といふ國民劇を書いてアムステルダムの劇場を開いたのであ